

性隷少女

せい
れい
しょう
じょ

裏調教編

Faker

01

憧れの人

ある日、友達のS君に

「いいところ見つけたから行こうぜ」と言われ

連れて来られたのはとある駅。

僕の家は学校に近いので駅を利用することは

ほとんど無かった。

「ここの階段、パンチラがよく見えるって有名なんだ」

S君はそう言って笑った。

「そんなのダメだよ」

僕はそう言ったが興奮気味のS君に引っ張られ

物陰に一緒に身を隠す。

「ほら、来たぞ」

S君の視線の先に僕らと同じ学校の制服の

女子が歩いてくる。

「綾波さん・・・？」

同じクラスの綾波さんだ。

綾波さんは電車通学なのか。

「おい、行くぞっ」

綾波さんが階段口に入ったことを確認して

僕たちは後を追った。

他に人は居なく、綾波さんは階段の中程を歩いている。

距離を置いて僕らも続く。

フワッ

一瞬、綾波さんのスカートが広がって

白いパンツが見えた気がした。





S君と僕は顔を見合わせ、身体を反転させると
急いで階段を下りる。

「見えたっ 見えたよなっ？」

S君は興奮して目を見開く。

「う、うん、多分、白かったよね・・・？」

僕は恐る恐る確認する。

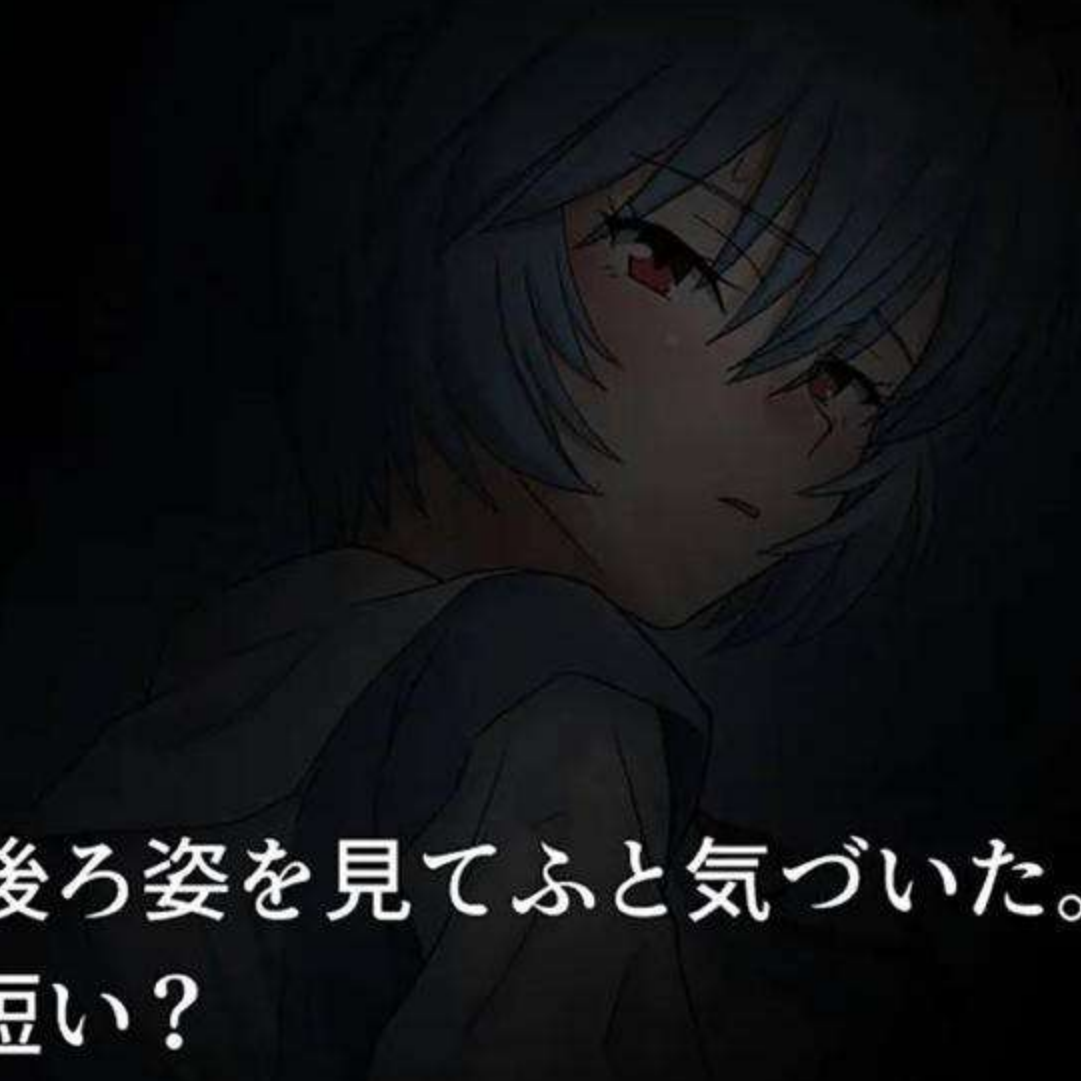
「うんっ、うんっ、綾波、いいよなあ」

同じクラスの女子のパンツが見れたことで
S君は興奮が収まらない様子だ。

綾波さんは無口でクラスでは目立たないけど
かわいいし男子に人気があるのは間違いない。
実は僕も憧れている。



あれからS君にまたあの階段に行こうと
何度か誘われたけど、僕は断っていた。
同じクラスの綾波さんのパンツを見てしまったことに
罪悪感を感じていたのだ。
あれから教室で綾波さんを見るとドキドキしてしまう。
そんなある日、駅の方角に歩く綾波さんを見かけた。
僕の心臓がドクンと高鳴る。
「また見れるかも」
良くないと思っけていても、憧れの人隠された部分が見れるかもしれないという欲に勝てず
僕は綾波さんの後を付いて歩いた。
綾波さんが階段口に入った。
僕も急いで後を追う。



綾波さんの後ろ姿を見てふと気づいた。

スカートが短い？

綾波さんが階段を上る度にスカートが
フワッフワッと広がる。

「え？」

僕の目に信じられないモノが映る。

(綾波さん、パンツ穿いてない？)

揺れるスカートの下に見えたのは白いお尻。

(いや、Tバックのパンツだ)

彼女が穿いていたのはお尻に深く食い込んだ
黒いTバック。

白い尻肉がむき出しになってプルプルと揺れている。

(うわぁ、こんなのって・・・)

あまりの光景に目が離せなくなる僕。

息が荒くなり、おちんちんが痛いほど硬くなる。





踊り場に上がった綾波さんが不意に
こっちをチラリと見た。

「あっ」

一瞬僕と目が合う。

綾波さんの真っすぐな目。

「何か、用？」

綾波さんの小さな声に

不自然に硬直してしまう僕。

「ご、ごめんなさい！」

咄嗟に謝って階段を駆け下り

その場から逃げ出してしまった。

(逃げたら余計に怪しいやつじゃないか…)

(たまたま帰り道が同じだったことにも出来たのに)

僕は落ち込み、反省しながら家に帰った。

綾波さんとあんなことがあってから
家でも学校でも綾波さんのことが
気になって仕方が無い。

綾波さんのお尻を思い出しては
オナニーをしてしまう。

(ああ、綾波さん・・・)

でももう嫌われているかもしれない。

僕は悶々とした日々を過ごした。

それから数日経ち

僕はまたあの駅に来てしまった。

「綾波さん・・・」

学校では声を掛けられないのに

こんな待ち伏せみたいなことをして

悪いこととは思っていても

高まる気持ちを抑えられない。

「来たっ」

いつものように駅に向かって綾波さんが歩いてくる。
興奮した僕はつい焦って身を乗り出してしまう。
綾波さんが僕を見つける。

「あ・・・」

一瞬目が合うが、綾波さんは何事も無い様子で
階段口に入ってしまった。

「どうしよう」

後を追うのが怖くなったが、もう見られているし
ただ後ろを歩いただけなんだから。

自分に言い訳をしながら階段へと向かった。

階段口に着き、上を見ると綾波さんが
立ち止まって振り返り、こっちを見ていた。

「あ・・・」

僕は思わず視線を反らし、俯いてしまう。
あんなに何度も後ろから近づかれていたら
気づかれるに決まっている。

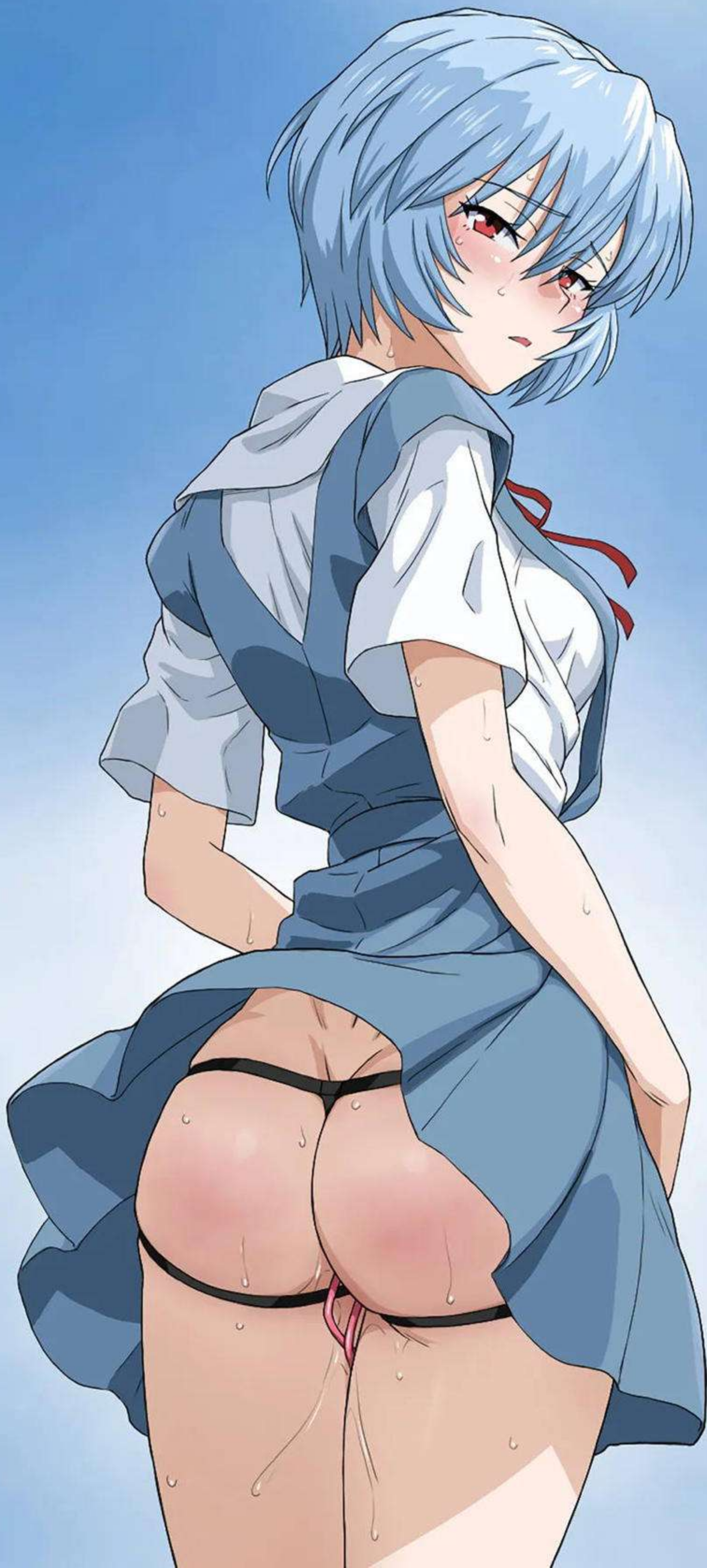
「そんなに見たいの？」

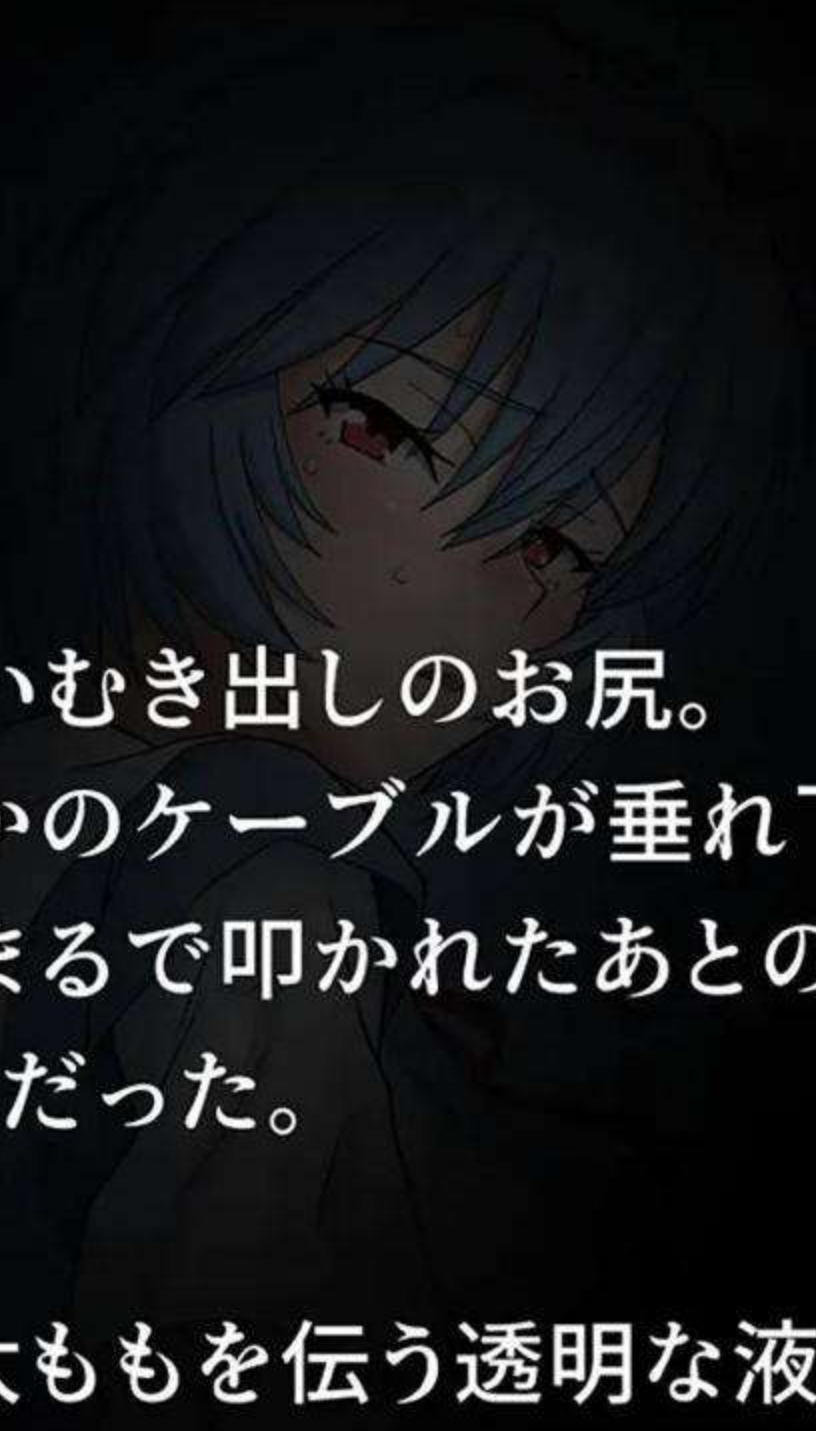
綾波さんの口から意外な言葉が。

「えっ？」

僕が驚いて顔を上げると

綾波さんの一段と短くなったスカートの中が目に入る。





下着を付けていないむき出しのお尻。
お尻と股間から何かのケーブルが垂れ下がっていて
綾波さんのお尻はまるで叩かれたあとのように
赤く腫れているようだった。

「え・・・」

そして綾波さんの太ももを伝う透明な液体。

「うあ、あ・・・」

僕のおちんちんが張り裂けそうなほど硬くなる。

僕はその場から動けなくなった。

「もういい？」

綾波さんは少し恥ずかしそうに顔を赤らめて
スカートを押さえると、階段を上って行ってしまった。

頭の中を色んな考えが巡る。

(綾波さんに何があったのか)

(誰にやられたのか)

(僕の綾波さん・・・)

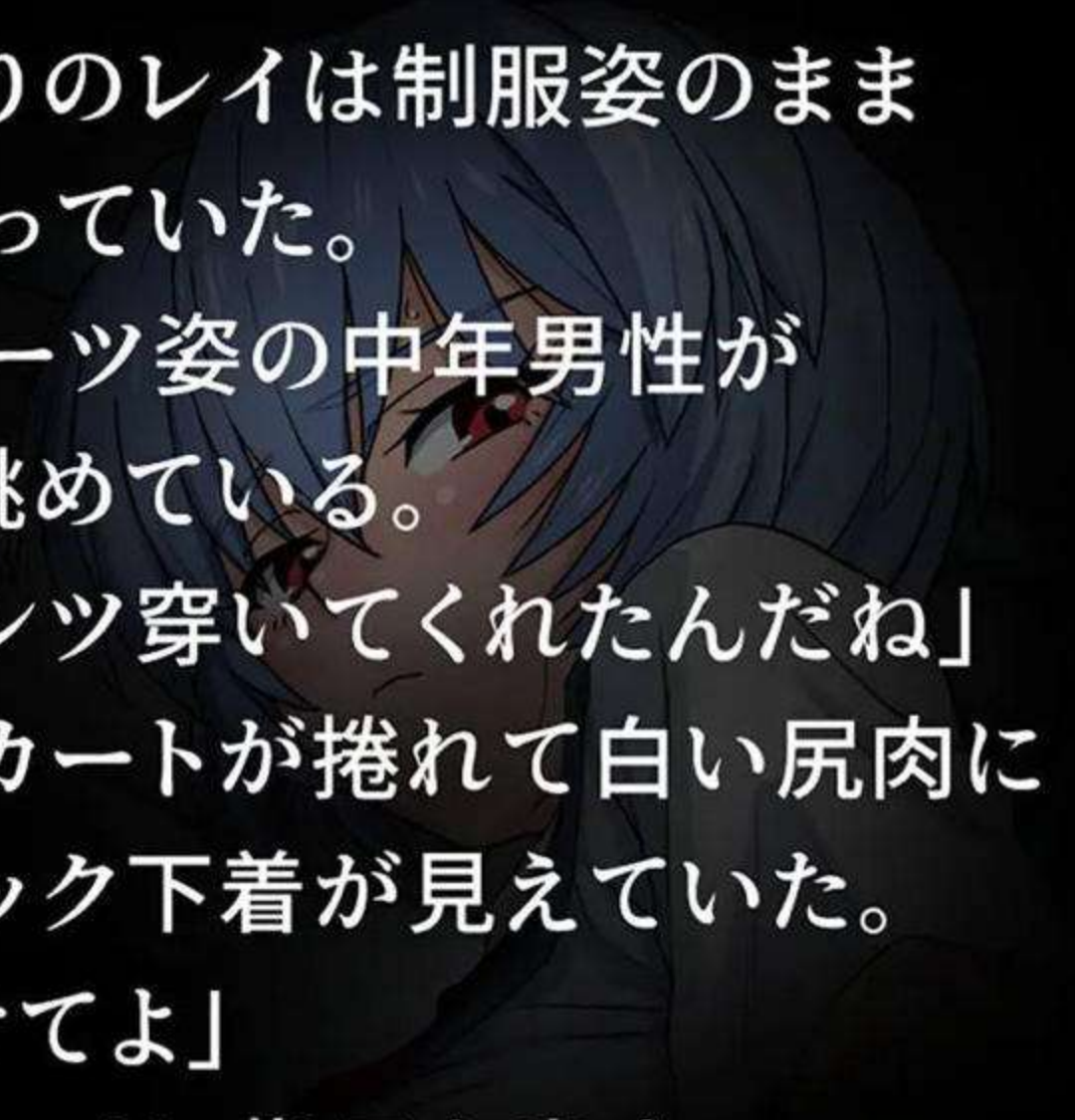
僕は階段口を飛び出し闇雲に走った。

目に焼き付いた綾波さんのお尻と、あそこ・・・。

僕はいつの間にか射精していた。

02

放課後の約束



レイの自室。学校帰りのレイは制服姿のまま
ベッドの上に寝そべっていた。
部屋にはもう1人、スーツ姿の中年男性が
ベッド脇からレイを眺めている。
「レイちゃん、そのパンツ穿いてくれたんだね」
寝そべったレイのスカートが捲れて白い尻肉に
食い込んだ黒のTバック下着が見えていた。
「お尻広げてよく見せてよ」

男は服を脱ぎながらレイに指示を出す。

「はい・・・」

レイは小さく返事をして足を開き
尻肉を片手で持ち上げる。

布面積の小さなTバックの下着は
女性器を辛うじて隠しているものの
尻肉に食い込んだ部分はほぼ紐で
レイが尻肉を開いたことで

肛門はほとんど見えてしまっている。

「いいね、レイちゃん、すごくエッチだ」

男はレイの足元からベッドに上り、
開かれたレイの股間に見惚れている。

レイは顔を赤らめ、さらにグイっと尻肉を拡げる。

「黒も良く似合ってるけど、もっと派手なものも
見てみたいな。今度またプレゼントしてあげるよ」

「・・・ありがとうございます」



「さて・・・」

男はレイに手を伸ばすと
その白く和らかな尻に両手を添える。

「ん・・・」

男の力強い手の感触と熱さにレイは
身体をピクリとさせ、小さく声を漏らす。

男がレイの下着に触れると

じわっと濡れた感触が指に伝わる。

「ずいぶん濡れてるね、Tバックで
エッチな気分になっちゃったかな？」

男は下着に指を引っかけ横にずらした。

グイッ

「くうっ」

レイの女性器と肛門が男の目に晒され
声を上げるレイ。

さらに男はレイのおま○こを
両手の指を使って広げていく。

にちゃっ

ぬめった水音を立て左右に開かれるレイの恥肉。

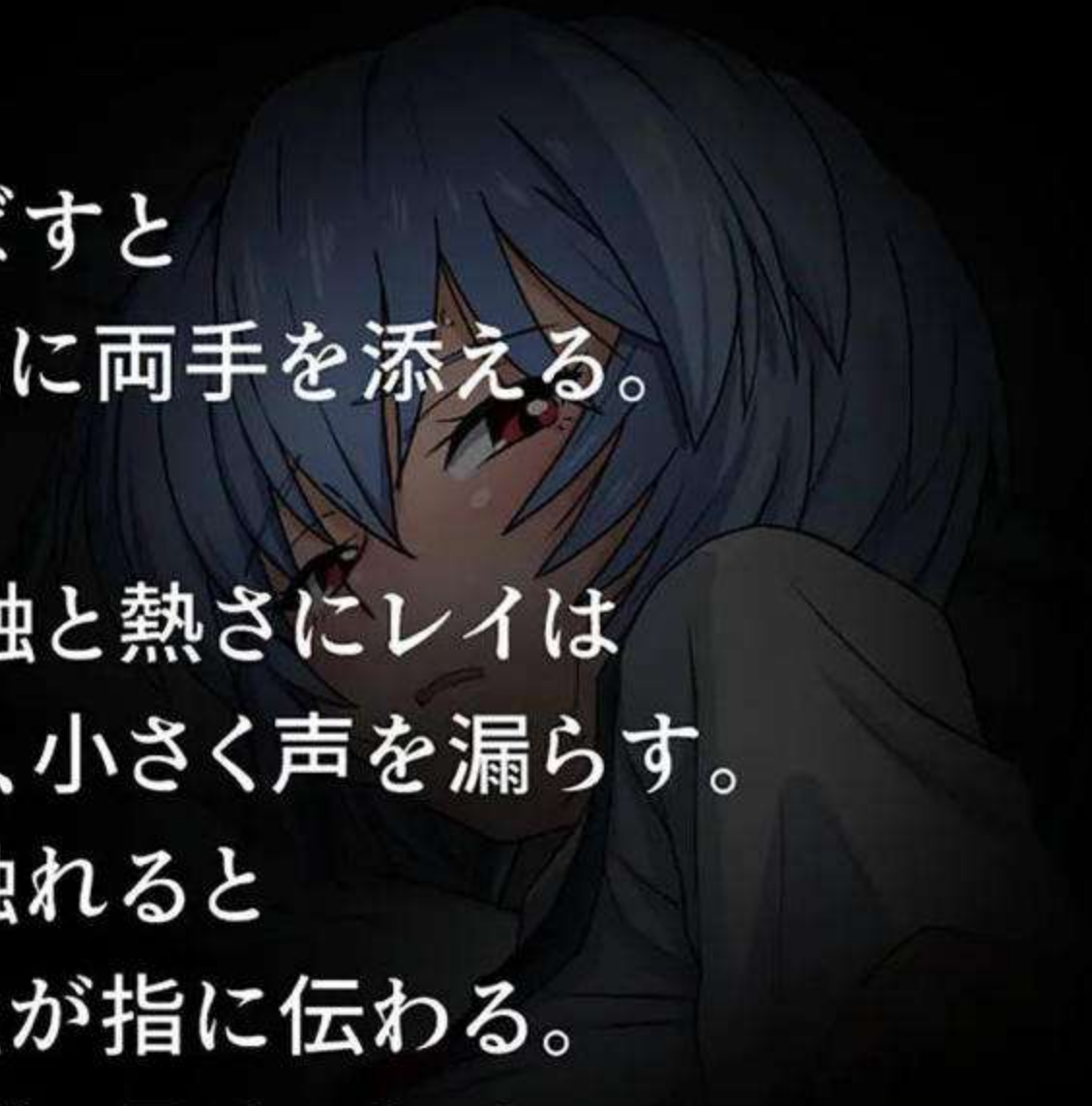
膣口がぽっかりと口を開ける。

「こんなにヌルヌルにして、いやらしい娘だ。

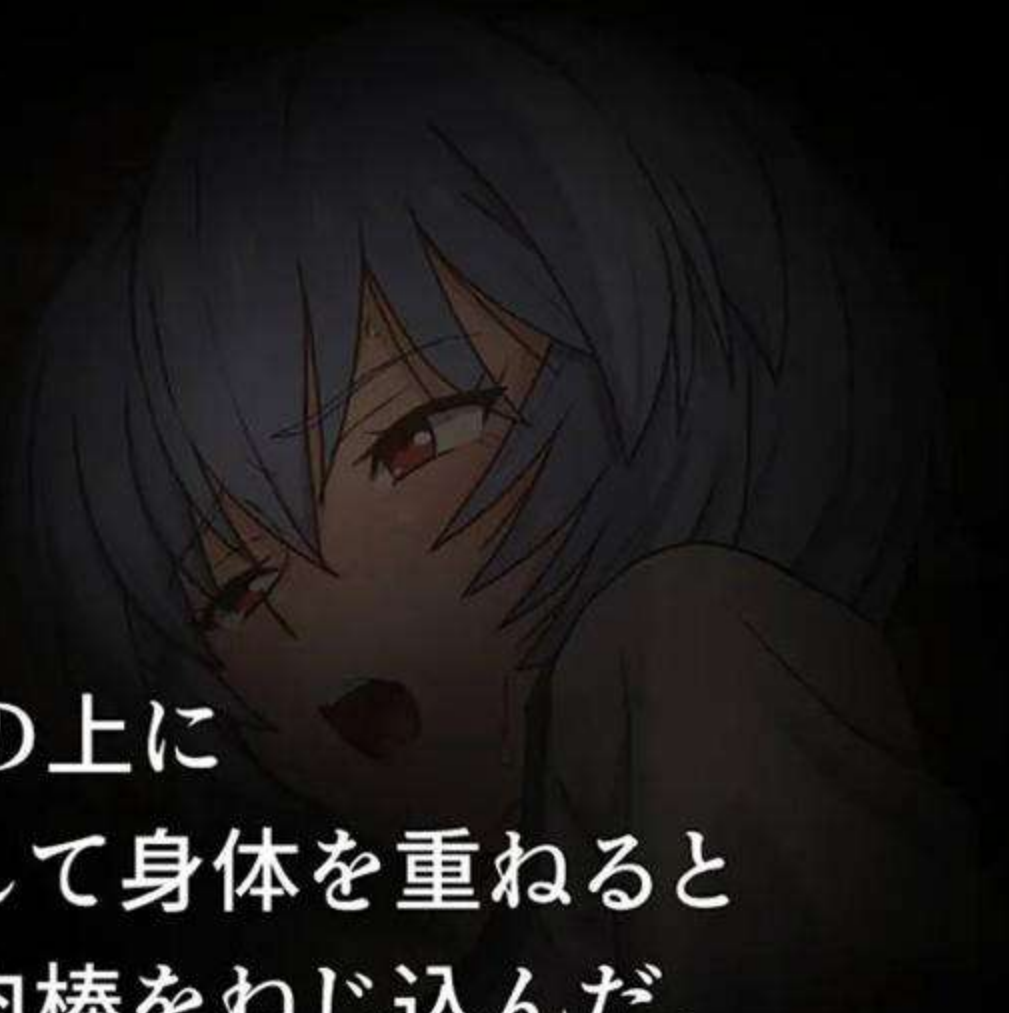
今日もたっぷりと中出ししてあげるよ」

男の股間でビクビクと上下する肉棒がレイの目に入る。

その先端からは透明な粘液が溢れ出していた。







男は寝そべったレイの上に
覆いかぶさるようにして身体を重ねると
レイの膣に熱く硬い肉棒をねじ込んだ。

ヌブブブッ

「あはあっ！」

メリメリと膣が広がる感覚に
レイが大きな声を上げて顔を歪める。
男が腰を突き出すと、大きな肉棒が
レイの中に深々と潜り込む。

ジュブッ ジュブッ ジュブッ

「ハアッ ハアッ レイちゃんのおま○こ
熱くて、狭くて、最高だっ」

ズグッ ズグッ ズグッ

男は腰をリズミカルに動かし
レイの膣肉の感触を味わう。

「んっ、はっ、うっ、はああっ」

レイも動きに合わせて声を漏らし、目を潤ませる。

あはあ

あっ

んはあ

グ
グ
グ

グ
グ
グ

グ
グ
グ





「ハアッ ハアッ ハアッ」

男の腰と息遣いが速度を上げていく。

ジュブッ ジュブッ ジュブッ

「くううっ、んっ、あっ、ああっ」

レイの声も大きくなる。

「ハアッ な、中にっ、出すぞっ！」

男は苦しそうな声を上げると

レイの尻に腰を密着させた。

ビュルルッ ビュッ ビュビュッ

熱い精液がレイの胎内奥深くに発射された。

「ああっ、くううう！」

男は腰をガクガクと震わせ

すべてをレイに注ぎ込む。

レイの下腹部に熱いものが広がっていく。



はっ

あっ

あああっ

ツ
ツ
ツ

ツ
ツ
ツ

ツ
ツ
ツ

「はあ、はあ、はあ・・・」

男の肉棒が抜かれたレイの膣はぽっかりと口を開けたまま白い粘液を垂れ流す。行為を終えたばかりのレイのあられもない姿を見ながら、男は精液とレイの愛液にまみれた肉棒をぬちゃぬちゃとしごく。

「レイちゃんお待ちかねのアナルだよ」

男はそういいながら再びレイに申し掛かると粘液にまみれた肉棒をレイの肛門に押し込んでく。

ムリッ ズッ ズグググッ

「あううう!!」

レイの一段と大きな声。

肛門を無理矢理広げて入ってくる熱いものに歯を食いしばって耐える。

ズグッ ズグッ ズグッ

肉棒をきゅうきゅうと締め上げてくる

レイの肛門を楽しむ男。

「うっ、んっ、くうう！」

ゴリゴリと肛門を抉られ身体をビクビクと震わせるレイ。

「お尻がガバガバになるまで犯してあげるよ」

「はいいっ、くううん!!」



03

震える足



とある施設の薄暗い廊下をフラフラと歩く人影。

真っ赤なプラグスーツを着込んだアスカだ。

「ふうっ、ふう…」

アスカは壁の手すりを掴みながら

震える足でゆっくりと進む。

細身で手足が長くスタイルの良いアスカ。

身体に密着したボディスーツを着込んだ姿で

腰をくねらせながら歩く。

「なんでわたしがこんなこと…、んんっ!!」

アスカの身体がビクビクと震え、歩みが止まる。

「ぐうう！ こんなのキツ過ぎるわよ…」

顔は紅潮し、額から汗が流れ落ちる。

アスカは下腹部を押さえながらまた歩き始める。



ふうっ

んんっ

ふうっ

がッ

がッ

アスカは体内に性感帯開発用の器具を挿入されていた。
1つは膣内、もう一つは肛門内。

膣内に挿入された器具は筒形で
モーターによって回転と振動を繰り返す。
動きはランダムで止まったかと思えば
しばらくしてまた動き出す。

やわらかい樹脂製だが尖った先端が
子宮頸部に潜り込み、時間を掛けて
子宮口を拡張していく。

「んぐっ、はあ、はあ、もう、だめ・・・」

肛門に挿入された器具は長大な棒状で
直腸を抜け結腸にまで入り込んでいる。

こちらにもモーターが仕込まれアスカの内臓に
振動を与える。結腸内で器具が暴れるたびに
アスカは意識が飛びそうなほどの快感に襲われる。

「ひぐうう!! んいいいい!!」

アスカは白目をむき、涎を垂らしながらも一歩
また一歩と足を出す。

アスカの目的は研究室にたどり着くこと。

そこまで行けばこれを抜いてもらえる。

今はそれだけを考えて歩みを進めていた。

研究室で更なる開発を施されるとは思いもせずに。



04

隠されていたものは

体操部の練習が終わり、他の部員たちが帰った後
レオタード姿のレイは男子の先輩に手を引かれ
男子更衣室へと入った。

中にはレイと同学年の部員の男子が2人。

レイの姿に驚き、もじもじとしてる。

「おう、お前ら、待ってたか」

「は、はいっ」

先輩が声をかけると2人はかしこまって直立する。

「お前ら、レイが好きなんだろう？」

先輩からの核心を突いた質問にオドオドする2人。

「はい、それは、まあ・・・」

レイを目の前にして照れくさそうに答える。

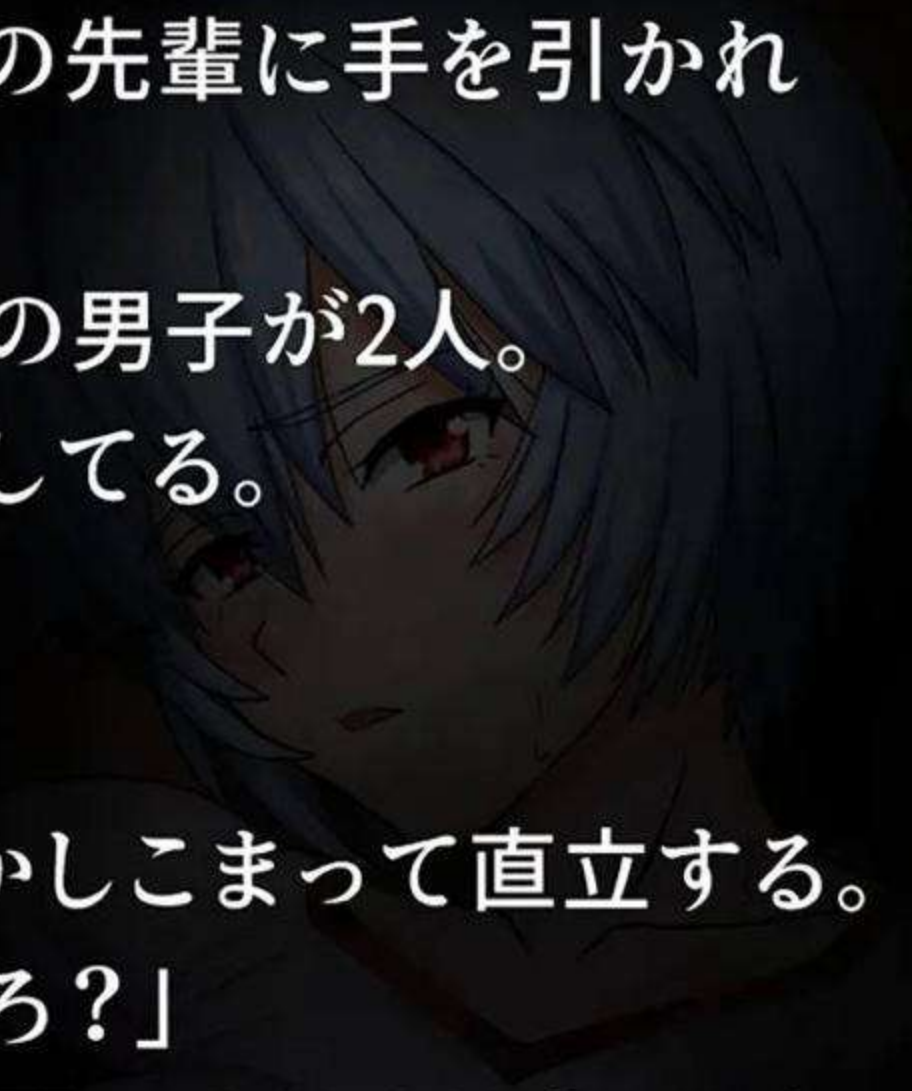
レイは大人しい性格から目立つ存在ではないが
整った容姿とその儚げで他を寄せ付けない雰囲気
に惹かれ、憧れている男子は多い。

「いいものを見せてやるって言ったろ？」

いつも横目に見ていた憧れのレイがすぐ目の前にいる。

汗ばんだ肌、濡れて肌に張り付いたレオタード。

間近で見るとあまりに刺激が強い。



「レイ、そこに座れよ」

先輩はレイにベンチに座るよう指示を出す。

「はい」

レイは言われるままに腰を下ろした。

「お前らよく見てろよ」

先輩がレイの背後に立つ。

「レイ、足を広げろ」

「・・・はい」

ゆっくりと足を開くレイ。

先輩がその開かれた足を背後から持ち上げると

レイは男子二人に股間を突き出し

見せつけるような格好になった。

「くうっ」

レイは頬を赤らめ、二人から目を反らす。

「うああ・・・」

レイのあられもない姿。

二人の男子はレイの股間にくぎ付けになる。

股間のモノがみるみる硬くなり

腰が引けていく男子達。

「ははは、まだまだこんなものじゃないぞ」





マジか……

うわあ……

「お前ら、女のおそこ、触ったことあるか？」

「い、いや・・・」

「いいぞ、レイのま○こ、触ってみろよ」

「えっ」

突然の提案に固まる2人。

恥ずかし気に視線を反らすレイの顔と

レオタードの食い込み、ぷっくりと肉のはみ出した股間。

目の前の誘惑に一気に体が熱くなる。

「憧れの綾波のま○こ、好きにしていんだぞ

ほらどっちからやる？」

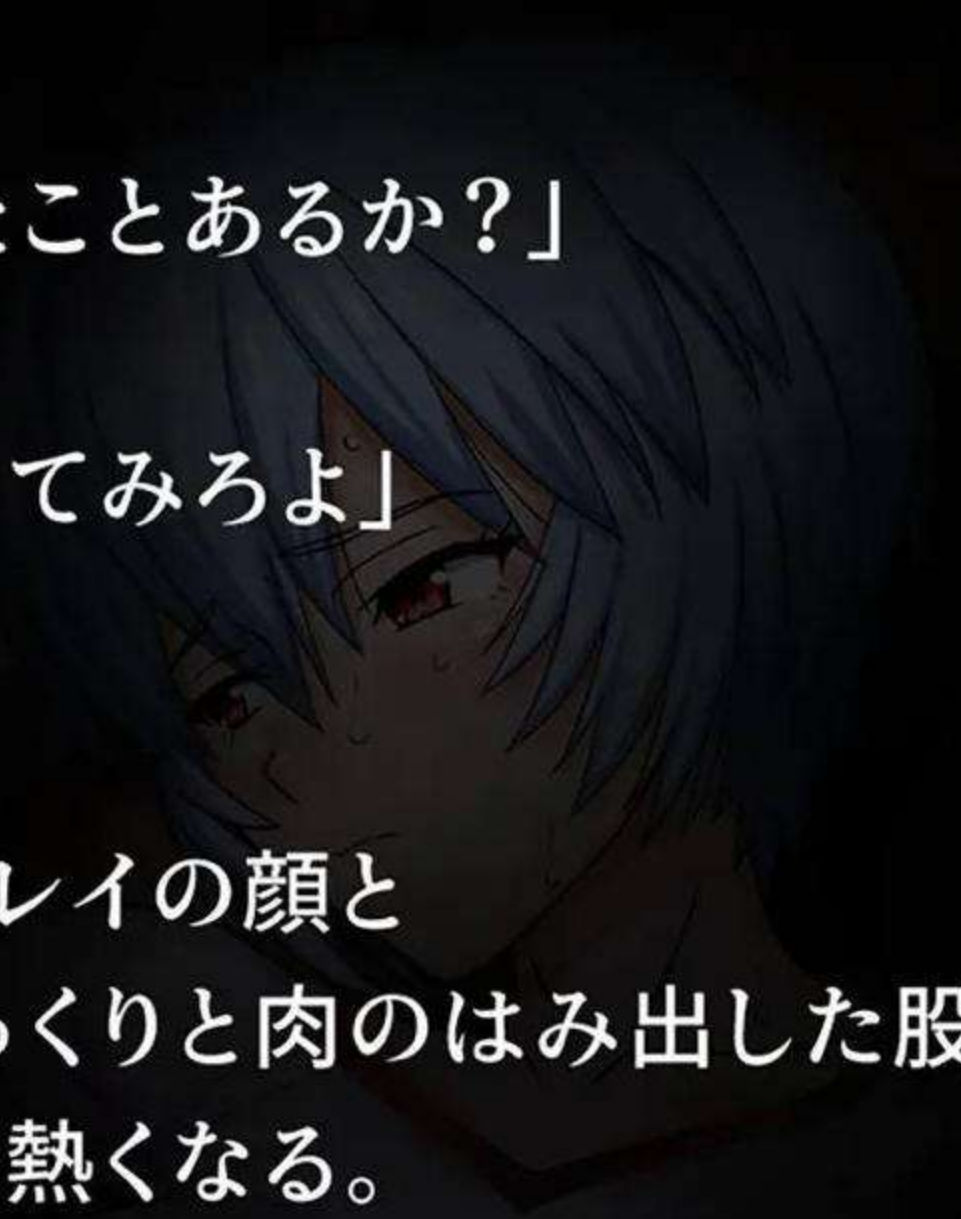
二人は顔を見合わせ、お互いの出方を伺う。

「じゃ、じゃあ、おれから・・・」

1人が前に出て、震える手をレイの尻に添える。

「はあっ、はあっ！」

憧れのレイの尻肉に触れ、心臓の高鳴りが抑えられない。



「綾波、いいのか・・・？」

男子はレイの尻に手を当てたまま、恐る恐る確認する。

「・・・うん」

レイが小さく返事を返した。

ゴクリッ

男子の喉が鳴る。

「よし・・・」

意を決した男子はレオタードのクロッチの
左右にはみ出た肉に指を乗せ、左右に広げた。

ミチッ

湿った肉ひだが広がる音。

柔らかなレイの恥肉が割り開かれ

クロッチの脇からピンクの小陰唇がはみ出る。

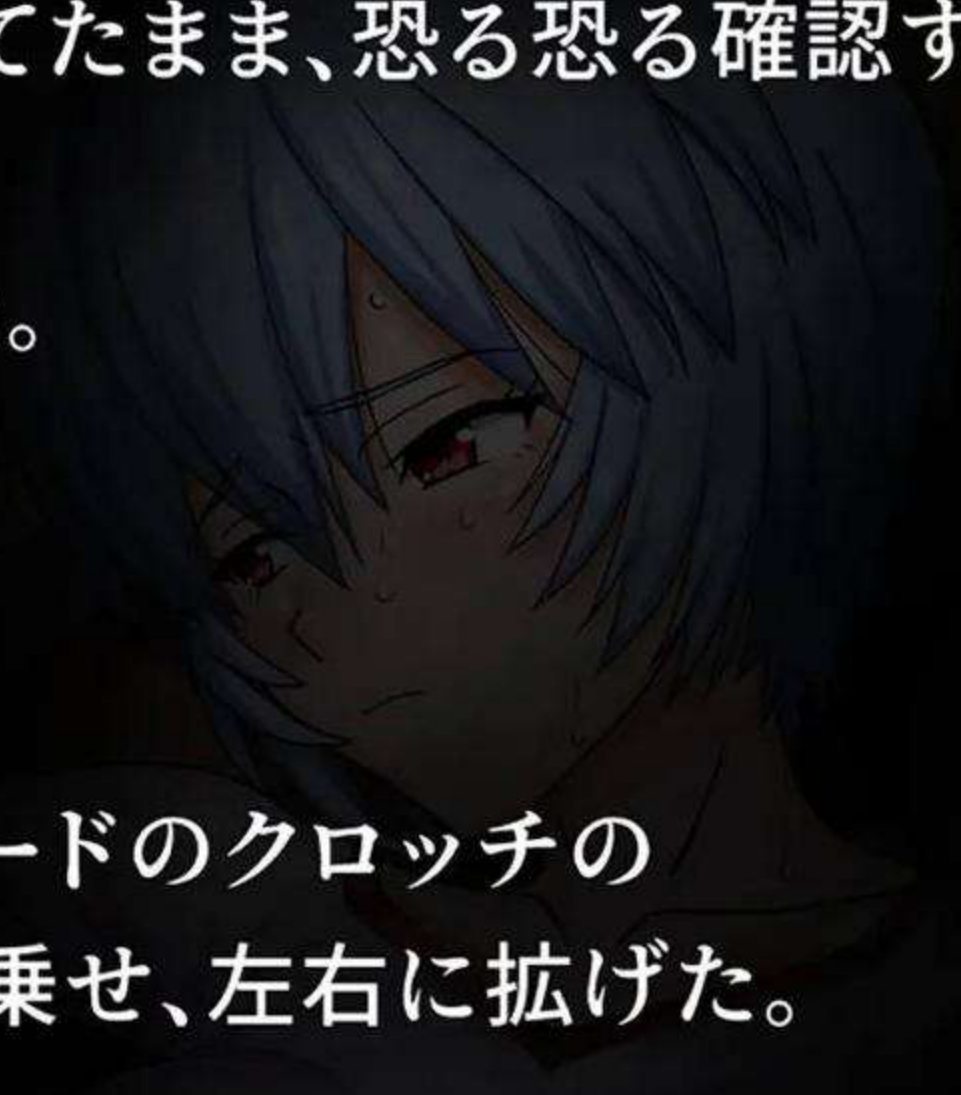
「うああ・・・」

柔軟に形を変えるレイのおま○この
あまりのエロさに声を漏らす男子。

「んんっ」

女性器を開かれ、敏感な膣肉がレオタードに触れる。

その刺激でレイは思わず声を漏らす。





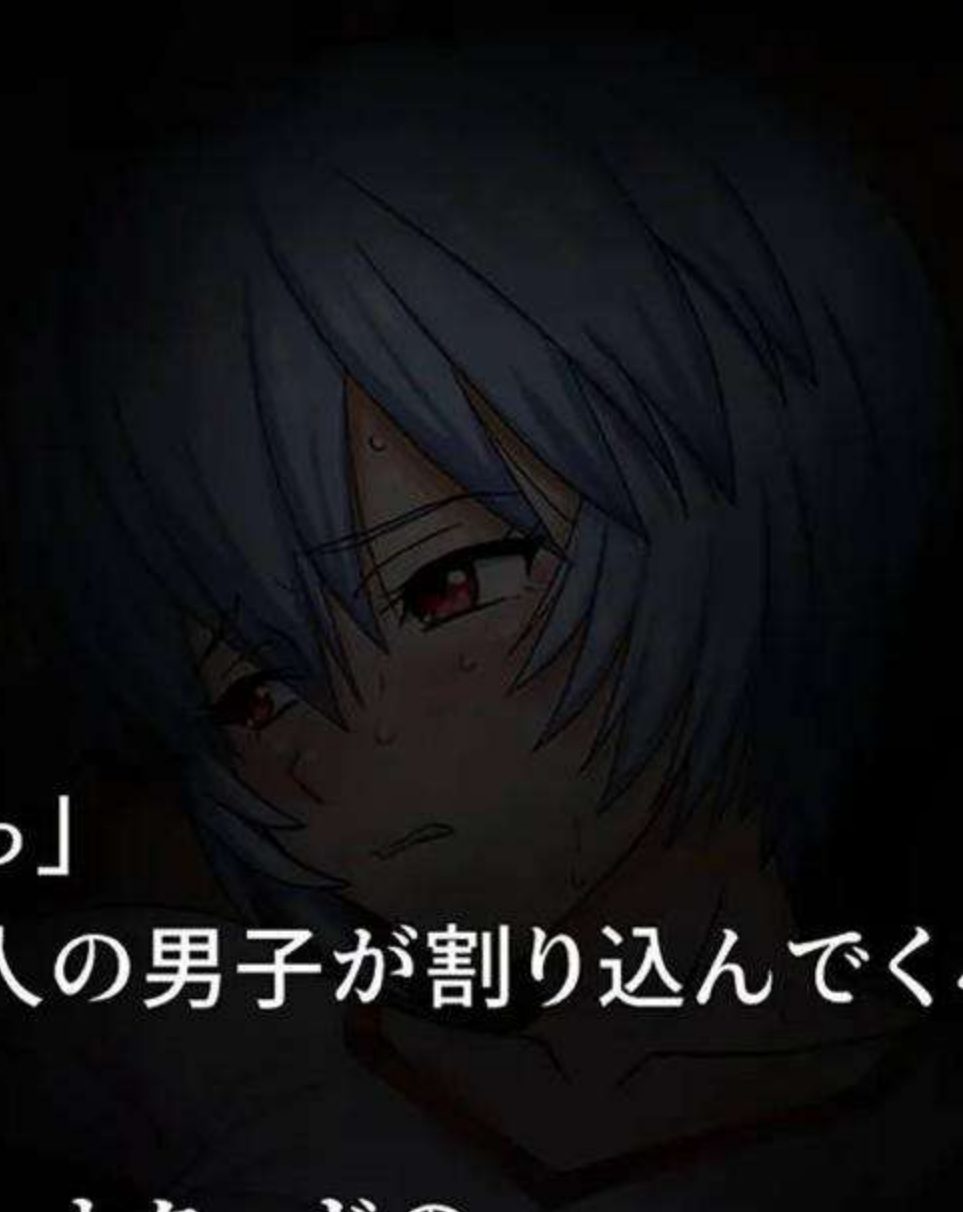
んんっ

くう...

クリッ

クチゅ





「お、おれにもやらせろよっ」

我慢できなくなったもう1人の男子が割り込んでくる。

「あっ、おいっ」

割り込んだ男子はレイのレオタードの
股間部分をめくり上げ、横にずらした。

「くうんっ」

むき出しにされるレイの女性器と肛門。

「ああ、綾波い・・・」

男子は夢中でレイのおま○こをグニグニとまさぐる。

「ううんっ」

荒々しい刺激にレイの腰がビクリと弾む。

その時、レイの膣口からぽろんと何かが飛び出した。

「わっ、なんだ、これ・・・」

男子は驚きながらそれを掴んでみる。



くうっ

ビクッ

びくっ

ビクッ

なんだ

これ...



男子の手に伝わる振動と微かなモーター音。

「んんっ」

レイの反応が大きくなる。

「先輩、これって・・・」

男子は顔を上げ、上級生の方を見る。

「おれが仕込んでおいたんだよ」

上級生はニヤリと笑みを浮かべる。

「それ、引っ張って出してみろよ」

レイの膣から飛び出たゴム紐のようなもの。

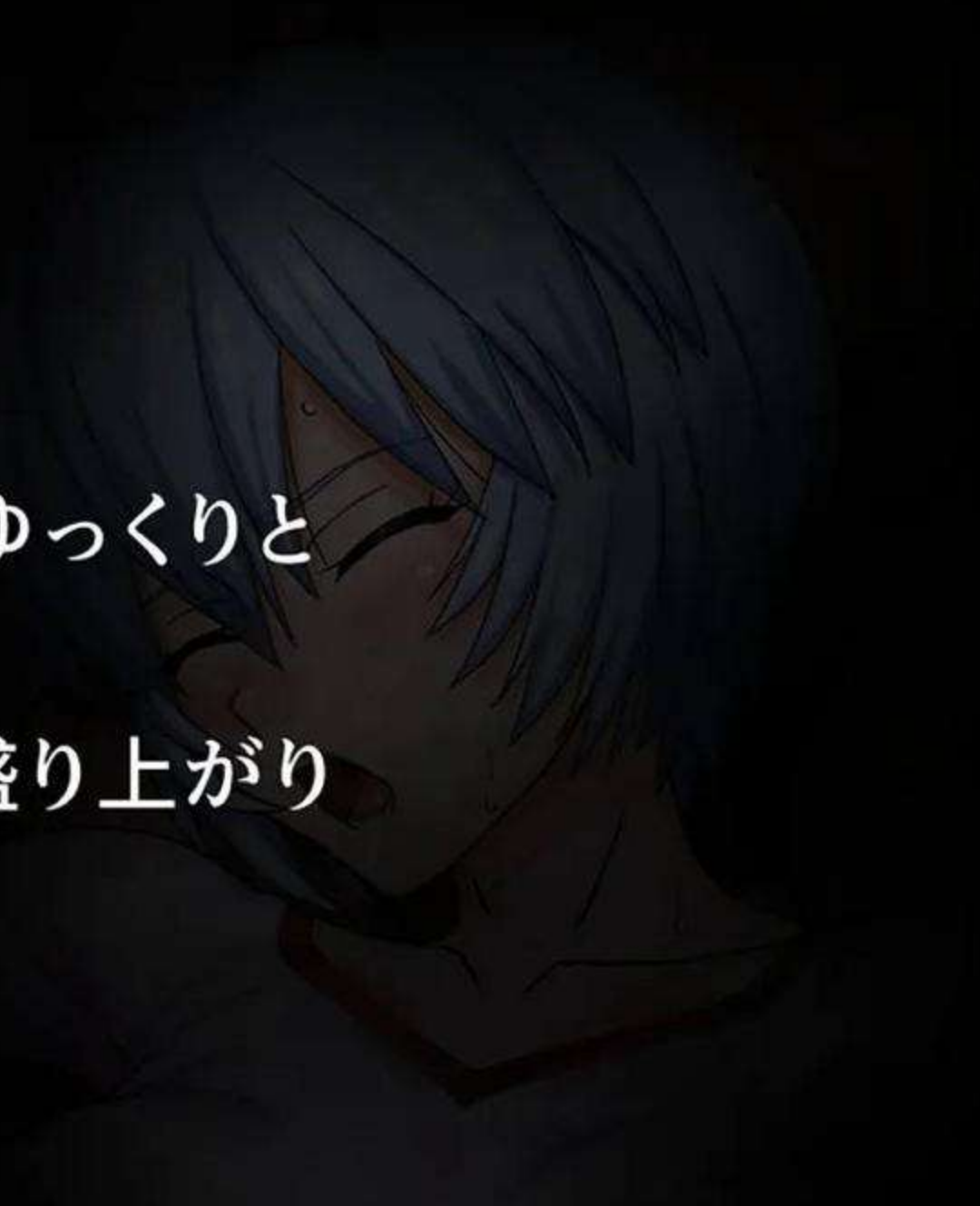
「い、いいんですか、じゃあ・・・」

男子は紐を握り、手に力を込めて引いていく。

グッ グググッ

「ああっ、だめっ！」





レイの膣内にある何かがゆっくりと
体外に向けて動き出す。

レイの女性器がモコッと盛り上がり
膣口が徐々に開いていく。

「あぐううう!!」

レイの苦しそうな声。

男子はレイのおま○この変化に夢中で
手を止められない。

ボコンッ

「はぐうう!!」

レイの膣から飛び出したのは大きなバイブレーター。

細身の缶ジュース並みのそれはレイの膣を
ぎちぎちに広げ、めくり上げながら生れ出る。

「すげえ・・・」

「でか・・・」



あっ

あはああっ

ビュッ

グググッ

うおっ

ポッ

でかっ



バイブレーターはブブン、ブブンと唸りを上げ
レイの膣から抜け落ちた。

ゴトンッ

「んはぁっ」

長く自分を苦しめていた異物が除去された
解放感から、脱力して大きな吐息を漏らすレイ。

「綾波、こんなの入れて練習してたのか・・・」

抜き取られたバイブと口を開けたままの
レイの膣を見て、男子が呟く。

「お前らの憧れの綾波はこんなエロい
女だったってことさ」

先輩男子がそう言った。

「でも、まだ終わりじゃないぞ」

先輩が口をニヤリと歪ませる。

「え・・・」

男子達が困惑した顔を見せる。

「レイのケツに指入れてみろよ」

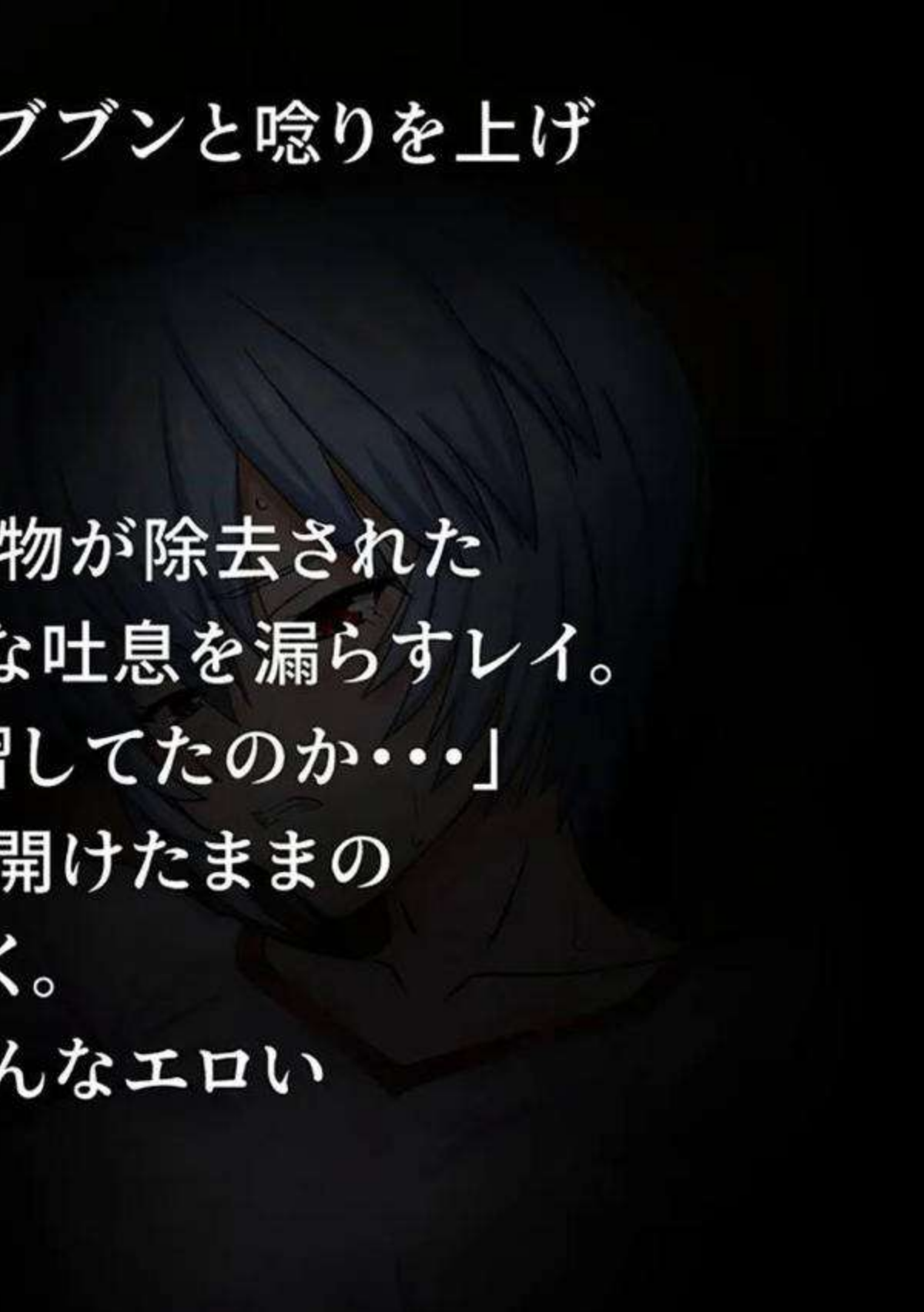
先輩の言葉に、男子達の視線がレイの肛門に集中する。

「まさか、こっちにも何か・・・？」

「いいから、やってみろよ、指2本でもいいぞ」

「マジですか？」

後輩男子はまた唾をゴクリと飲み込むと
レイの尻穴に指を伸ばす。



「あ・・・、だめっ」

レイの小さな声。

グッ ズブズブッ

「あああっ!!」

男子の2本の指がレイの肛門をこじ開け
深く突き刺さる。

レイは身体をこわばらせ、その刺激に耐える。

「うああ、入った、入ったぞ」

レイの尻に根元まで埋まる指。

「どうだ、何かあるか？」

先輩の声。

「え、んん、これか？」

男子が指でレイの肛門内をまさぐると
グチュッ グチュッ と音が漏れる。

「くううっ、んっ、あううっ」

レイの腰がビクビクと弾む。

「あったか？それ引っ張り出してみろよ」

男子は指先でリング状のものを探り当てた。

「い、いいんですか、引っ張って・・・」

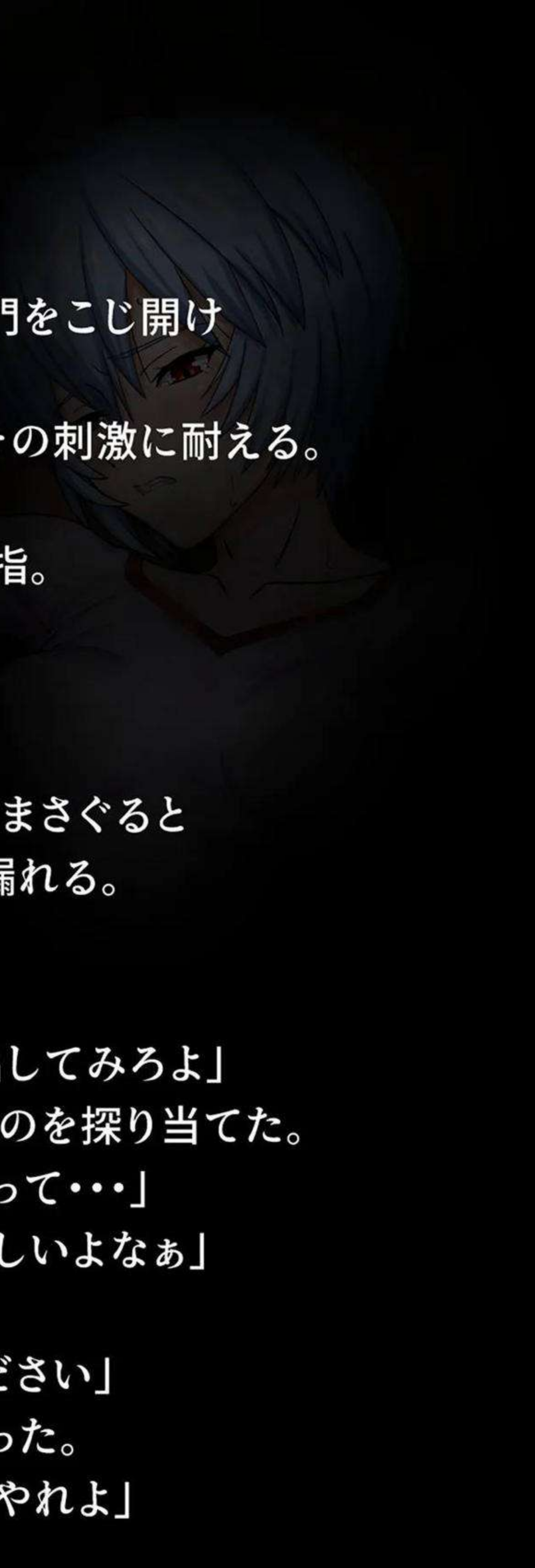
「大丈夫だ、レイも取って欲しいよなあ」

先輩の意地悪な質問。

「くうう、は、はい、取ってください」

レイにはそう言うしかなかった。

「だってよ、ほら思い切ってやれよ」





んっ

ひっ

グッ

あううっ

ブル

グッ

グッ

グッ

グッ



ズッ ズズッ グボッ

男子が指に引っかけてリングを
レイの肛門から引っ張り出した。

「あっ、あっ、あああ!!」

レイが大きな声を上げる。

レイの尻の中に入れられていたのは
50センチもある長大なディルド。

それがレイの結腸内にまで入り込んでいた。

ズルッ ムチムチムチッ

「さあ、レイ、思いっきりひり出せ」

男子に引き出され肛門を突き抜けた
ディルドはもう止まらない。

「はああっ! ひぐっ、あはああああ!!」

強烈な排便感にレイは思わず力んでしまう。



ブリュッ ムリムリムリッ！

肛門が捲れて大きく盛り上がり

大蛇のようなディルドが次々にひり出される。

「ひいっ、んぐっ、ぐうううう!!」

レイが大きな声を上げると同時に

レイのオマンコから透明な汁が噴き出す。

ブシュッ ビュッ ビュビュッ

「あはぁっ、あっ、ああぁっ!!」

レイは全身を震わせ、悲鳴とは違う声を上げた。

「ははは、いいぞ、レイ、それがお前の本当の姿だ」

先輩はレイの痴態を嬉しそうに眺める。

肛門から巨大なディルドをぶら下げて潮を吹くレイ。

大きく口を開けた膣口の中では下がってきた

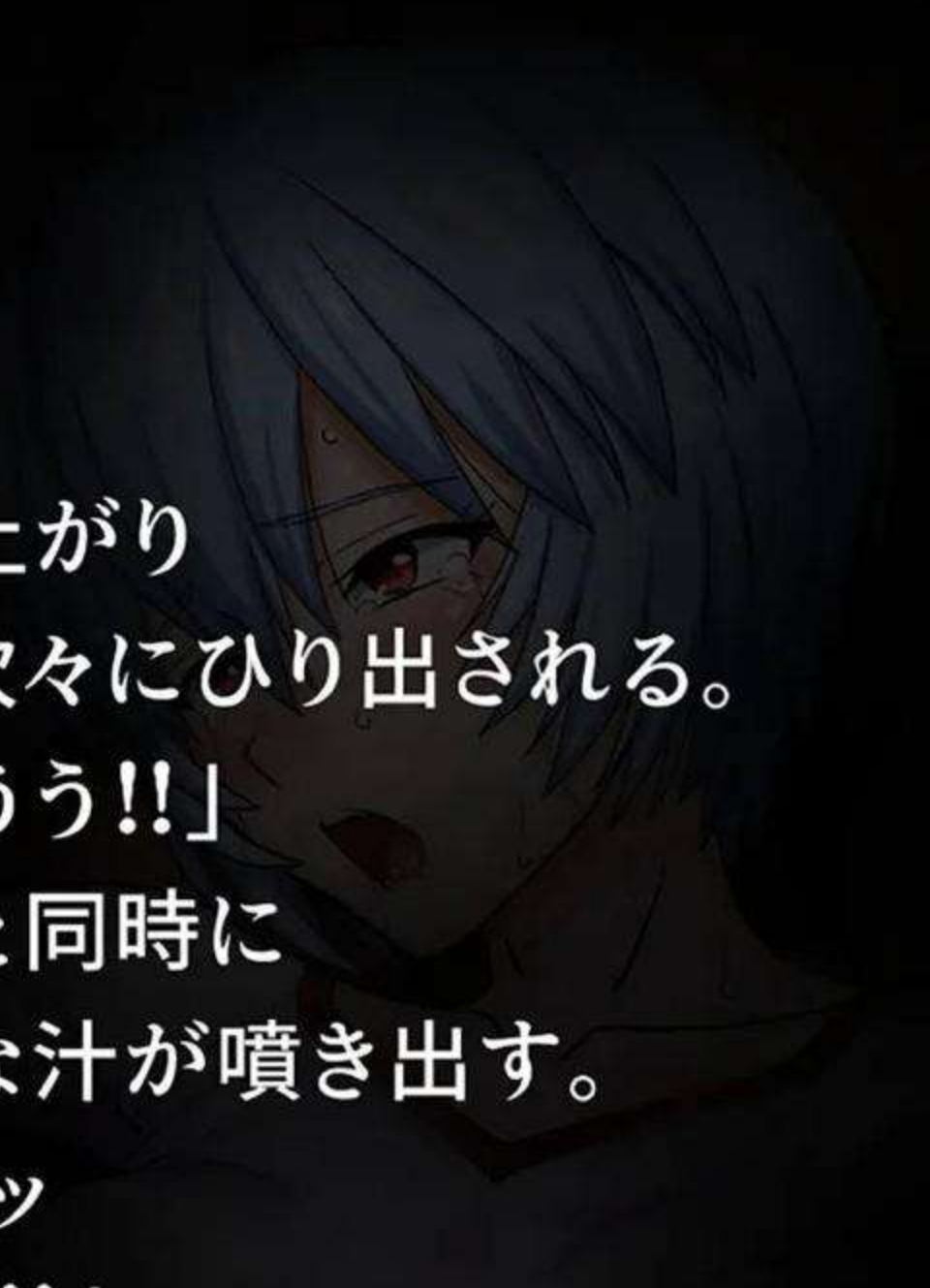
子宮口がビクビクと動いているのが見えた。

普段無口で物静かな同級生が恥部をさらけ出して

絶頂する姿に、後輩2人は言葉を失っている。

「さあ、おれはこれからレイともっと楽しむが

お前らはどうする？」





あっ

はひっ

ああああっ

ガッ

ビクッ

ブ
ニ
ギ

ブ
ニ
ギ

ブ
ニ
ギ

ガッ



05

変えられていくカタチ

レイの自室。

猫耳のついたセクシーなボンデージスーツを着込んだレイはベッドの上に無防備に寝そべり中年の肥満男に身を任せていた。

ギシッ ギシッ ギシッ

「んっ、はっ、んんっ」

男が動くとベッドが軋み、男の腹の圧力でレイも声を漏らしてしまう。

細身のレイは男の身体に埋もれてしまいそうだった。男は体を起こすとレイの両ひざに手を置き足を開かせる。

男の太い陰茎がレイの股間の割れ目に潜り込み出し入れされる様子がよく見える。

「レイちゃん、今日もかわいいねえ」

男はぐふぐふと笑いながら

レイの股間に腰を打ち付ける。

結合部をまじまじと見られても

レイは男から視線を反らしただけで嫌がることなく犯され続ける。

ズグッ ズグッ ズグッ

「んはぁっ、んっ、あうっ」

股間に深々と肉棒を突き入れられる。

レイは全身に汗を浮かべ、顔を赤らめながらただそれを受け入れていた。



んっ

くっ

あうっ

アッ

アッ

アッ

「はあっ、はあっ、レイちゃんの、おま○こ、最高だよ」

ズグッ ズグッ ズグッ

男の腰の動きが早まっていく。

「今日もたっぷり出すからね」

男はそう言うと身体を前傾させ

レイの肩脇に手を付き、身体を重ねると

身体全体を上下させ、より深く

強くレイの中に肉棒を突き込む。

ヌグッ ヌグッ ヌグッ

「んぐっ、はあっ、ああっ」

伸し掛かる肥満体の圧力と突き込みの

激しさにうめき声を上げるレイ。

ズッ ズッ ズッ

「ぐうっ、出るっ、出るよっ！」

ビュビュッ ビュルルッ ビュッ

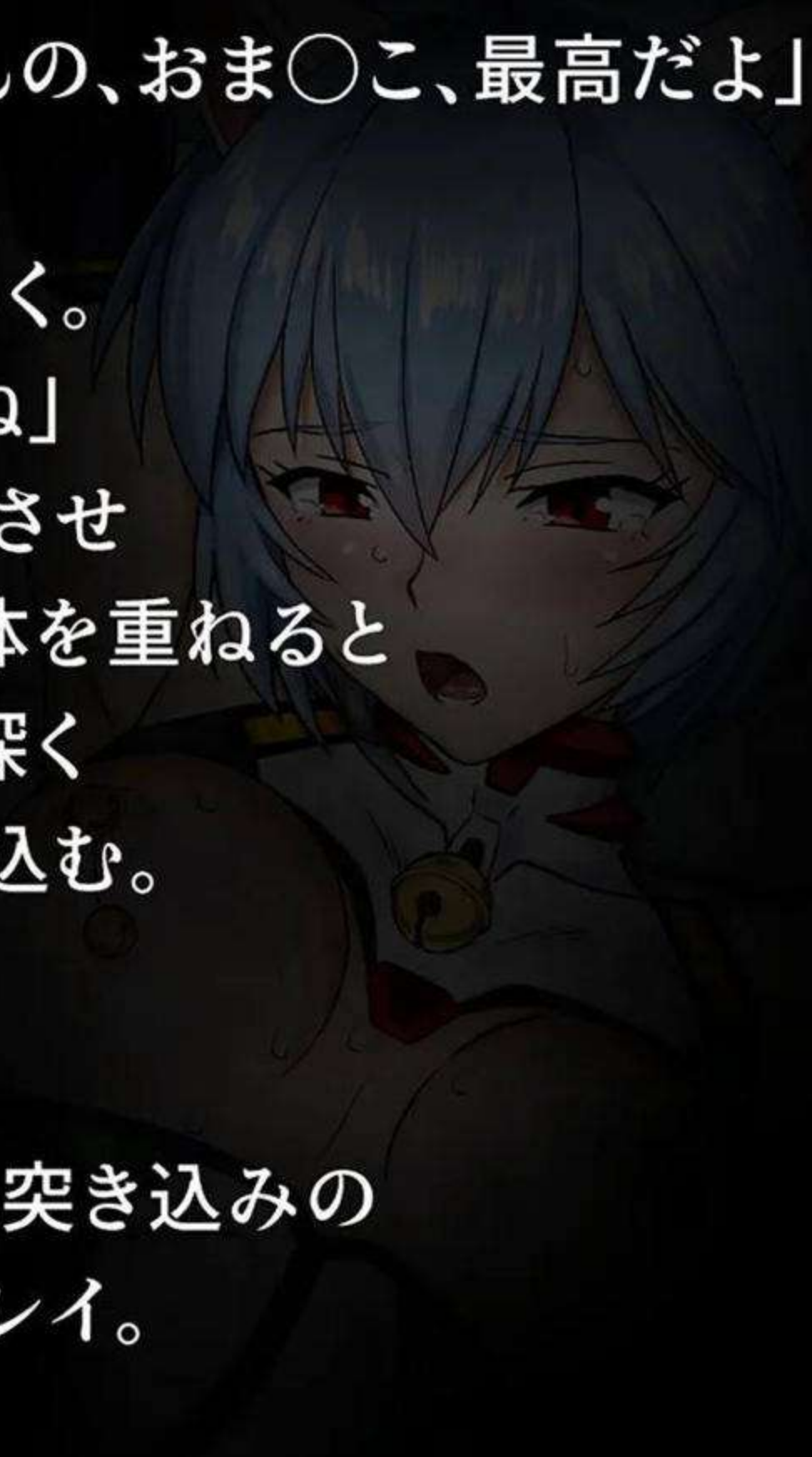
男が腰を震わせ、背中を反らして

レイの膣内に大量に精を放つ。

「んんっ!!くうんっ、んはああ・・・」

膣内に熱いものが広がり、大量の粘液によって

肉棒の動きがスムーズになったのを感じる。





はあっ

んはああっ

あっ

ぐわ
ぐわ

「ふう、ふう、ははは・・・」

あまりの気持ちよさに男から笑いが漏れる。

男は息を整え身体を起こすと

レイから肉棒を引き抜いた。

ぬぼっ

「んんっ」

柔らかくなった肉棒がずるりと抜け出ると

ぽっかりと大穴が開いたレイの膣口から

ドロリとした白濁液が流れ出す。

「レイちゃんのおま○こが気持ち良すぎるから

今日もいっぱい出しちゃったよ。

レイちゃんも気持ちよかったかな？」

そう言いながら、男は開かれたままの

レイのおま○こを手で撫でつける。

ぬちゅっ くちゅっ

「くうんっ」

射精されたばかりで敏感になっている部分を

乱暴に撫でられ、思わず腰をくねらせるレイ。

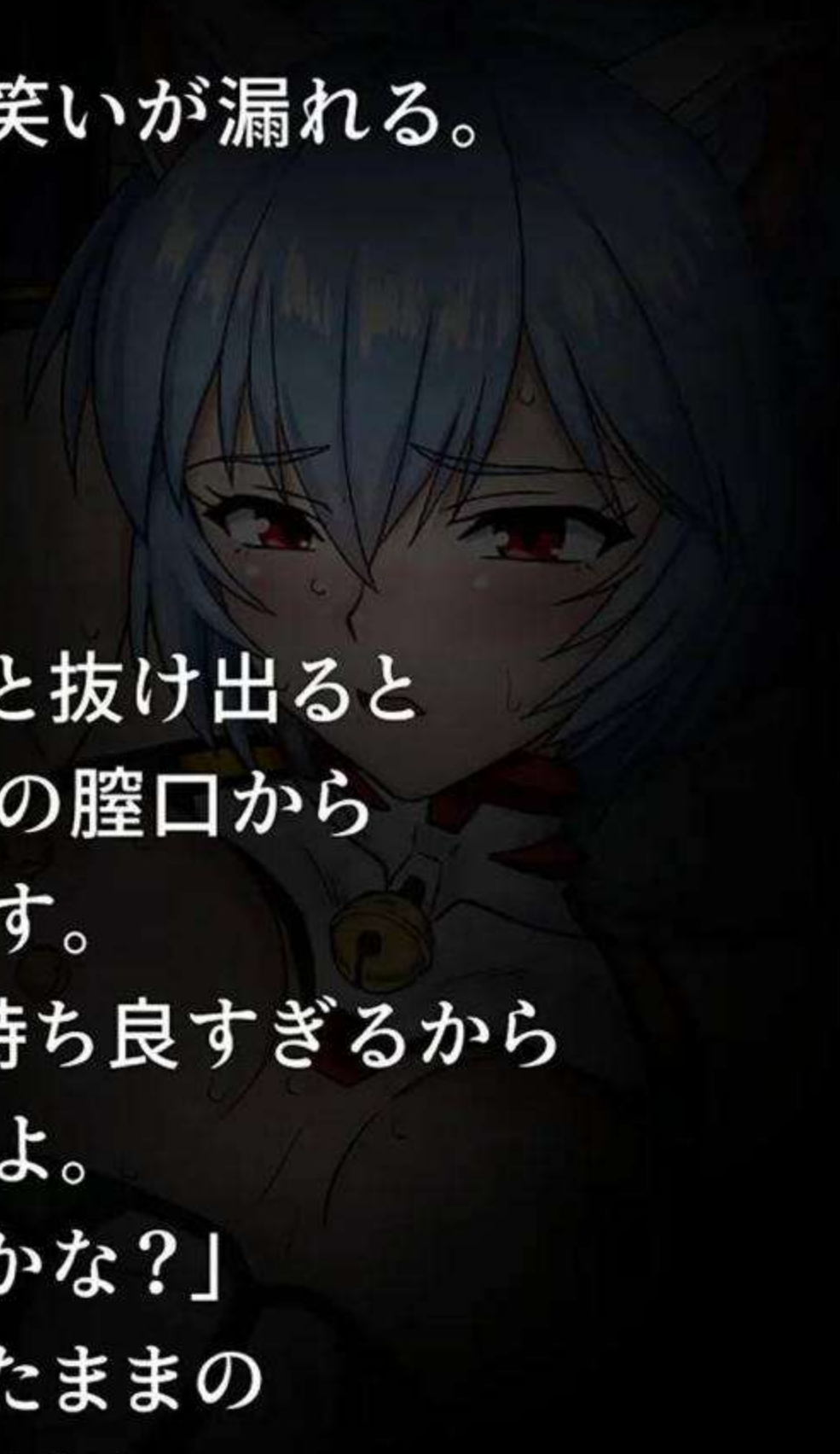
「さあ、次はレイちゃんの好きなこれだよ」

男は粘液でぬるぬるになった手をレイに見せつけると

その指先をレイの股間に向けた。

「ああ・・・」

男の行動の意味を悟ったレイは小さく声を上げる。





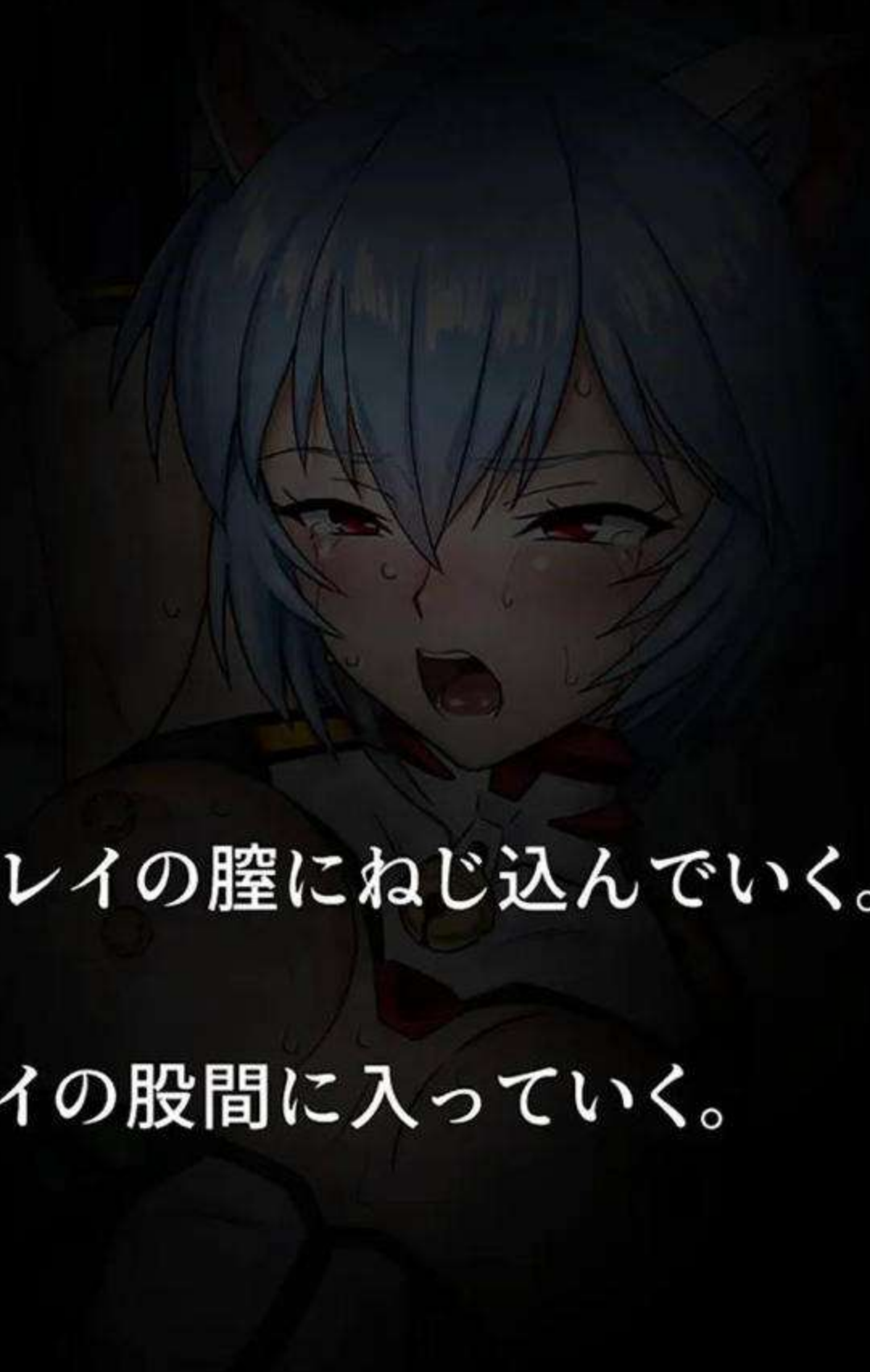
はあ

はあ

ああ……

さあ次は
レイちゃんの好きな

これだよ



グジュッ

「あううっ！」

男は伸ばして揃えた指先をレイの膣にねじ込んでいく。

ミチミチッ

男の太く丸い手が徐々にレイの股間に入っていく。

ゴリュンッ

「あぐううう！」

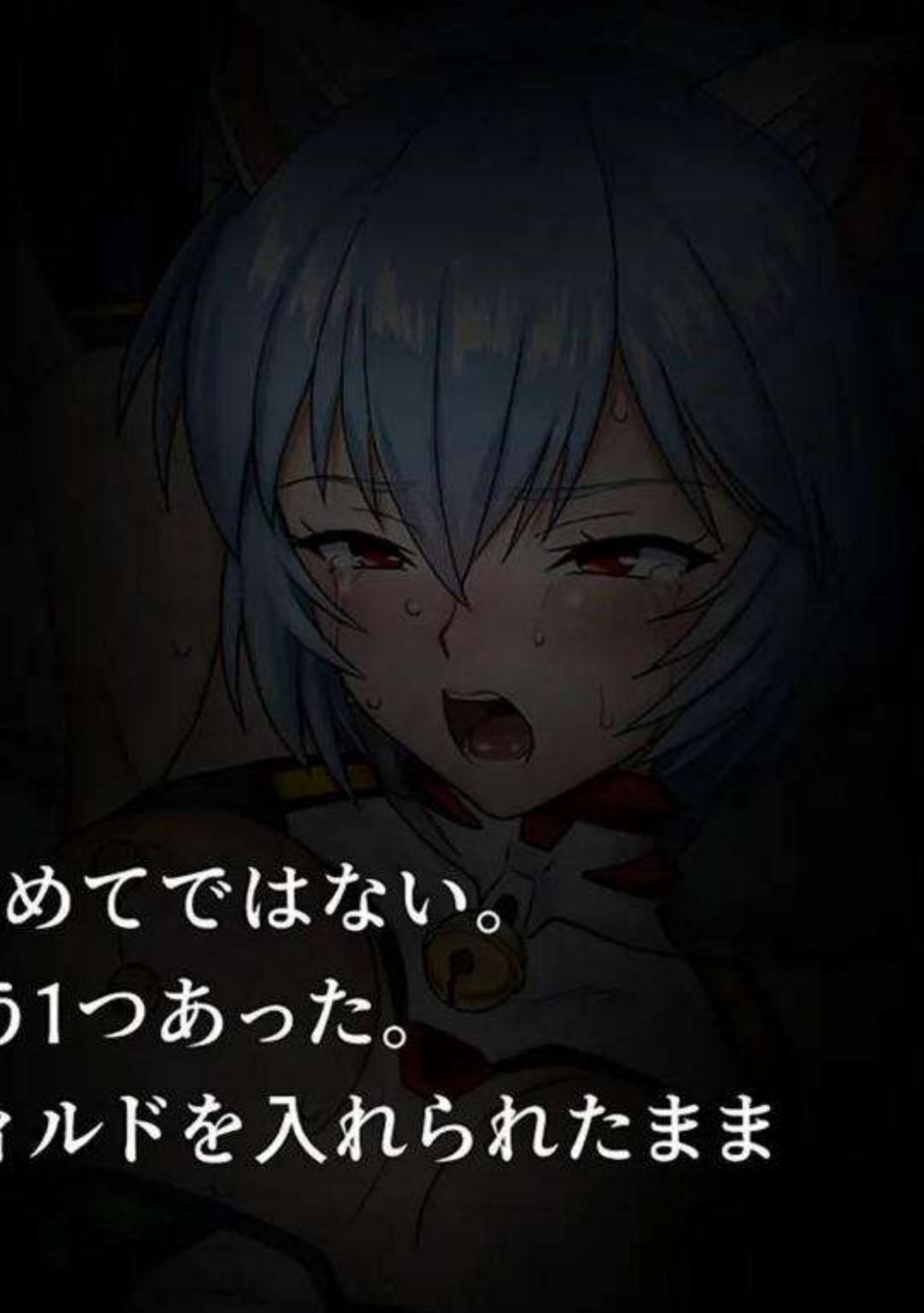
男の大きな手がレイの膣に手首まで収まった瞬間
レイは身体をガクガクと震わせ大きな声を上げた。

「ふう～、入ったねえ、僕のザーメンを
レイちゃんの中に満遍なく塗ってあげるよ」

男はそう言って腕をぐりぐりと回転させる。

「ひいいっ、いやっ、ああああっ!!」

男の腕の動きに合わせて、レイの下腹部
がボコボコと動き出す。



フィストファック自体は初めてではない。
レイが悶絶する理由がもう1つあった。
レイは肛門内にロングディルドを入れられたまま
セックスしていた。
今も男の手がお腹の中を動き回るたびに
腸壁越しにゴリゴリとディルドが擦られ
その刺激がレイの身体を突き抜ける。
「んぐっ、ああっ、あはああ!!」
「そんなに気持ちいいかい、レイちゃん
ほら、このままイってみなよ」
ビクビクと身体を弾ませるレイを見て
感じていると思い込んだ男は
腕をより激しく動かす。



あああッ

いやあああッ

あぐッ

ブッ
グッ

グッ
グッ
グッ

グブッ グジュッ ゴブッ

ドスンドスンと内臓を拳で打ち付けられ
頭が真っ白になっていくレイ。

「んぐっ、はあっ、もうっ、だめえ!!」

汗だくになったレイが身体を強張らせる。

「ひっ、いっ、んぐううう!!」

レイの身体がビクビクと痙攣した瞬間。

グボッ!!

男が勢いよく腕を引き抜いた。

「ひきゃああああ!!」

ブバッ ブシュッ ムリムリムリッ

内臓を引っ張り出されるような衝撃で絶頂を
迎えたレイは、その勢いで肛門からディルドを
ひり出しながら潮を吹いた。

「ひっ、ぎっ、んおお! いぐっ、いぐううう!!」

ぶじゅぶじゅと腸液を溢れさせながら

肛門をめくり上げて出てくるロングディルド。

ベルトで拡張されたレイの膣は絶頂で痙攣する
膣粘膜の動きが丸見えだった。

「ぐふふ、レイちゃんはほんとにいやらしい子だなあ」

理性を失ったレイの痴態に

男は満足そうな笑みを浮かべた。



06

限界の先に

ドシュッ ドシュッ ドシュッ

「いやあ!! あああ!! きゃあああ!!」

様々な機器がひしめく研究室内にリズミカルな機械の動作音とアスカの叫び声が響く。

アスカは拘束され、足を大きく開かれた形で宙づりにされていた。

プラグスーツの胸と股間に穴が開けられ乳房と女性器、肛門がむき出しになっておりその無防備に晒された恥部には2本の大きなマシンバイブが突き刺さっていた。

「あああ! ぐうっ! ううう!!」

足を高く上げて宙づりにされているせいで股間に力が入らず、次第に緩んでいってしまう。そこを2本のマシンバイブに高速なピストン運動で責められ、アスカのおま○ことアナルは捲れ上がってガボガボと泡を立てかき回されていた。長時間、膣と肛門内に器具を挿入し内部を拡張されていたアスカ。そこをさらに広げるようにマシンバイブが執拗に責め立てる。



ひぐう

んんんんん

機械に責められ乱れるアスカを
ガラス越しに観察する研究員達。
アスカを見る者、モニターを見つめる者。
マシンバイブに延々と犯されるアスカに
さらに器具が追加される。
メカアームによって運ばれてきたのは
リップスティック大のカプセル。
先端からは太い針が伸びている。
メカアームはそれをアスカの両の乳首と
下腹部に突き刺した。

ブツッ ズズズズッ

「ひぎいいいい!!」

乳首の先端から乳房の中まで届く針。
カプセルから何らかの液体がアスカに注入される。
「あっ、ああっ、ああああっ!!」
グググッと乳房が膨らみ、乳首も大きく硬くなっていく。
さらには下腹部にも薬液が注入され
下半身が熱を持つ。
「ひいっ、んぎいいいい!!」

きゃあ

あっ

あああ

膣と肛門への激しいピストンが続く。

ブボッ ブボッ ブボッ

「ひああああ!!きゃああああ!!」

おびただしい量の粘液を飛び散らせながら

マシンバイブによってめくり上げられた膣内壁と

肛門内壁が体外へと引きずり出され

真っ赤な肉の筒となってマシンバイブにまとわりつく。

ミチミチミチッ

「あああ!ああああ!!」

もはや半狂乱となったアスカは

身体を動かすことも出来ず

自分の肉体が変化していく様子を見せつけられる。

いつの間にかアスカの尿道へ管が挿入され

同じように薬液が注入されている。

クリトリスが徐々に肥大し、ピンと立ち上がってくる。



ああっ

きゃああっ

ああああっ

ズルッ

×
×
×
×

ビクッ

マシンバイブがさらに大きなものに交換され
アスカの穴を抉っていく。

グボッ グボッ グボッ

「んおおおお！おほおおおお!!」

拡張訓練のおかげか、薬液の効果か
アスカの膣と肛門は巨大な機械を壊れること
なく飲み込み、受け入れている。

「ここまでは順調のようですね」

研究員がアスカの状態を見守る。

「そうだな、だが、やはり精神が付いてこないか・・・」

最早自我を無くし、叫び続けるアスカ。

「あああ!!ああああ!!」

「では中止にしますか？」

「いや、このボディでどこまでいけるか見よう。

次に進めてくれ」

「分かりました」

アスカの前にはさらに凶悪な見た目の
機械が準備されていた。

んお おお おお

おほおおお

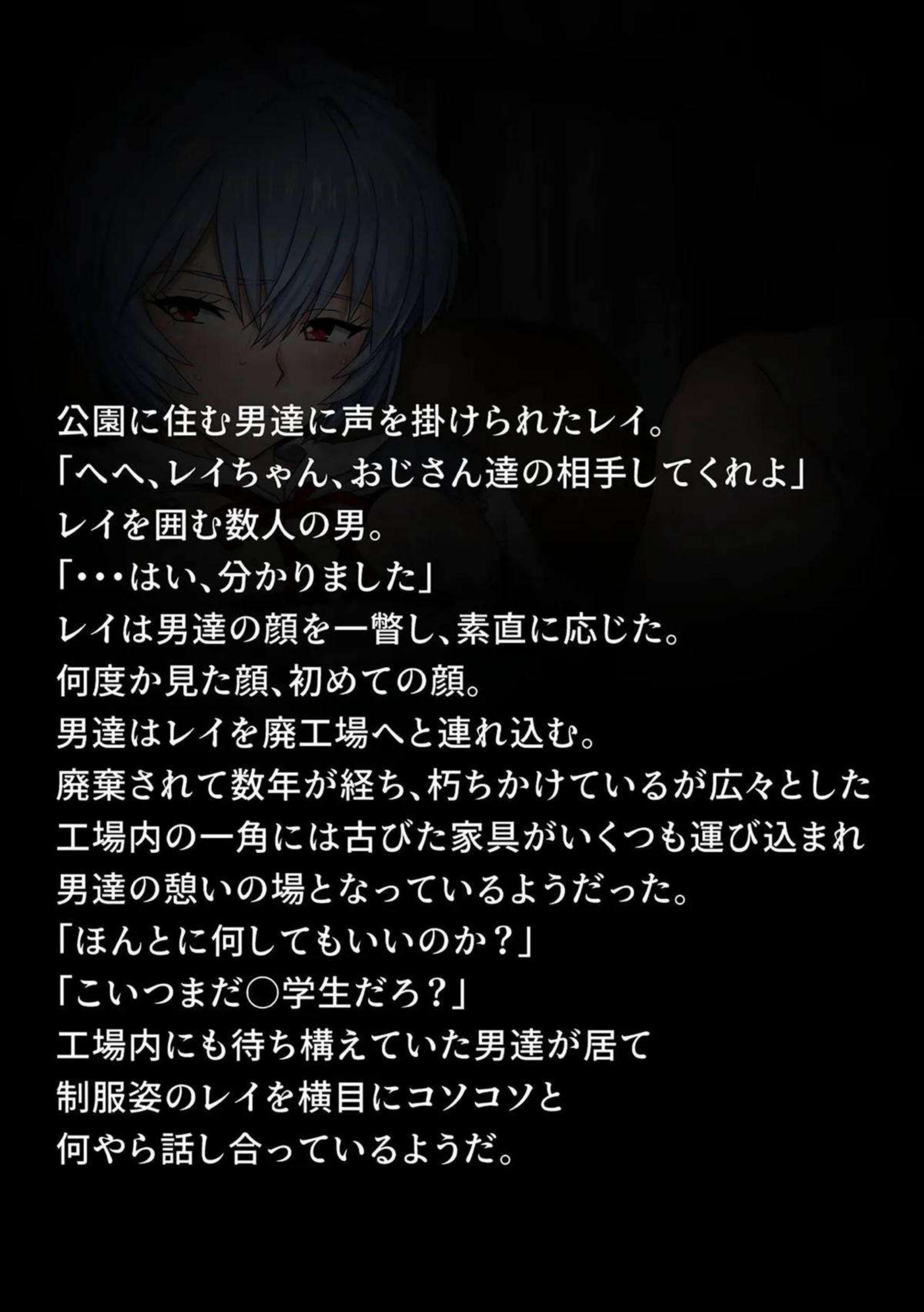
カッ

ガッ



07

慰み者



公園に住む男達に声を掛けられたレイ。
「へへ、レイちゃん、おじさん達の相手してくれよ」
レイを囲む数人の男。

「・・・はい、分かりました」

レイは男達の顔を一瞥し、素直に応じた。

何度か見た顔、初めての顔。

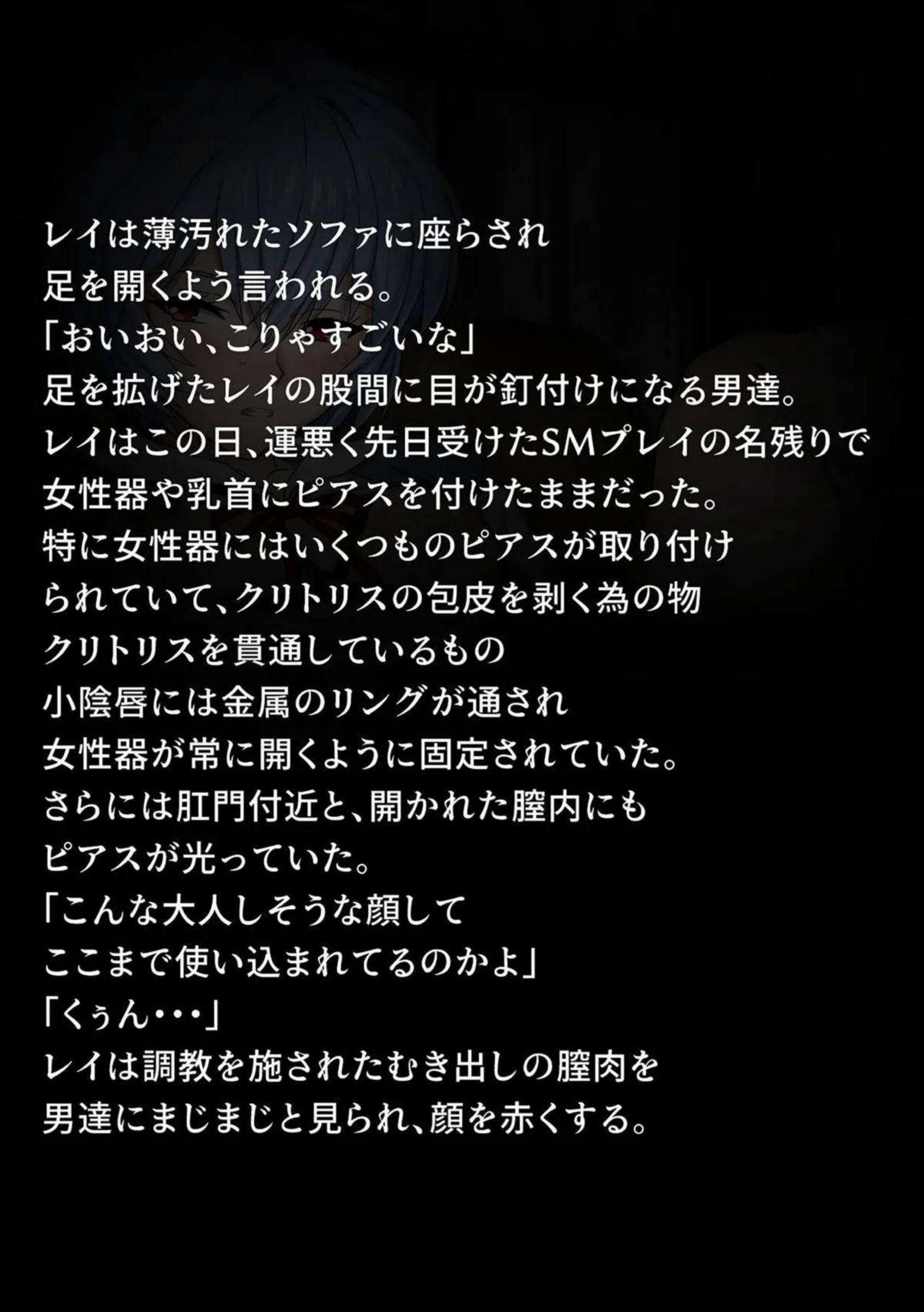
男達はレイを廃工場へと連れ込む。

廃棄されて数年が経ち、朽ちかけているが広々とした
工場内の一角には古びた家具がいくつも運び込まれ
男達の憩いの場となっているようだった。

「ほんとに何してもいいのか？」

「こいつまだ○学生だろ？」

工場内にも待ち構えていた男達が居て
制服姿のレイを横目にコソコソと
何やら話し合っているようだ。



レイは薄汚れたソファに座らされ
足を開くよう言われる。

「おいおい、こりゃすごいな」

足を広げたレイの股間に目が釘付けになる男達。

レイはこの日、運悪く先日受けたSMプレイの名残りで
女性器や乳首にピアスを付けたままだった。

特に女性器にはいくつものピアスが取り付け
られていて、クリトリスの包皮を剥く為の物

クリトリスを貫通しているもの

小陰唇には金属のリングが通され

女性器が常を開くように固定されていた。

さらには肛門付近と、開かれた膣内にも
ピアスが光っていた。

「こんな大人しそうな顔して

ここまで使い込まれてるのかよ」

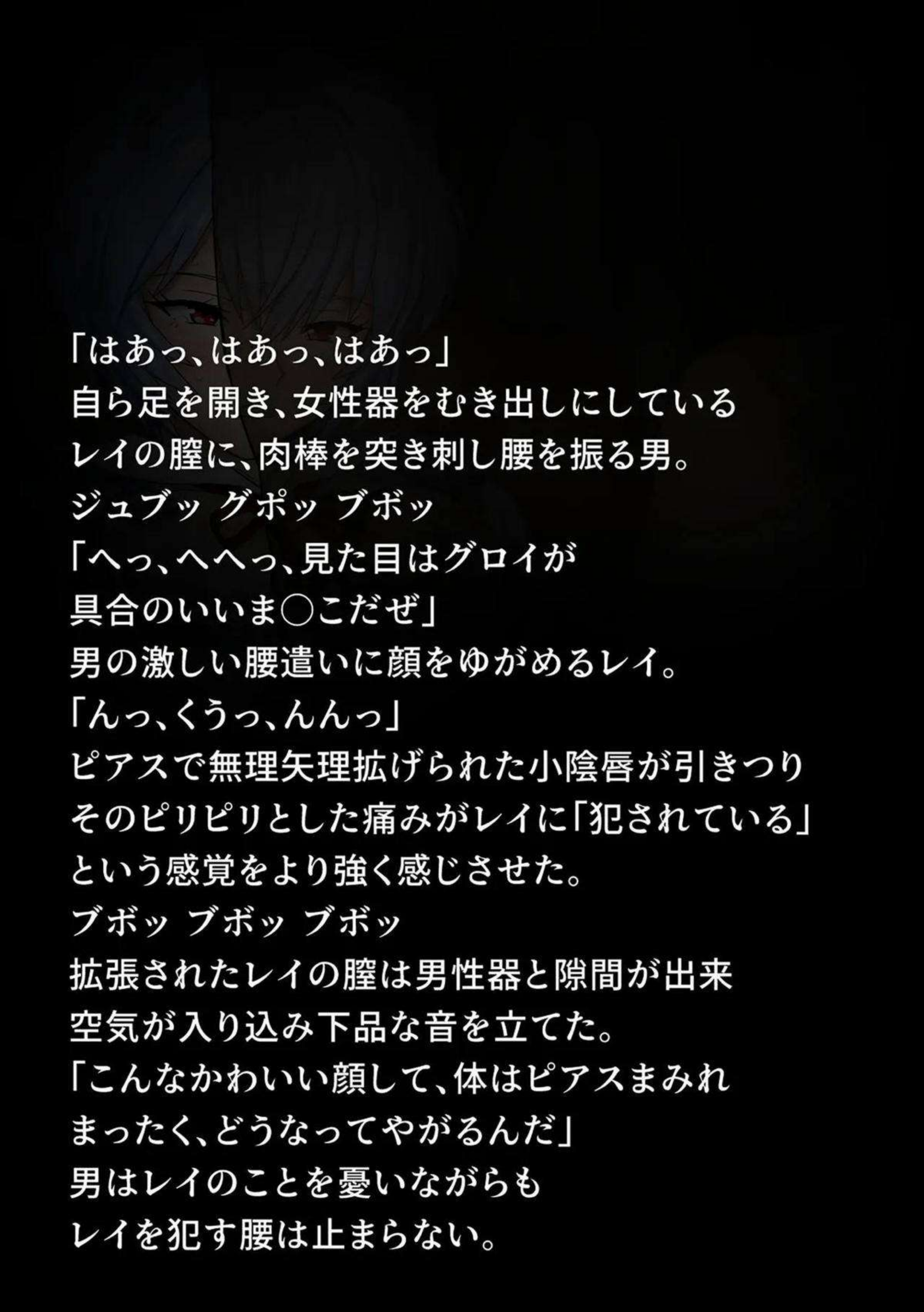
「くうん・・・」

レイは調教を施されたむき出しの膣肉を
男達にまじまじと見られ、顔を赤くする。



くうっ

おいおい
こりやすごいな



「はあっ、はあっ、はあっ」

自ら足を開き、女性器をむき出しにしている
レイの膣に、肉棒を突き刺し腰を振る男。

ジュブッ グポッ ブポッ

「へっ、へへっ、見た目はグロイが
具合のいいま○こだぜ」

男の激しい腰遣いに顔をゆがめるレイ。

「んっ、くうっ、んんっ」

ピアスで無理矢理広げられた小陰唇が引きつり
そのピリピリとした痛みがレイに「犯されている」
という感覚をより強く感じさせた。

ブポッ ブポッ ブポッ

拡張されたレイの膣は男性器と隙間が出来
空気が入り込み下品な音を立てた。

「こんなかわいい顔して、体はピアスまみれ
まったく、どうなってやがるんだ」

男はレイのことを憂いながらも
レイを犯す腰は止まらない。



んぐっ

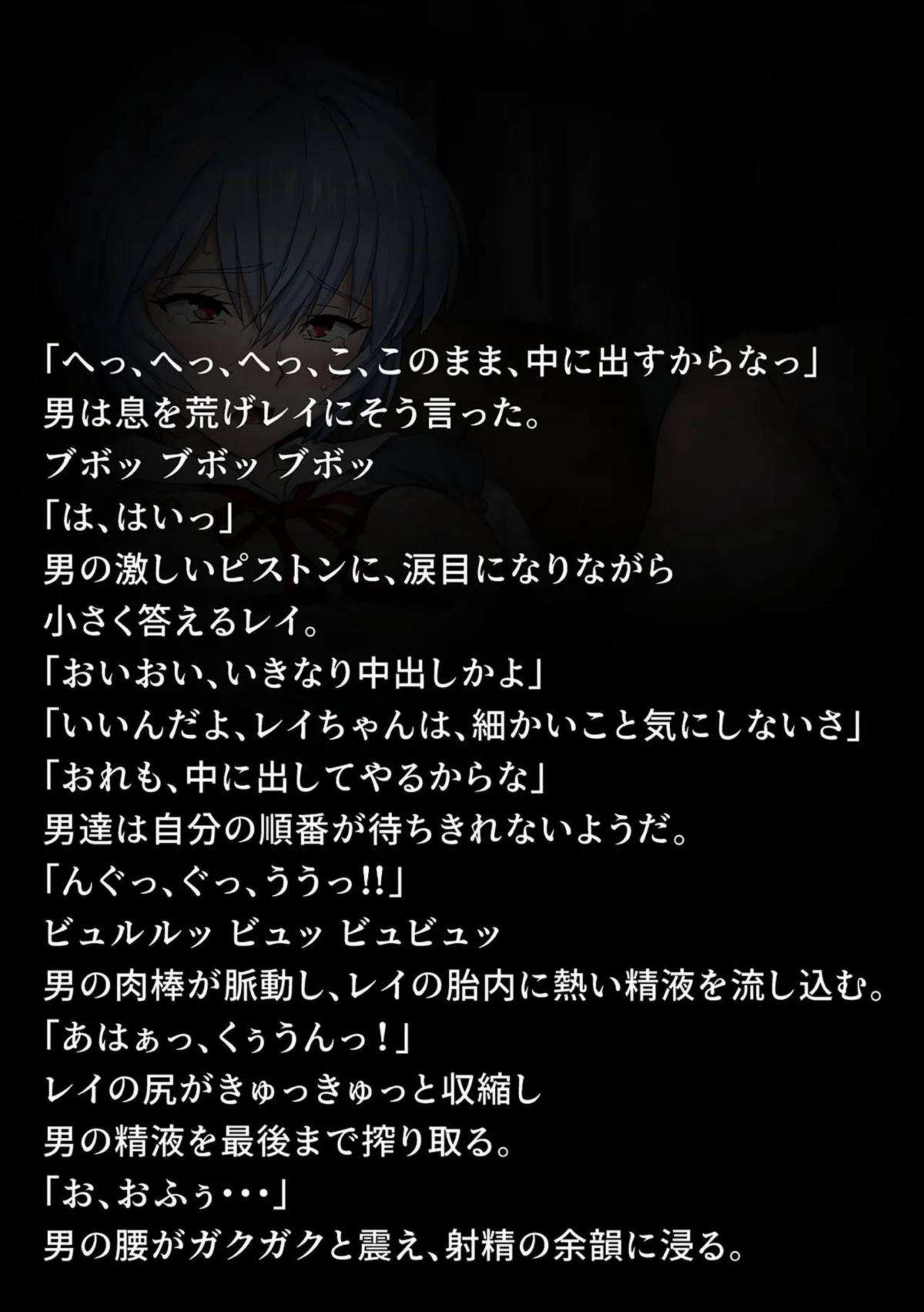
うっ

んんっ

ブ
ッ

ブ
ッ

ブ
ッ



「へっ、へっ、へっ、こ、このまま、中に出すからなっ」

男は息を荒げレイにそう言った。

ブボッ ブボッ ブボッ

「は、はいっ」

男の激しいピストンに、涙目になりながら
小さく答えるレイ。

「おいおい、いきなり中出しかよ」

「いいんだよ、レイちゃんは、細かいこと気にしないさ」

「おれも、中に出してやるからな」

男達は自分の順番が待ちきれないようだ。

「んぐっ、ぐっ、ううっ!!」

ビュルルッ ビュッ ビュビュッ

男の肉棒が脈動し、レイの胎内に熱い精液を流し込む。

「あはぁっ、くううんっ!」

レイの尻がきゅっきゅっと収縮し

男の精液を最後まで搾り取る。

「お、おふう・・・」

男の腰がガクガクと震え、射精の余韻に浸る。

このまま
中に

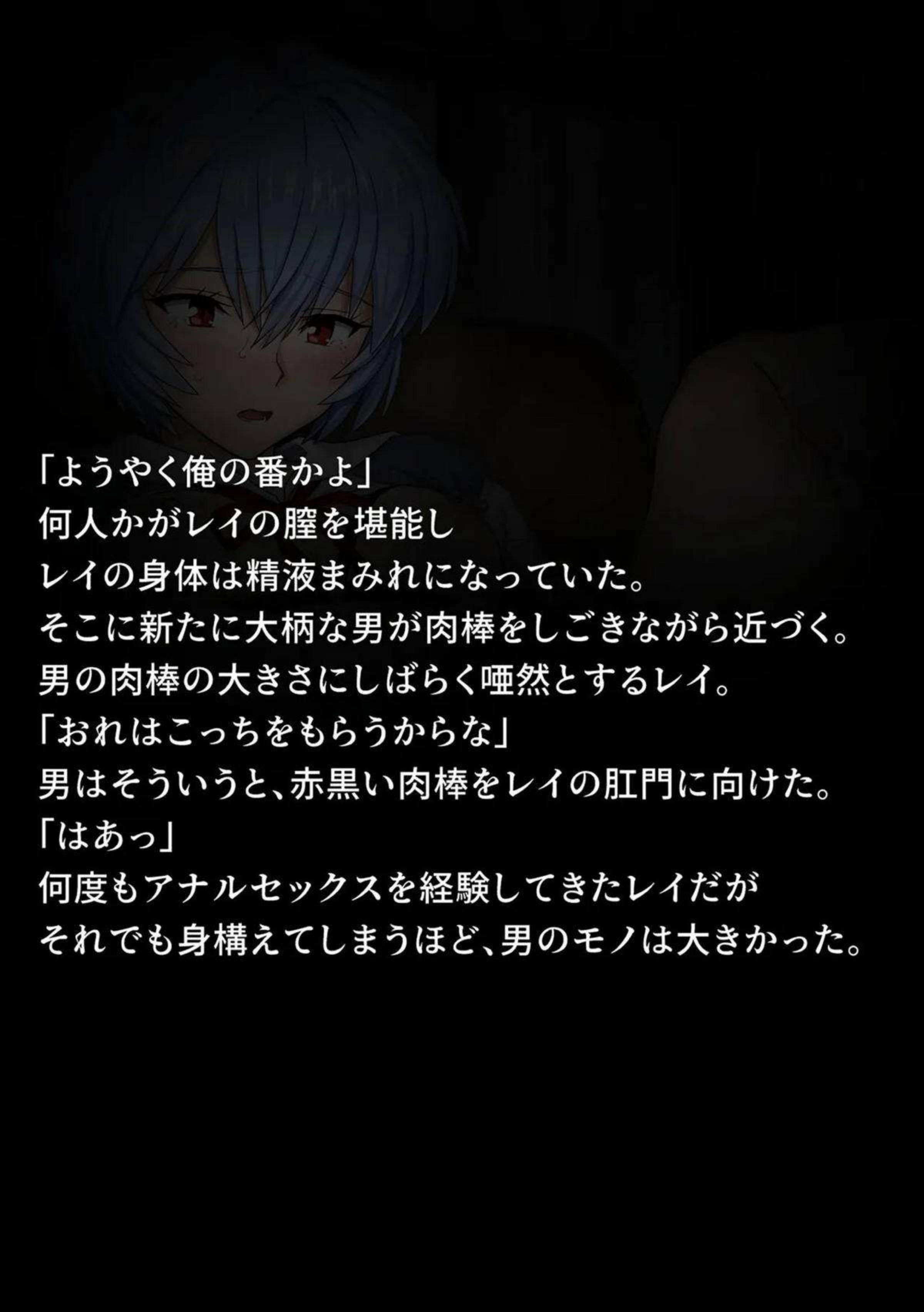
出すからなっ

はっ

はいっ

あはああっ





「ようやく俺の番かよ」

何人かがレイの膣を堪能し

レイの身体は精液まみれになっていた。

そこに新たに大柄な男が肉棒をしごきながら近づく。

男の肉棒の大きさにしばらく啞然とするレイ。

「おれはこっちをもらうからな」

男はそういうと、赤黒い肉棒をレイの肛門に向けた。

「はあっ」

何度もアナルセックスを経験してきたレイだが

それでも身構えてしまうほど、男のモノは大きかった。



はあ...

ストゥ



「いくぜ」

グリッ ズッ ズヌヌヌッ

「あぐっ、うううんっ!!」

メリメリとレイの肛門を押し広げ、長大な肉棒が
レイの尻に突き刺さる。

「うおお、あれが入るのかよ」

レイの白い小さな尻に突き刺さった巨大な黒い肉棒。
その異様さに周りで見っていた男達から歓声が上がる。

「ほら、もう少しだ」

ミリミリミリ...

男は肉棒を根元までレイに押し込んでいく。

「ひぐうっ、あうううう!!」

肛門から直腸の中までみっちりとは異物が詰まる感覚に
レイは大きなうめき声を上げた。



ぐっ

ううう

んううう

ズ

ズ

グ
グ
タ

ズ

グボッ グボッ グボッ

レイの肛門に突き刺さった巨大な肉塊が
高速で出し入れされる。

「はひいっ、あぐっ、んっ、ぐうう!!」

内臓を殴られるような感覚に苦しそうな声を上げ
それでも足を開き続けるレイ。

その時だった。

ボゴンッ

「あううっ!!」

レイの開かれた膣から肉の塊が飛び出した。

「うわ、なんだっ?!」

まわりの男達から声が上がる。

レイの膣から飛び出したのは子宮頸部。

グボッ グボッ グボッ

「へへへ、そこまで調教済みかよ」

レイのアナルを犯す男はレイから飛び出した
子宮頸部を見つめる。

レイの子宮口にはピアスが通され
開かれた状態で固定されてた

「くうんっ」

女性器の最も奥まった部分の秘密を
晒され顔を赤らめるレイ。

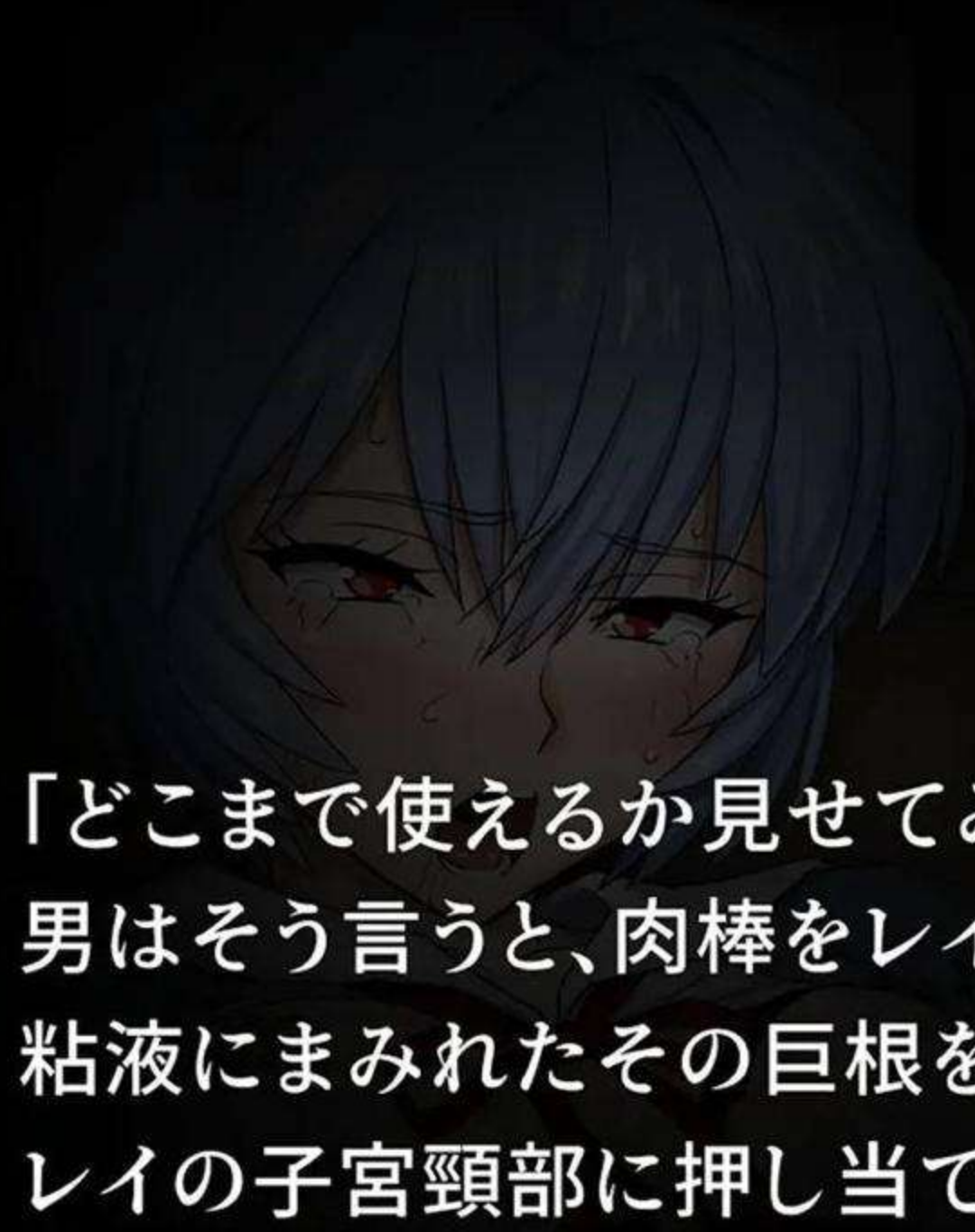


あはあっ

おっと

んあああっ

そこまで
調教済みかよ



「どこまで使えるか見せてみろ」

男はそう言うと、肉棒をレイの尻から引き抜き
粘液にまみれたその巨根を
レイの子宮頸部に押し当てた。

グニュッ！

「はひいっ、あぐううう!!」

グボッ！ズルルルッ!!

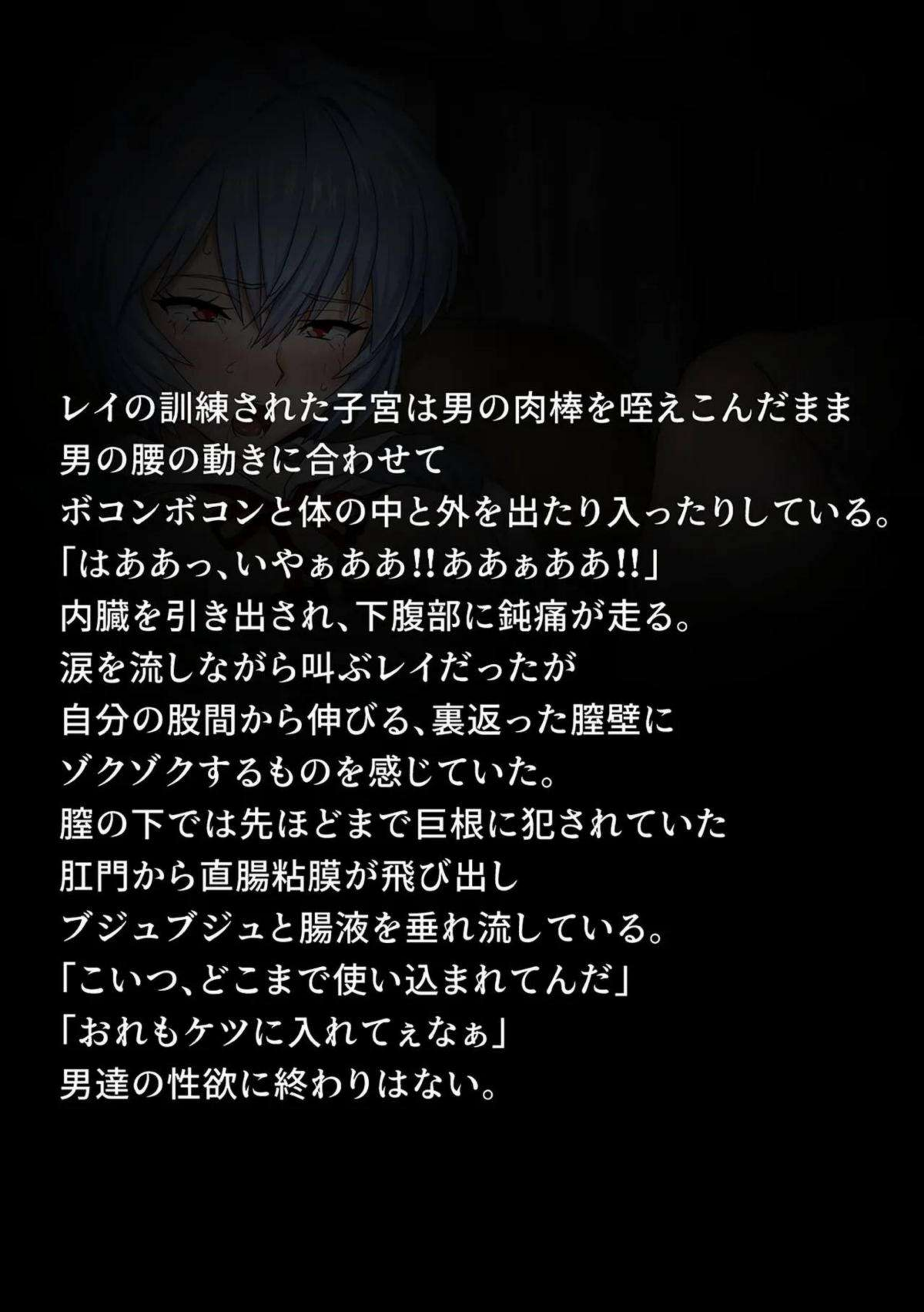
飛び出した子宮を黒い肉棒が無理矢理膣に押し込む。

グリュンッ！

「んあああああ!!」

ボールのような亀頭がレイの子宮口を
こじ開け子宮内に入ってしまった。

通常の女性では決して出来ない行為。



レイの訓練された子宮は男の肉棒を咥えこんだまま
男の腰の動きに合わせて
ボコンボコンと体の中と外を出たり入ったりしている。
「はああっ、いやあああ!! あああああ!!」
内臓を引き出され、下腹部に鈍痛が走る。
涙を流しながら叫ぶレイだったが
自分の股間から伸びる、裏返った膣壁に
ゾクゾクするものを感じていた。
膣の下では先ほどまで巨根に犯されていた
肛門から直腸粘膜が飛び出し
ブジュブジュと腸液を垂れ流している。
「こいつ、どこまで使い込まれてんだ」
「おれもケツに入れてえなあ」
男達の性欲に終わりはない。

いやあああつ

あああああつ



08

とある調教ものの動画



闇市場で出回っていた動画。

赤というかピンク色に統一された狭い部屋に
1組の男女。

色白のショートカットの女性、いや少女は
ほぼ裸のボンデージ姿で自らの手で
足を高く上げている。

少女の背後には全裸の大男。

「やあ、レイちゃん、ようやく俺の番だ
楽しませてもらうぜ」

男の声。

男は少女の股間に巨大なペニスをこすり付けている。

恥ずかしそうに顔を赤らめ

身体をビクビクと震わせる少女。



くうっ

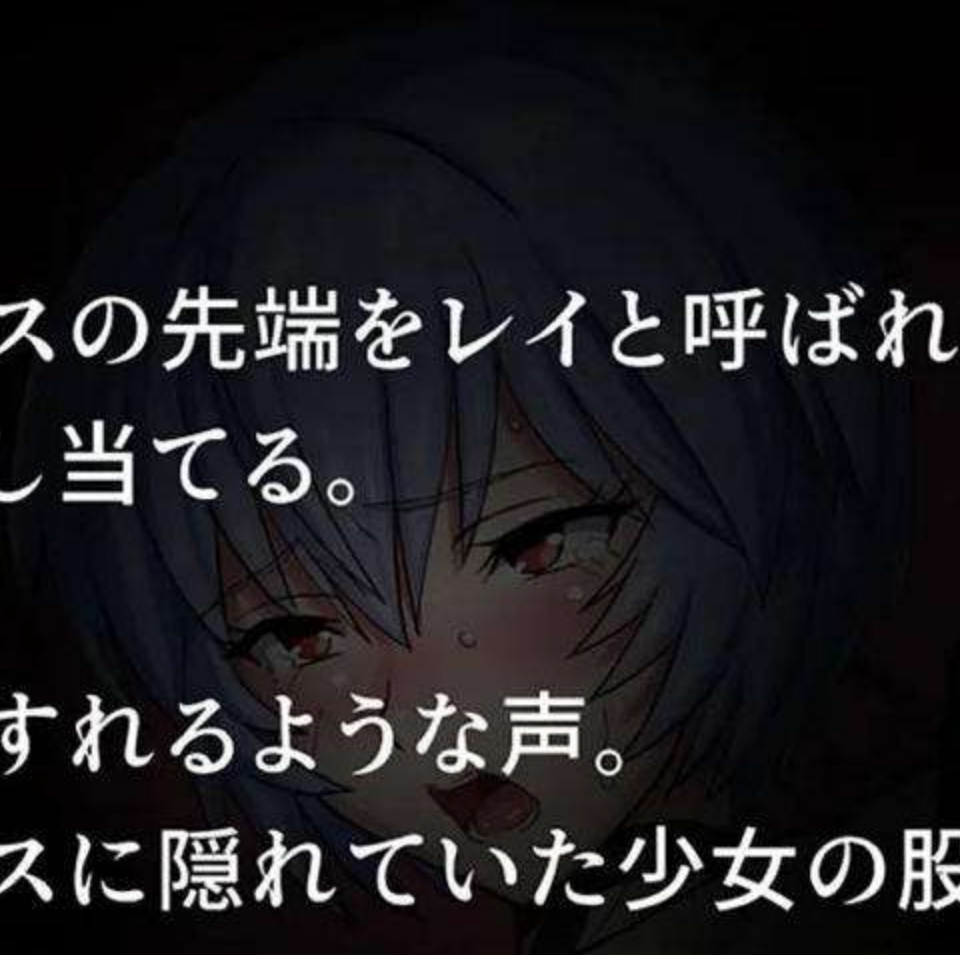
んんっ

ズン

グッ

アッ





男はペニスの先端をレイと呼ばれた少女の
肛門に押し当てる。

「くう・・・」

少女のかすれるような声。

男のペニスに隠れていた少女の股間が晒される。

少女の女性器はベルトで四方に強引に広げられ
膣内部が丸見えになっている。

奥には子宮頸部までが見えていた。

少女はカメラに向けて足を開いているようだ。

ズグググッ！

男が腰を突き出し、巨大な肉棒を少女の
肛門にねじ込んでいく。

「あぐう！くううう！」

少女が顔をしかめ、苦しそうな声を上げる。

細身の少女の尻にとっても入るとは思われない

サイズの男根が根元まで収まってしまう。

ゴブッと、少女の開かれた膣から白く濁った
粘液が流れ出る。

すでに相当な量の精液を膣内に射精されていたようだ。

少女の全身を滴り落ちている液体もどうやら精液らしい。

あぐっ

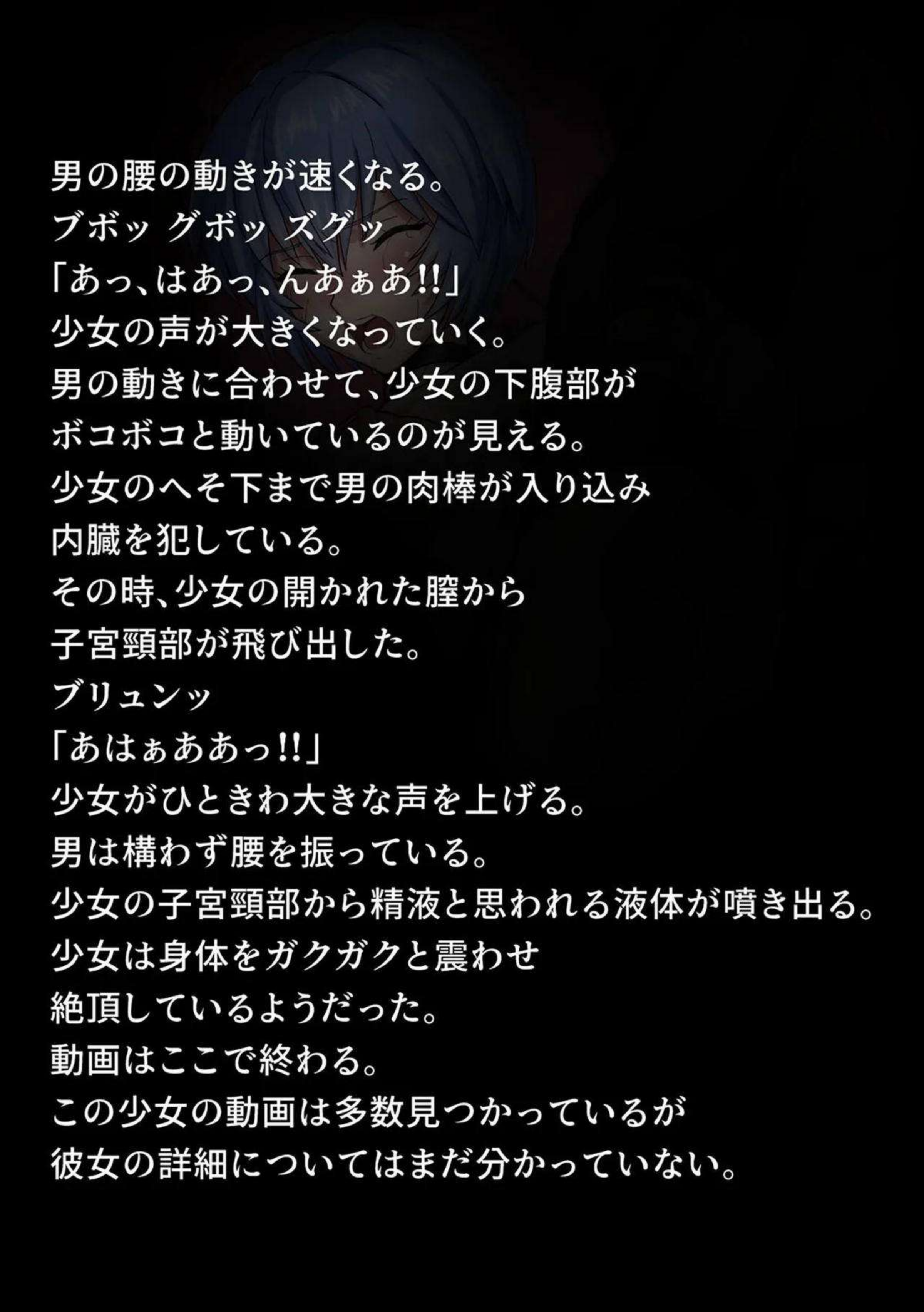
あはあああ

グッ
グッ
グッ

グッ
グッ
グッ

グッ
グッ
グッ
グッ
グッ





男の腰の動きが速くなる。

ブボッ グボッ ズグッ

「あっ、はあっ、んあああ!!」

少女の声が大きくなっていく。

男の動きに合わせて、少女の下腹部が
ボコボコと動いているのが見える。

少女のへそ下まで男の肉棒が入り込み
内臓を犯している。

その時、少女の開かれた膣から
子宮頸部が飛び出した。

ブリュンッ

「あはあああっ!!」

少女がひととき大きな声を上げる。

男は構わず腰を振っている。

少女の子宮頸部から精液と思われる液体が噴き出る。

少女は身体をガクガクと震わせ

絶頂しているようだった。

動画はここで終わる。

この少女の動画は多数見つかっているが
彼女の詳細についてはまだ分かっていない。

あああつ

ビクッ

あはあああつ

ガク

グッ

ゴッ

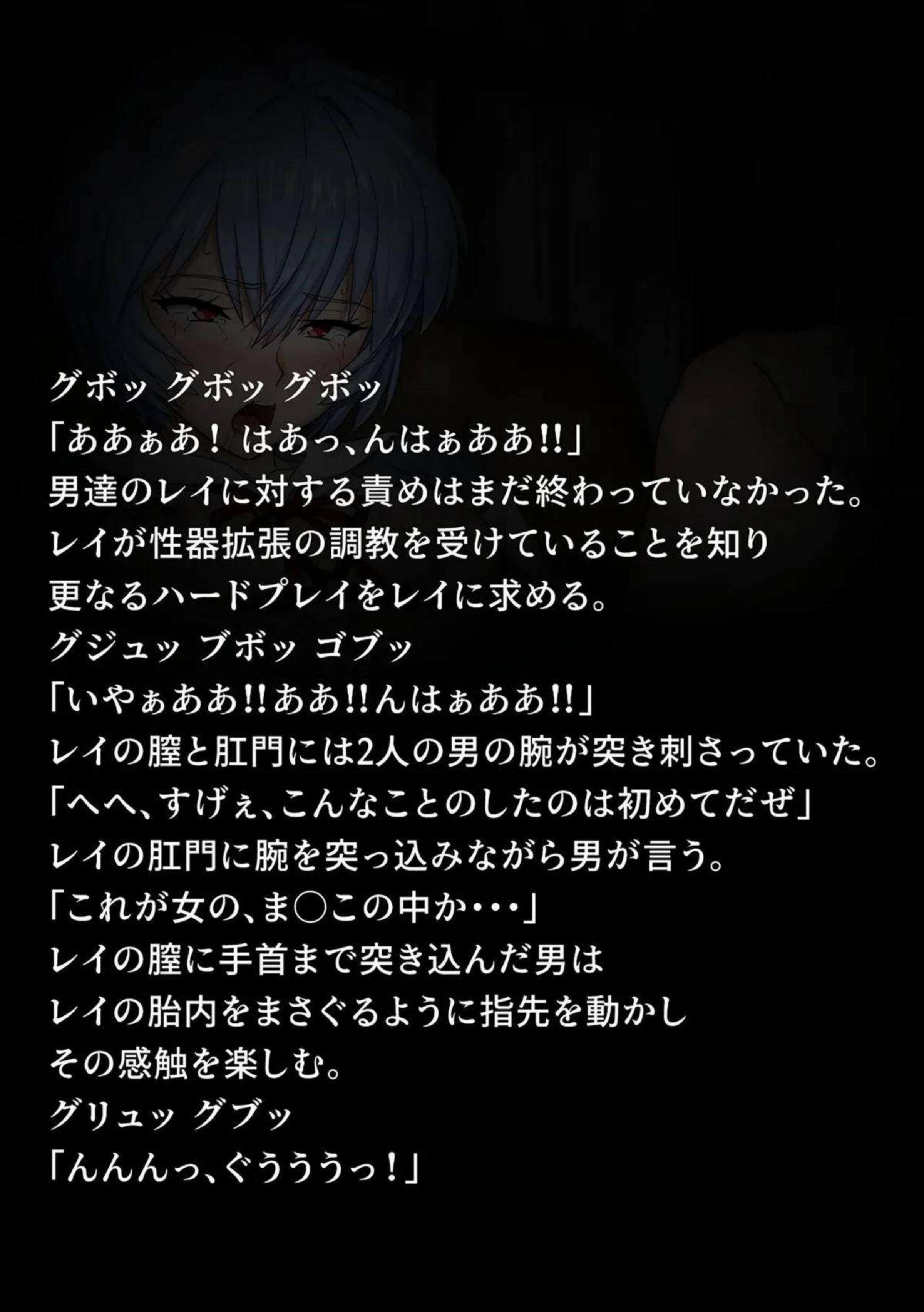
ガク

グッ



09

欲望のままに



グボッ グボッ グボッ

「ああああ！ はあっ、んはあああ！！」

男達のレイに対する責めはまだ終わっていなかった。

レイが性器拡張の調教を受けていることを知り

更なるハードプレイをレイに求める。

グジュッ ブボッ ゴブッ

「いやあああ！！ああ！！んはあああ！！」

レイの膣と肛門には2人の男の腕が突き刺さっていた。

「へへ、すげえ、こんなことのしたのは初めてだぜ」

レイの肛門に腕を突っ込みながら男が言う。

「これが女の、ま○この中か・・・」

レイの膣に手首まで突き込んだ男は

レイの胎内をまさぐるように指先を動かし

その感触を楽しむ。

グリュッ グブッ

「んんんっ、ぐうううっ！」



いやあああ

あっ

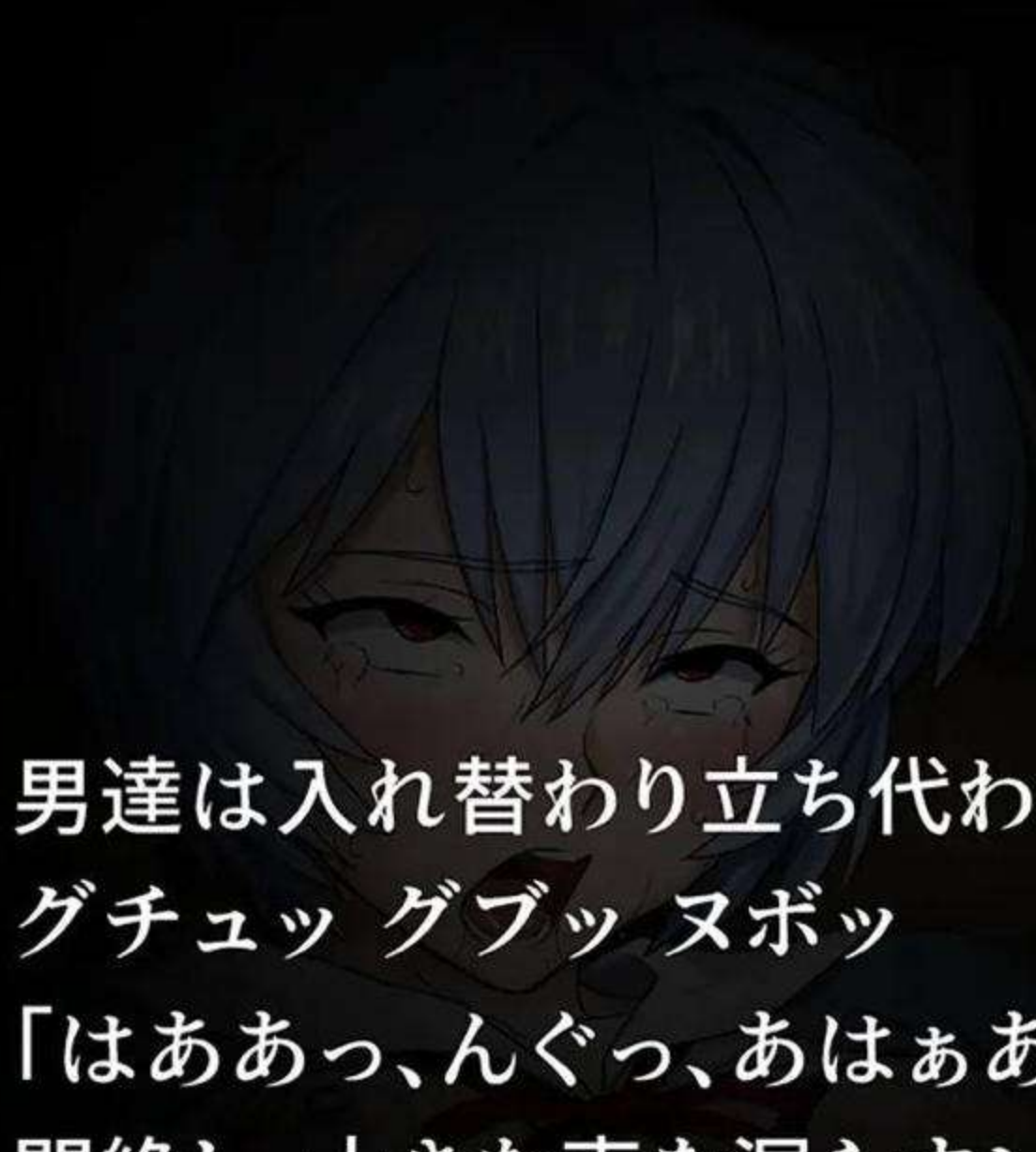
あはあああ

ガク

ガク

グ
グ
グ

グ
グ
グ
グ
グ



男達はいれ替わり立ち代わりにレイの穴に群がる。

グチュッ グブッ ヌボッ

「はああっ、んぐっ、あはあああ!!」

悶絶し、大きな声を漏らすレイの膣には1人
肛門には2人の腕が入っていた。

「すげえ、ここまで出来るもんなんだな・・・」

男の太い腕を股間に3本も突き込まれる

細身で色白な少女を目の前に

男は感心したような言葉をこぼす。

「んんっ!!あぐううう!!」

股間を引き裂かれそうな感覚に苦しみ、涙を流すレイ。

だがその表情には恍惚としたものが見え隠れしていた。



あはああっ

あぐっ

んああああっ

ガク

ガク

グニッ
グニッ
グニッ

グニッ
グニッ
グニッ

グニッ
グニッ
グニッ

グニッ
グニッ
グニッ

グニッ
グニッ
グニッ

性隷少女

せい
れい
しょう
じょ

裏調教編

Faker

01

憧れの人

ある日、友達のS君に

「いいところ見つけたから行こうぜ」と言われ

連れて来られたのはとある駅。

僕の家は学校に近いので駅を利用することは

ほとんど無かった。

「ここの階段、パンチラがよく見えるって有名なんだ」

S君はそう言って笑った。

「そんなのダメだよ」

僕はそう言ったが興奮気味のS君に引っ張られ

物陰に一緒に身を隠す。

「ほら、来たぞ」

S君の視線の先に僕らと同じ学校の制服の

女子が歩いてくる。

「綾波さん・・・？」

同じクラスの綾波さんだ。

綾波さんは電車通学なのか。

「おい、行くぞっ」

綾波さんが階段口に入ったことを確認して

僕たちは後を追った。

他に人は居なく、綾波さんは階段の中程を歩いている。

距離を置いて僕らも続く。

フワッ

一瞬、綾波さんのスカートが広がって

白いパンツが見えた気がした。





S君と僕は顔を見合わせ、身体を反転させると
急いで階段を下りる。

「見えたっ 見えたよなっ？」

S君は興奮して目を見開く。

「う、うん、多分、白かったよね・・・？」

僕は恐る恐る確認する。

「うんっ、うんっ、綾波、いいよなあ」

同じクラスの女子のパンツが見れたことで
S君は興奮が収まらない様子だ。

綾波さんは無口でクラスでは目立たないけど
かわいしい男子に人気があるのは間違いない。
実は僕も憧れている。



あれからS君にまたあの階段に行こうと
何度か誘われたけど、僕は断っていた。
同じクラスの綾波さんのパンツを見てしまったことに
罪悪感を感じていたのだ。
あれから教室で綾波さんを見るとドキドキしてしまう。
そんなある日、駅の方角に歩く綾波さんを見かけた。
僕の心臓がドクンと高鳴る。
「また見れるかも」
良くないと思っけていても、憧れの人隠された部分が見れるかもしれないという欲に勝てず
僕は綾波さんの後を付いて歩いた。
綾波さんが階段口に入った。
僕も急いで後を追う。



綾波さんの後ろ姿を見てふと気づいた。

スカートが短い？

綾波さんが階段を上る度にスカートが
フワッフワッと広がる。

「え？」

僕の目に信じられないモノが映る。

(綾波さん、パンツ穿いてない？)

揺れるスカートの下に見えたのは白いお尻。

(いや、Tバックのパンツだ)

彼女が穿いていたのはお尻に深く食い込んだ
黒いTバック。

白い尻肉がむき出しになってプルプルと揺れている。

(うわぁ、こんなのって・・・)

あまりの光景に目が離せなくなる僕。

息が荒くなり、おちんちんが痛いほど硬くなる。





踊り場に上がった綾波さんが不意に
こっちをチラリと見た。

「あっ」

一瞬僕と目が合う。

綾波さんの真っすぐな目。

「何か、用？」

綾波さんの小さな声に

不自然に硬直してしまう僕。

「ご、ごめんなさい！」

咄嗟に謝って階段を駆け下り

その場から逃げ出してしまった。

(逃げたら余計に怪しいやつじゃないか…)

(たまたま帰り道が同じだったことにも出来たのに)

僕は落ち込み、反省しながら家に帰った。

綾波さんとあんなことがあってから
家でも学校でも綾波さんのことが
気になって仕方が無い。

綾波さんのお尻を思い出しては
オナニーをしてしまう。

(ああ、綾波さん・・・)

でももう嫌われているかもしれない。

僕は悶々とした日々を過ごした。

それから数日経ち

僕はまたあの駅に来てしまった。

「綾波さん・・・」

学校では声を掛けられないのに
こんな待ち伏せみたいなことをして
悪いこととは思っていても
高まる気持ちを抑えられない。

「来たっ」

いつものように駅に向かって綾波さんが歩いてくる。
興奮した僕はつい焦って身を乗り出してしまう。
綾波さんが僕を見つける。

「あ・・・」

一瞬目が合うが、綾波さんは何事も無い様子で
階段口に入ってしまった。

「どうしよう」

後を追うのが怖くなったが、もう見られているし
ただ後ろを歩くだけなんだから。

自分に言い訳をしながら階段へと向かった。

階段口に着き、上を見ると綾波さんが
立ち止まって振り返り、こっちを見ていた。

「あ・・・」

僕は思わず視線を反らし、俯いてしまう。
あんなに何度も後ろから近づかれていたら
気づかれるに決まっている。

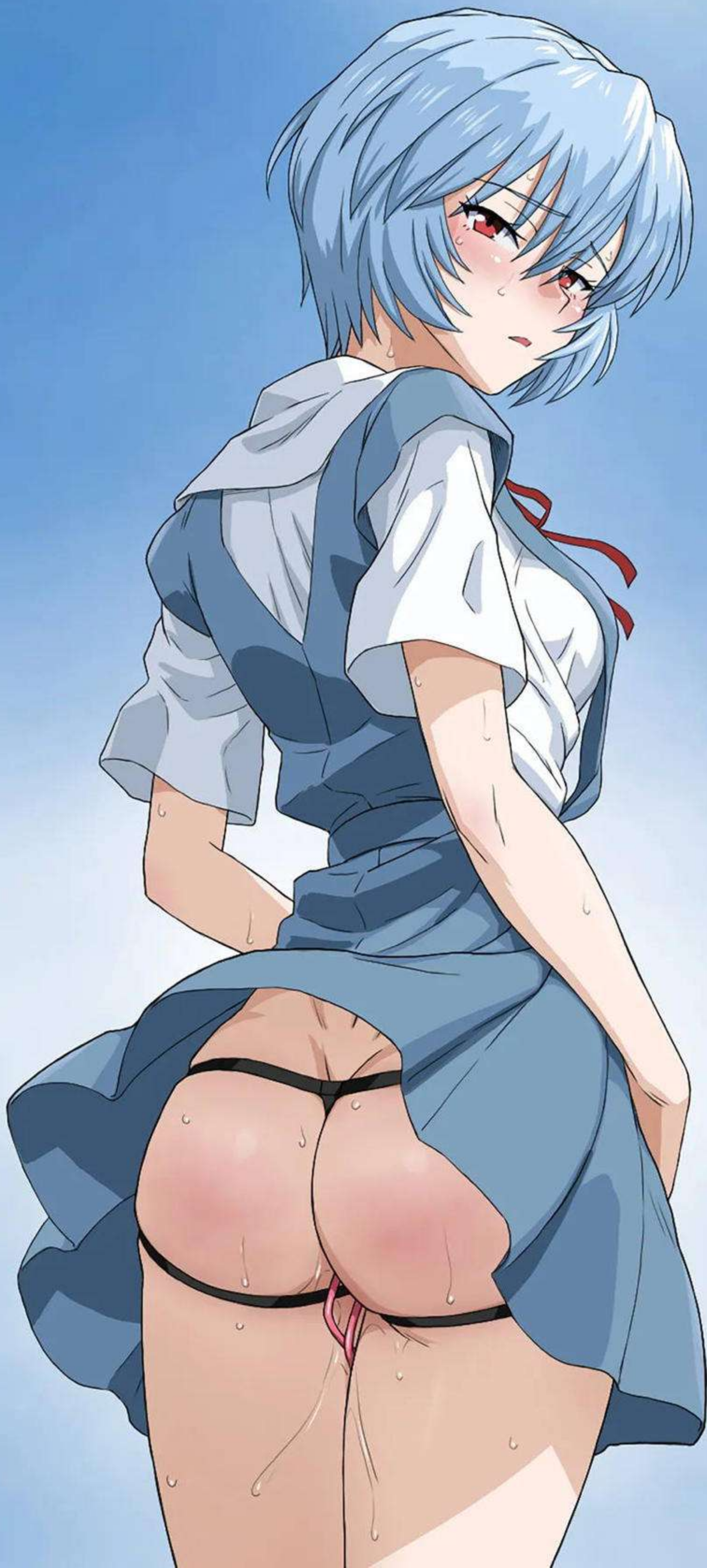
「そんなに見たいの？」

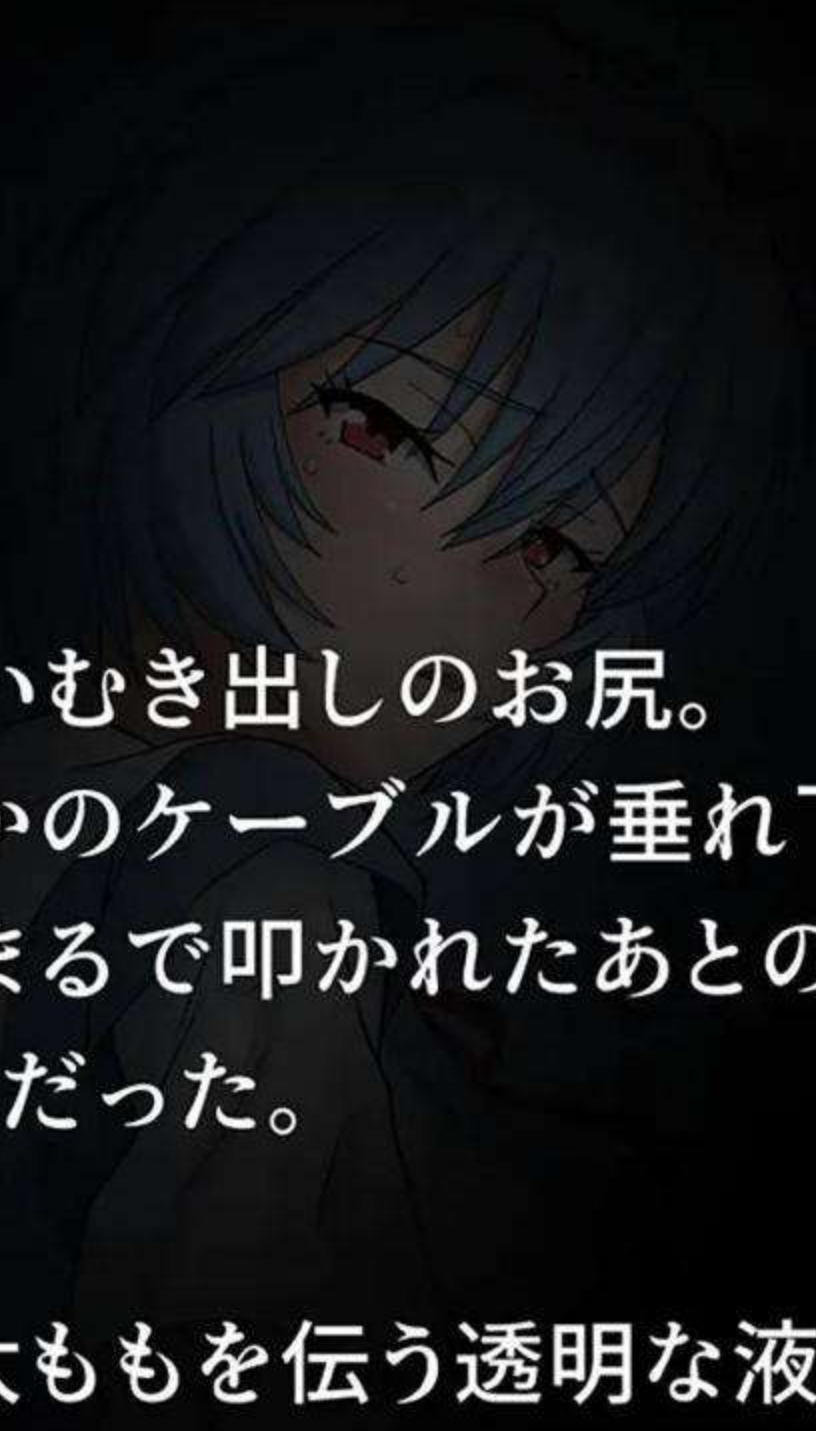
綾波さんの口から意外な言葉が。

「えっ？」

僕が驚いて顔を上げると

綾波さんの一段と短くなったスカートの中が目に入る。





下着を付けていないむき出しのお尻。
お尻と股間から何かのケーブルが垂れ下がっていて
綾波さんのお尻はまるで叩かれたあとのように
赤く腫れているようだった。

「え・・・」

そして綾波さんの太ももを伝う透明な液体。

「うあ、あ・・・」

僕のおちんちんが張り裂けそうなほど硬くなる。

僕はその場から動けなくなった。

「もういい？」

綾波さんは少し恥ずかしそうに顔を赤らめて
スカートを押さえると、階段を上って行ってしまった。

頭の中を色んな考えが巡る。

(綾波さんに何があったのか)

(誰にやられたのか)

(僕の綾波さん・・・)

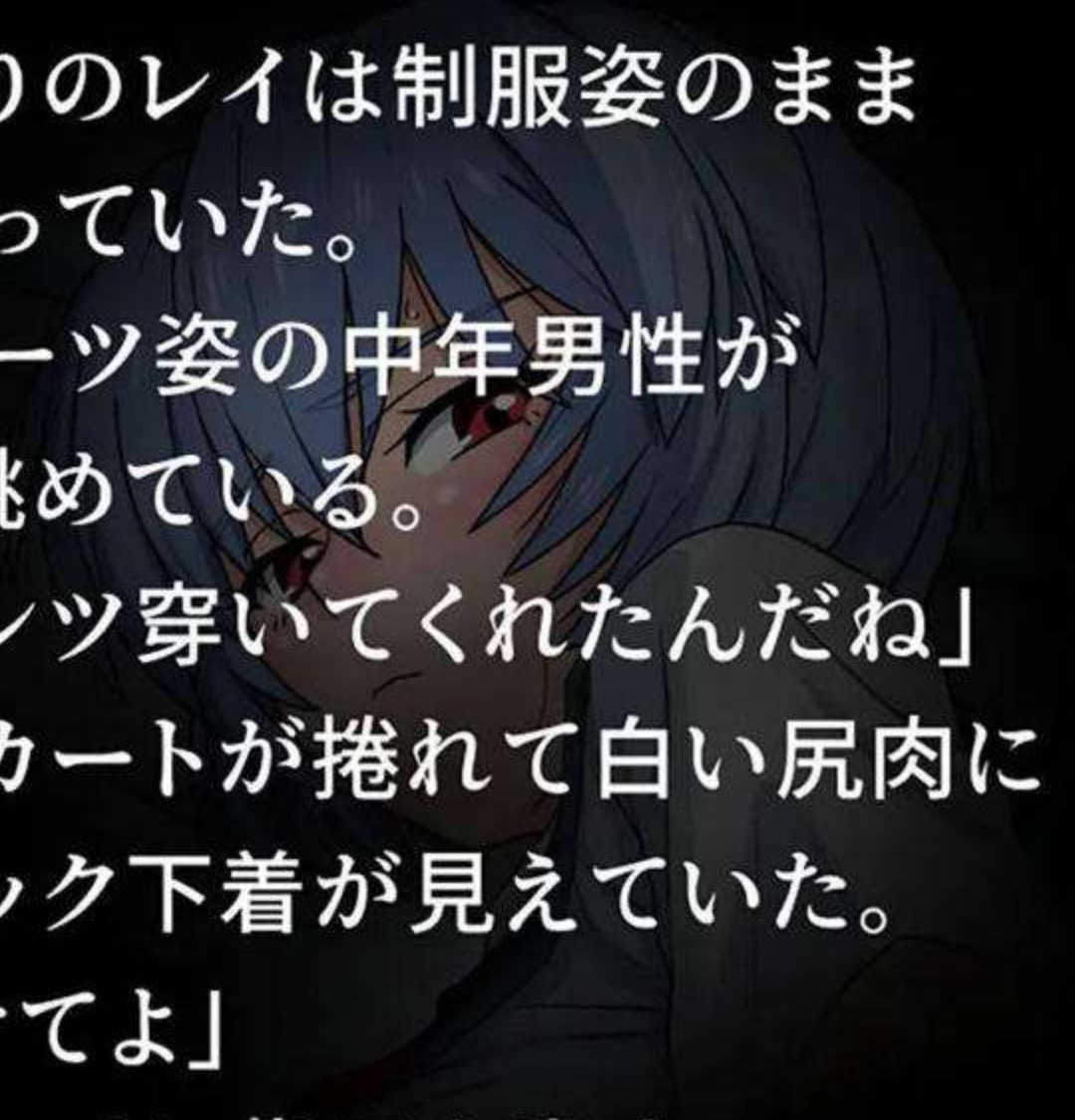
僕は階段口を飛び出し闇雲に走った。

目に焼き付いた綾波さんのお尻と、あそこ・・・。

僕はいつの間にか射精していた。

02

放課後の約束



レイの自室。学校帰りのレイは制服姿のままベッドの上に寝そべっていた。
部屋にはもう1人、スーツ姿の中年男性がベッド脇からレイを眺めている。
「レイちゃん、そのパンツ穿いてくれたんだね」
寝そべったレイのスカートが捲れて白い尻肉に食い込んだ黒のTバック下着が見えていた。
「お尻広げてよく見せてよ」
男は服を脱ぎながらレイに指示を出す。
「はい・・・」
レイは小さく返事をして足を開き尻肉を片手で持ち上げる。
布面積の小さなTバックの下着は女性器を辛うじて隠しているものの尻肉に食い込んだ部分はほぼ紐でレイが尻肉を開いたことで肛門はほとんど見えてしまっている。
「いいね、レイちゃん、すごくエッチだ」
男はレイの足元からベッドに上り、開かれたレイの股間に見惚れている。
レイは顔を赤らめ、さらにグイっと尻肉を拡げる。
「黒も良く似合ってるけど、もっと派手なのも見てみたいな。今度またプレゼントしてあげるよ」
「・・・ありがとうございます」



「さて・・・」

男はレイに手を伸ばすと
その白く和らかな尻に両手を添える。

「ん・・・」

男の力強い手の感触と熱さにレイは
身体をピクリとさせ、小さく声を漏らす。

男がレイの下着に触れると

じわっと濡れた感触が指に伝わる。

「ずいぶん濡れてるね、Tバックで
エッチな気分になっちゃったかな？」

男は下着に指を引っかけ横にずらした。

グイッ

「くうっ」

レイの女性器と肛門が男の目に晒され
声を上げるレイ。

さらに男はレイのおま○こを
両手の指を使って広げていく。

にちゃっ

ぬめった水音を立て左右に開かれるレイの恥肉。

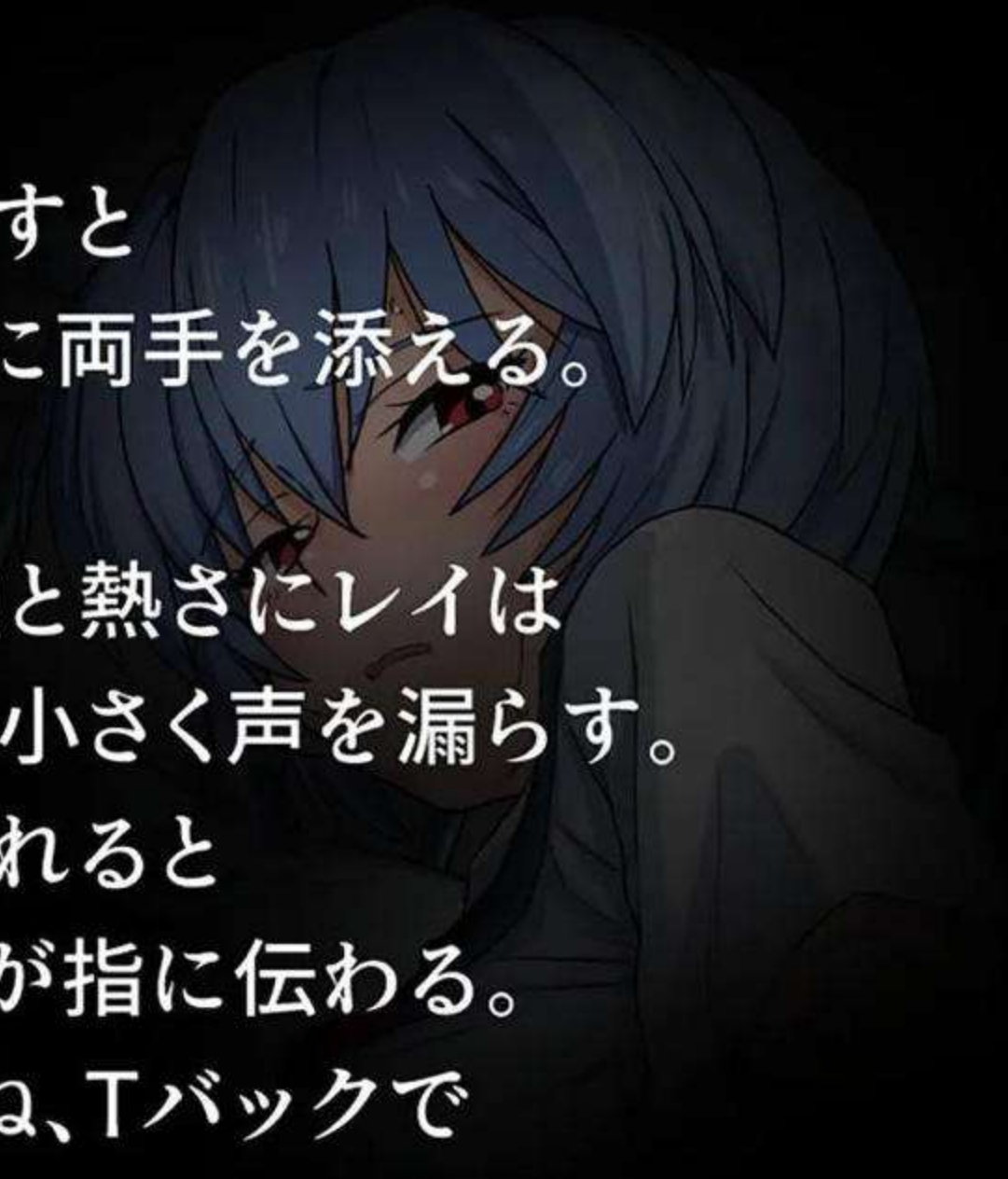
膣口がぽっかりと口を開ける。

「こんなにヌルヌルにして、いやらしい娘だ。

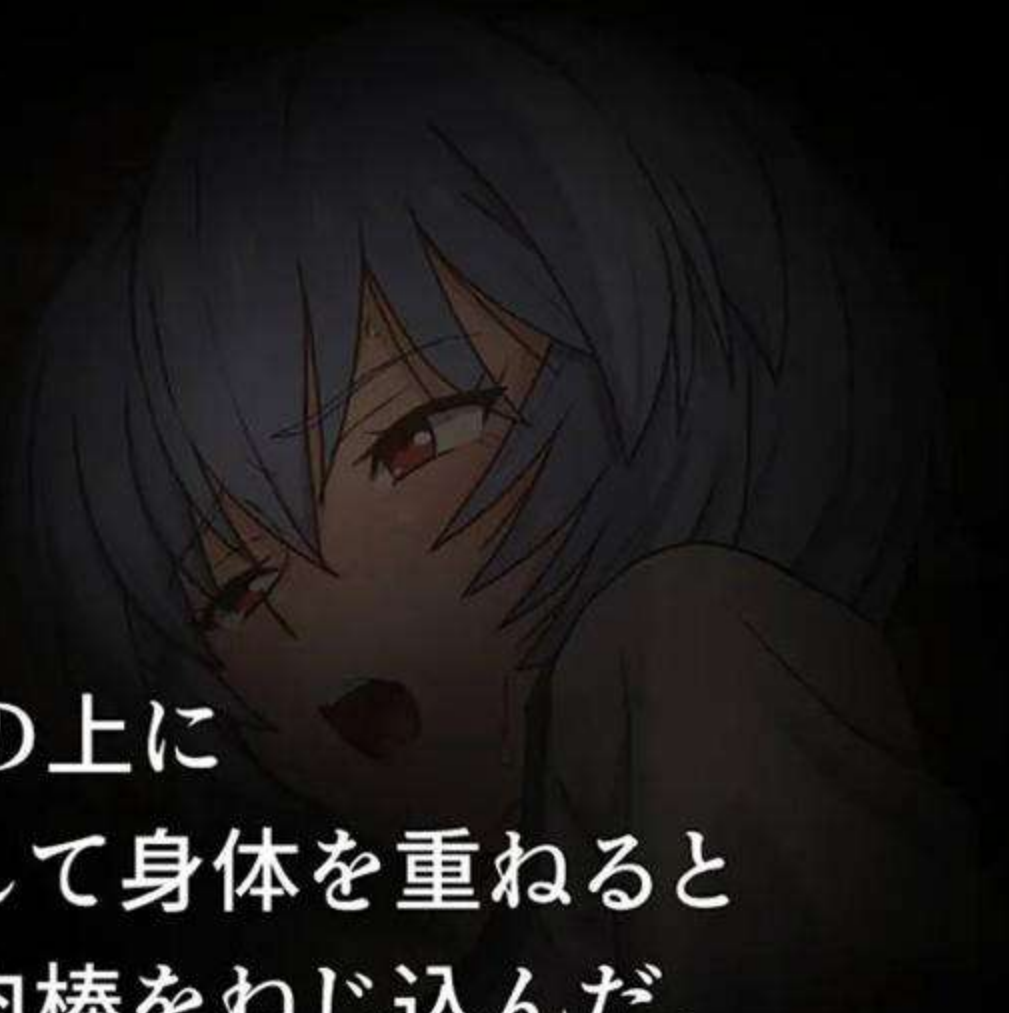
今日もたっぷりと中出ししてあげるよ」

男の股間でビクビクと上下する肉棒がレイの目に入る。

その先端からは透明な粘液が溢れ出していた。







男は寝そべったレイの上に
覆いかぶさるようにして身体を重ねると
レイの膣に熱く硬い肉棒をねじ込んだ。

ヌブブブッ

「あはあっ！」

メリメリと膣が広がる感覚に
レイが大きな声を上げて顔を歪める。
男が腰を突き出すと、大きな肉棒が
レイの中に深々と潜り込む。

ジュブッ ジュブッ ジュブッ

「ハアッ ハアッ レイちゃんのおま○こ
熱くて、狭くて、最高だっ」

ズグッ ズグッ ズグッ

男は腰をリズミカルに動かし
レイの膣肉の感触を味わう。

「んっ、はっ、うっ、はああっ」

レイも動きに合わせて声を漏らし、目を潤ませる。





「ハアッ ハアッ ハアッ」

男の腰と息遣いが速度を上げていく。

ジュブッ ジュブッ ジュブッ

「くううっ、んっ、あっ、ああっ」

レイの声も大きくなる。

「ハアッ な、中にっ、出すぞっ！」

男は苦しそうな声を上げると

レイの尻に腰を密着させた。

ビュルルッ ビュッ ビュビュッ

熱い精液がレイの胎内奥深くに発射された。

「ああっ、くううう！」

男は腰をガクガクと震わせ

すべてをレイに注ぎ込む。

レイの下腹部に熱いものが広がっていく。



「はあ、はあ、はあ・・・」

男の肉棒が抜かれたレイの膣はぽっかりと口を開けたまま白い粘液を垂れ流す。行為を終えたばかりのレイのあられもない姿を見ながら、男は精液とレイの愛液にまみれた肉棒をぬちゃぬちゃとしごく。

「レイちゃんお待ちかねのアナルだよ」

男はそういいながら再びレイに申し掛かると粘液にまみれた肉棒をレイの肛門に押し込んでく。

ムリッ ズッ ズグググッ

「あううう!!」

レイの一段と大きな声。

肛門を無理矢理広げて入ってくる熱いものに歯を食いしばって耐える。

ズグッ ズグッ ズグッ

肉棒をきゅうきゅうと締め上げてくる

レイの肛門を楽しむ男。

「うっ、んっ、くうう！」

ゴリゴリと肛門を抉られ身体をビクビクと震わせるレイ。

「お尻がガバガバになるまで犯してあげるよ」

「はいっ、くううん!!」



03

震える足



とある施設の薄暗い廊下をフラフラと歩く人影。

真っ赤なプラグスーツを着込んだアスカだ。

「ふうっ、ふう…」

アスカは壁の手すりを掴みながら

震える足でゆっくりと進む。

細身で手足が長くスタイルの良いアスカ。

身体に密着したボディスーツを着込んだ姿で

腰をくねらせながら歩く。

「なんでわたしがこんなこと…、んんっ!!」

アスカの身体がビクビクと震え、歩みが止まる。

「ぐうう！ こんなのキツ過ぎるわよ…」

顔は紅潮し、額から汗が流れ落ちる。

アスカは下腹部を押さえながらまた歩き始める。



アスカは体内に性感帯開発用の器具を挿入されていた。
1つは膣内、もう一つは肛門内。

膣内に挿入された器具は筒形で
モーターによって回転と振動を繰り返す。
動きはランダムで止まったかと思えば
しばらくしてまた動き出す。

やわらかい樹脂製だが尖った先端が
子宮頸部に潜り込み、時間を掛けて
子宮口を拡張していく。

「んぐっ、はあ、はあ、もう、だめ・・・」

肛門に挿入された器具は長大な棒状で
直腸を抜け結腸にまで入り込んでいる。

こちらにもモーターが仕込まれアスカの内臓に
振動を与える。結腸内で器具が暴れるたびに
アスカは意識が飛びそうなほどの快感に襲われる。

「ひぐうう!! んいいいい!!」

アスカは白目をむき、涎を垂らしながらも一歩
また一歩と足を出す。

アスカの目的は研究室にたどり着くこと。

そこまで行けばこれを抜いてもらえる。

今はそれだけを考えて歩みを進めていた。

研究室で更なる開発を施されるとは思いもせずに。



04

隠されていたものは

体操部の練習が終わり、他の部員たちが帰った後
レオタード姿のレイは男子の先輩に手を引かれ
男子更衣室へと入った。

中にはレイと同学年の部員の男子が2人。

レイの姿に驚き、もじもじとしてる。

「おう、お前ら、待ってたか」

「は、はいっ」

先輩が声をかけると2人はかしこまって直立する。

「お前ら、レイが好きなんだろう？」

先輩からの核心を突いた質問にオドオドする2人。

「はい、それは、まあ・・・」

レイを目の前にして照れくさそうに答える。

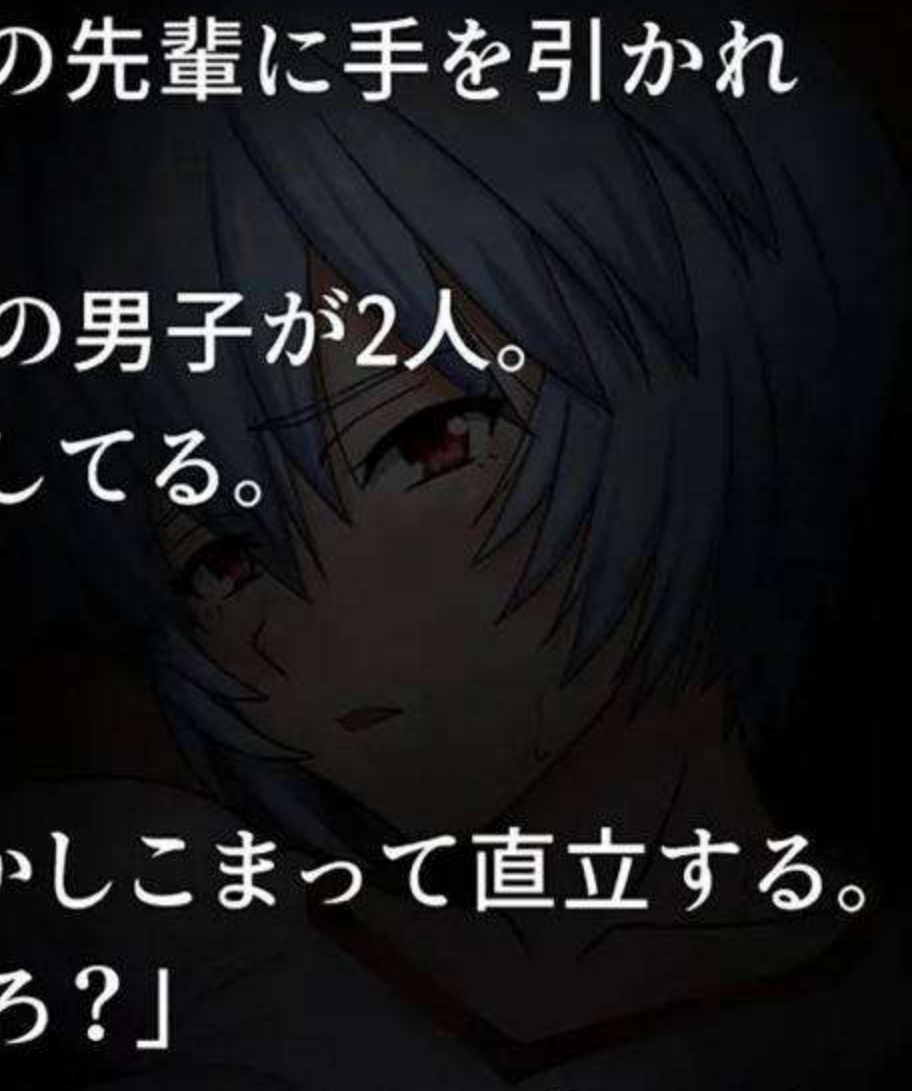
レイは大人しい性格から目立つ存在ではないが
整った容姿とその儚げで他を寄せ付けない雰囲気
に惹かれ、憧れている男子は多い。

「いいものを見せてやるって言ったろ？」

いつも横目に見ていた憧れのレイがすぐ目の前にいる。

汗ばんだ肌、濡れて肌に張り付いたレオタード。

間近で見るとあまりに刺激が強い。



「レイ、そこに座れよ」

先輩はレイにベンチに座るよう指示を出す。

「はい」

レイは言われるままに腰を下ろした。

「お前らよく見てろよ」

先輩がレイの背後に立つ。

「レイ、足を広げろ」

「・・・はい」

ゆっくりと足を開くレイ。

先輩がその開かれた足を背後から持ち上げると

レイは男子二人に股間を突き出し

見せつけるような格好になった。

「くうっ」

レイは頬を赤らめ、二人から目を反らす。

「うああ・・・」

レイのあられもない姿。

二人の男子はレイの股間にくぎ付けになる。

股間のモノがみるみる硬くなり

腰が引けていく男子達。

「ははは、まだまだこんなものじゃないぞ」





「お前ら、女をあそこ、触ったことあるか？」

「い、いや・・・」

「いいぞ、レイのま○こ、触ってみろよ」

「えっ」

突然の提案に固まる2人。

恥ずかし気に視線を反らすレイの顔と

レオタードの食い込み、ぷっくりと肉のはみ出した股間。

目の前の誘惑に一気に体が熱くなる。

「憧れの綾波のま○こ、好きにしていんだぞ

ほらどっちからやる？」

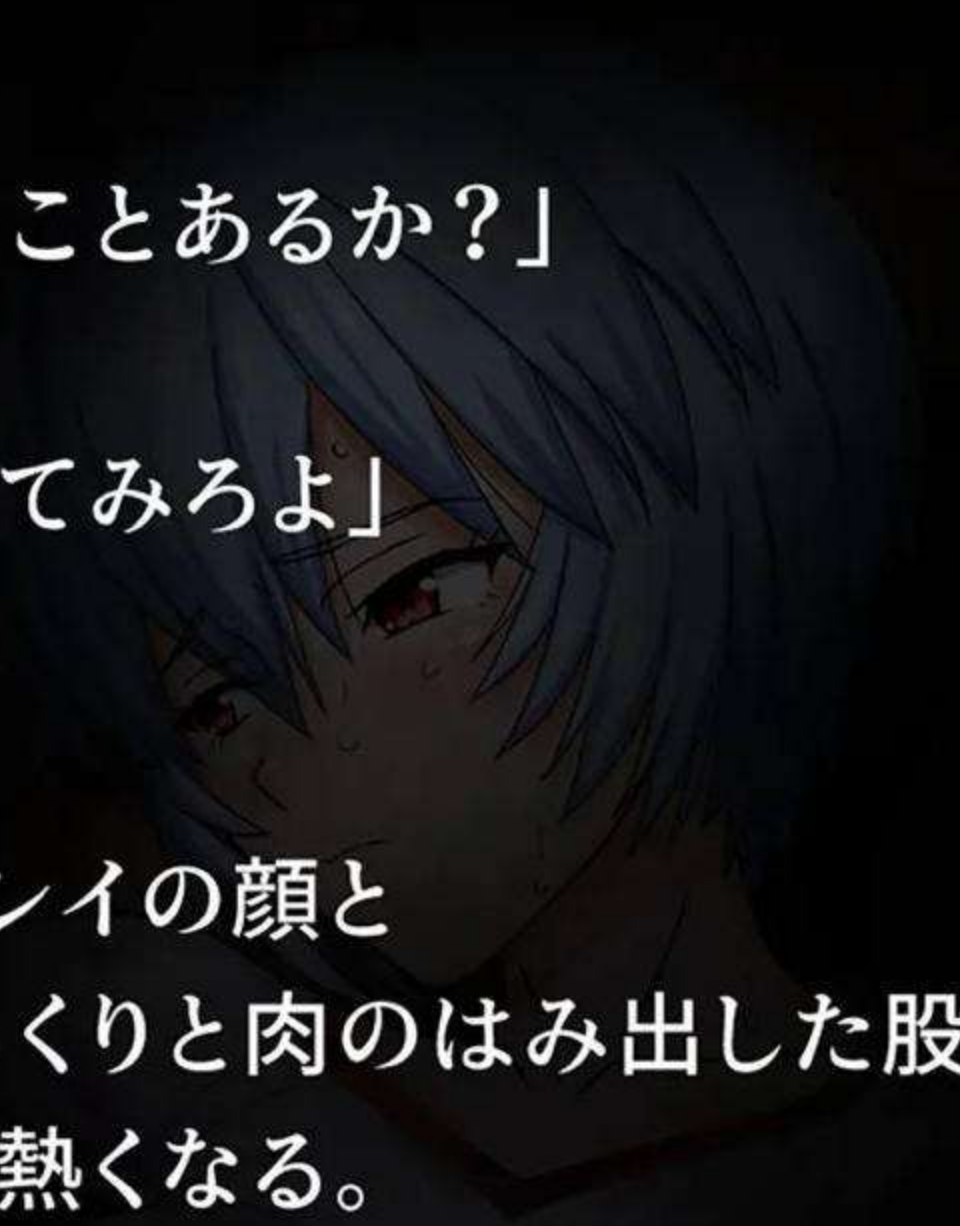
二人は顔を見合わせ、お互いの出方を伺う。

「じゃ、じゃあ、おれから・・・」

1人が前に出て、震える手をレイの尻に添える。

「はあっ、はあっ！」

憧れのレイの尻肉に触れ、心臓の高鳴りが抑えられない。



「綾波、いいのか・・・？」

男子はレイの尻に手を当てたまま、恐る恐る確認する。

「・・・うん」

レイが小さく返事を返した。

ゴクリッ

男子の喉が鳴る。

「よし・・・」

意を決した男子はレオタードのクロッチの左右にはみ出た肉に指を乗せ、左右に広げた。

ミチッ

湿った肉ひだが広がる音。

柔らかなレイの恥肉が割り開かれ

クロッチの脇からピンクの小陰唇がはみ出る。

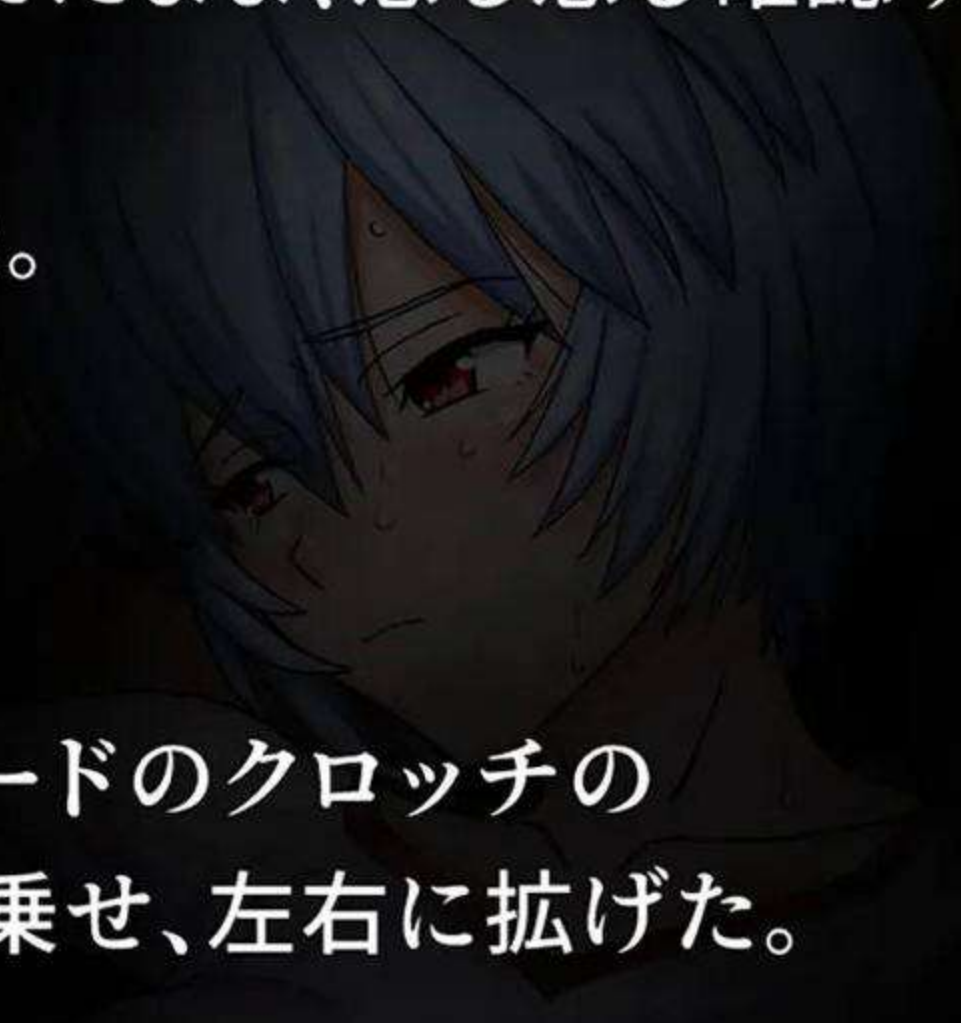
「うああ・・・」

柔軟に形を変えるレイのおま○このあまりのエロさに声を漏らす男子。

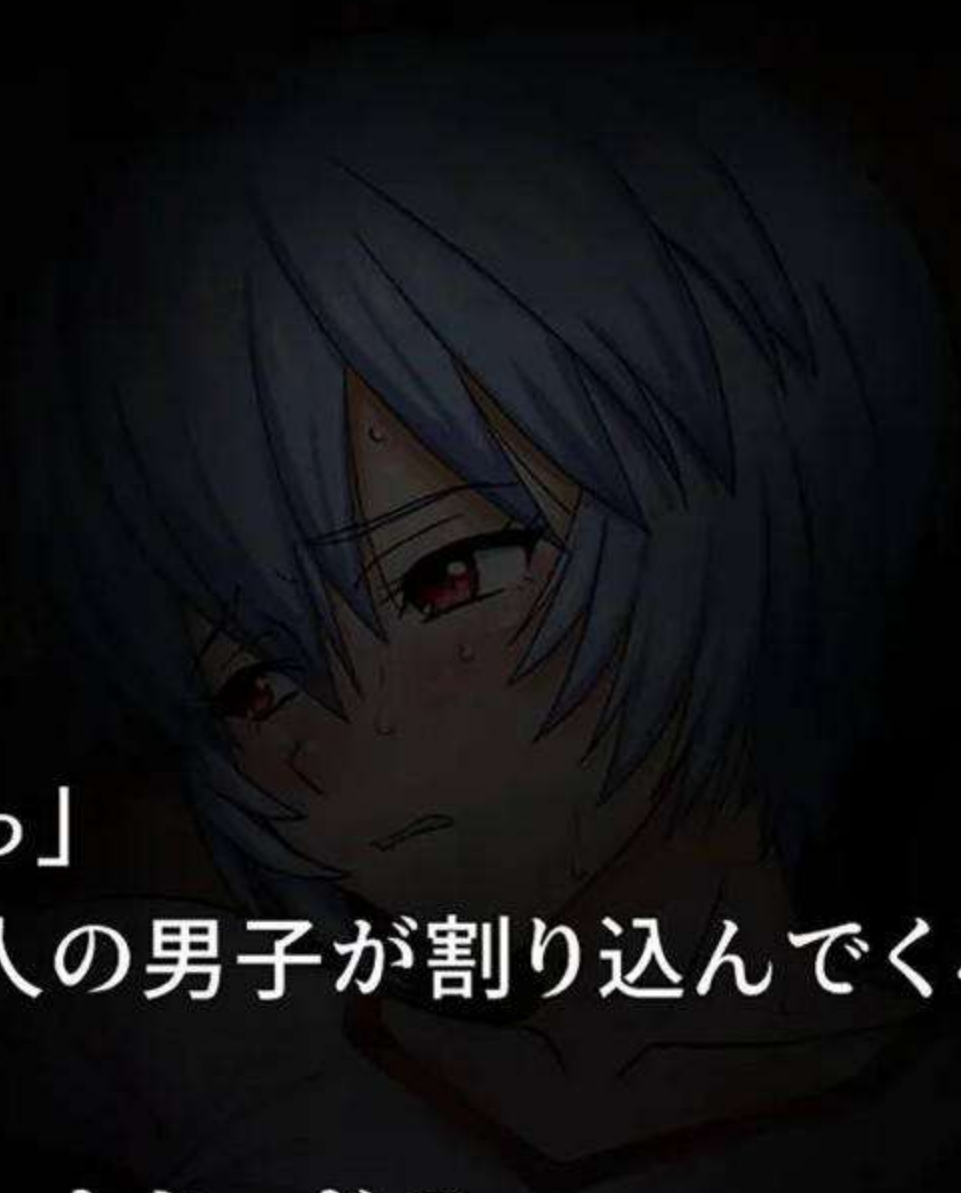
「んんっ」

女性器を開かれ、敏感な膣肉がレオタードに触れる。

その刺激でレイは思わず声を漏らす。







「お、おれにもやらせろよっ」

我慢できなくなったもう1人の男子が割り込んでくる。

「あっ、おいっ」

割り込んだ男子はレイのレオタードの股間部分をめくり上げ、横にずらした。

「くうんっ」

むき出しにされるレイの女性器と肛門。

「ああ、綾波い・・・」

男子は夢中でレイのおま○こをグニグニとまさぐる。

「ううんっ」

荒々しい刺激にレイの腰がビクリと弾む。

その時、レイの膣口からぽろんと何かが飛び出した。

「わっ、なんだ、これ・・・」

男子は驚きながらそれを掴んでみる。



男子の手に伝わる振動と微かなモーター音。

「んんっ」

レイの反応が大きくなる。

「先輩、これって・・・」

男子は顔を上げ、上級生の方を見る。

「おれが仕込んでおいたんだよ」

上級生はニヤリと笑みを浮かべる。

「それ、引っ張って出してみろよ」

レイの膣から飛び出たゴム紐のようなもの。

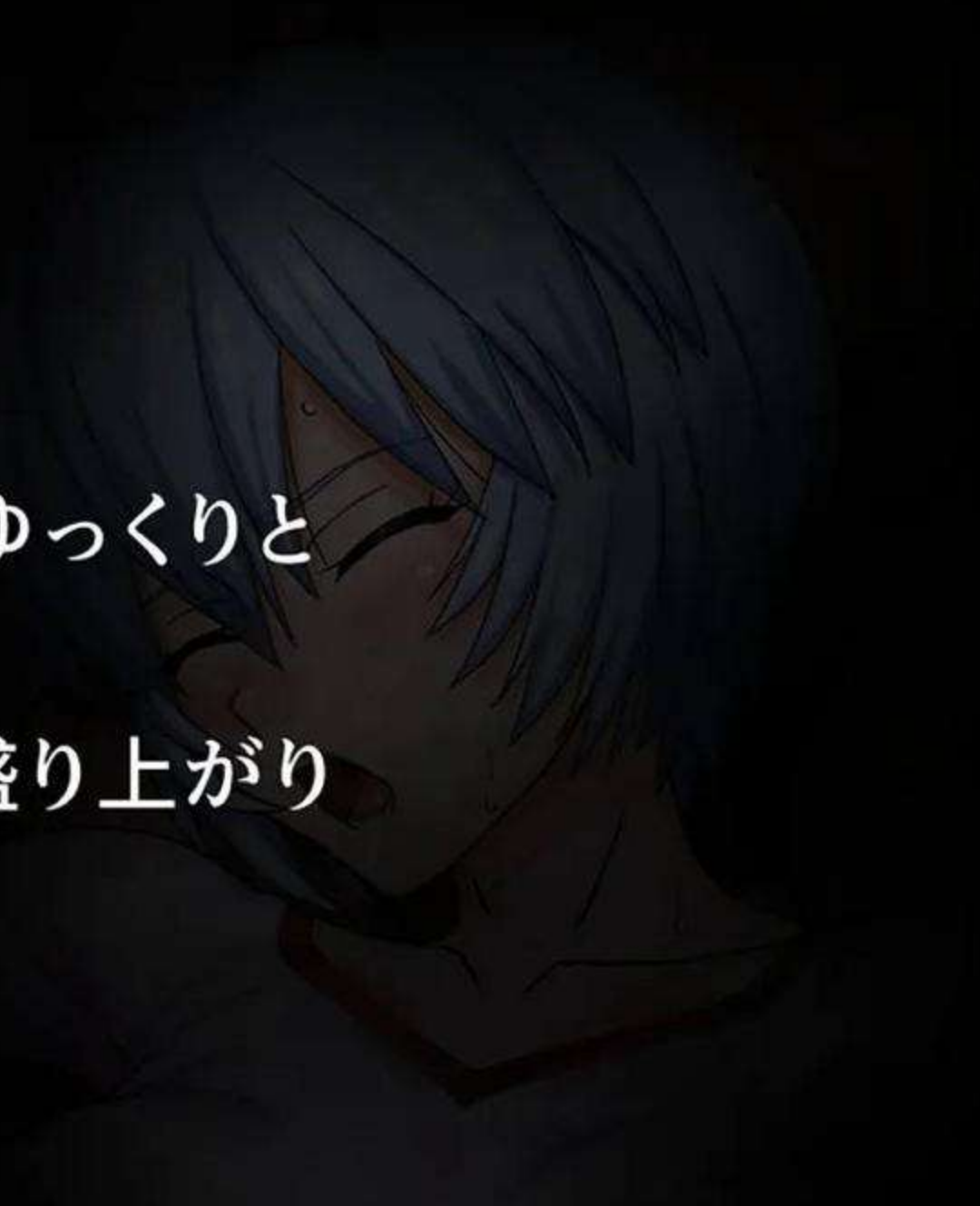
「い、いいんですか、じゃあ・・・」

男子は紐を握り、手に力を込めて引いていく。

グッ グググッ

「ああっ、だめっ！」





レイの膣内にある何かがゆっくりと
体外に向けて動き出す。

レイの女性器がモコッと盛り上がり
膣口が徐々に開いていく。

「あぐううう!!」

レイの苦しそうな声。

男子はレイのおま○この変化に夢中で
手を止められない。

ボコンッ

「はぐうう!!」

レイの膣から飛び出したのは大きなバイブレーター。

細身の缶ジュース並みのそれはレイの膣を
ぎちぎちに広げ、めくり上げながら生れ出る。

「すげえ・・・」

「でか・・・」



バイブレーターはブブン、ブブンと唸りを上げ
レイの膣から抜け落ちた。

ゴトンッ

「んはぁっ」

長く自分を苦しめていた異物が除去された
解放感から、脱力して大きな吐息を漏らすレイ。

「綾波、こんなの入れて練習してたのか・・・」

抜き取られたバイブと口を開けたままの
レイの膣を見て、男子が呟く。

「お前らの憧れの綾波はこんなエロい
女だったってことさ」

先輩男子がそう言った。

「でも、まだ終わりじゃないぞ」

先輩が口をニヤリと歪ませる。

「え・・・」

男子達が困惑した顔を見せる。

「レイのケツに指入れてみろよ」

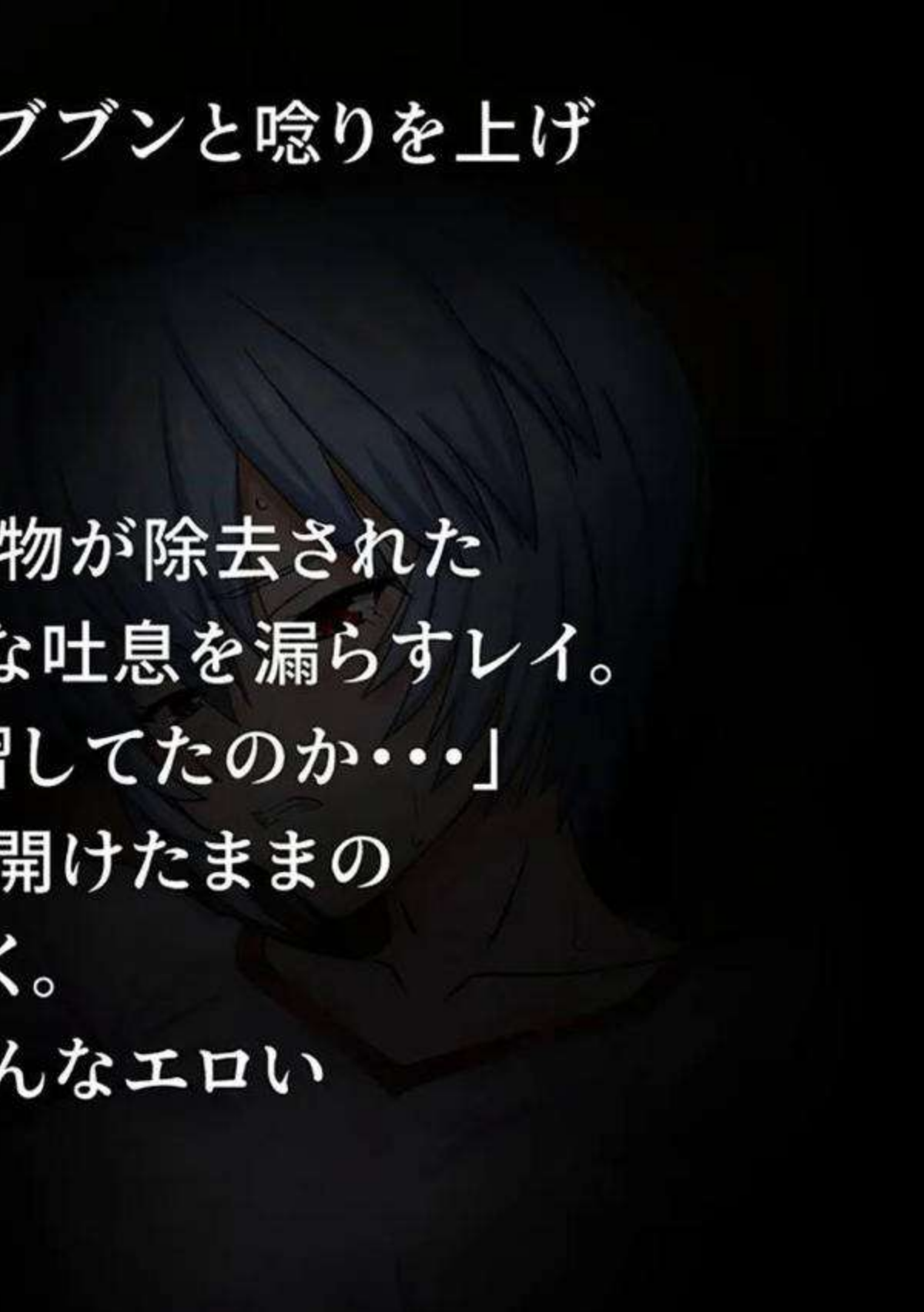
先輩の言葉に、男子達の視線がレイの肛門に集中する。

「まさか、こっちにも何か・・・？」

「いいから、やってみろよ、指2本でもいいぞ」

「マジですか？」

後輩男子はまた唾をゴクリと飲み込むと
レイの尻穴に指を伸ばす。



「あ・・・、だめっ」

レイの小さな声。

グッ ズブズブッ

「あああっ!!」

男子の2本の指がレイの肛門をこじ開け
深く突き刺さる。

レイは身体をこわばらせ、その刺激に耐える。

「うああ、入った、入ったぞ」

レイの尻に根元まで埋まる指。

「どうだ、何かあるか？」

先輩の声。

「え、んん、これか？」

男子が指でレイの肛門内をまさぐると
グチュッ グチュッ と音が漏れる。

「くううっ、んっ、あううっ」

レイの腰がビクビクと弾む。

「あったか？それ引っ張り出してみろよ」

男子は指先でリング状のものを探り当てた。

「い、いいんですか、引っ張って・・・」

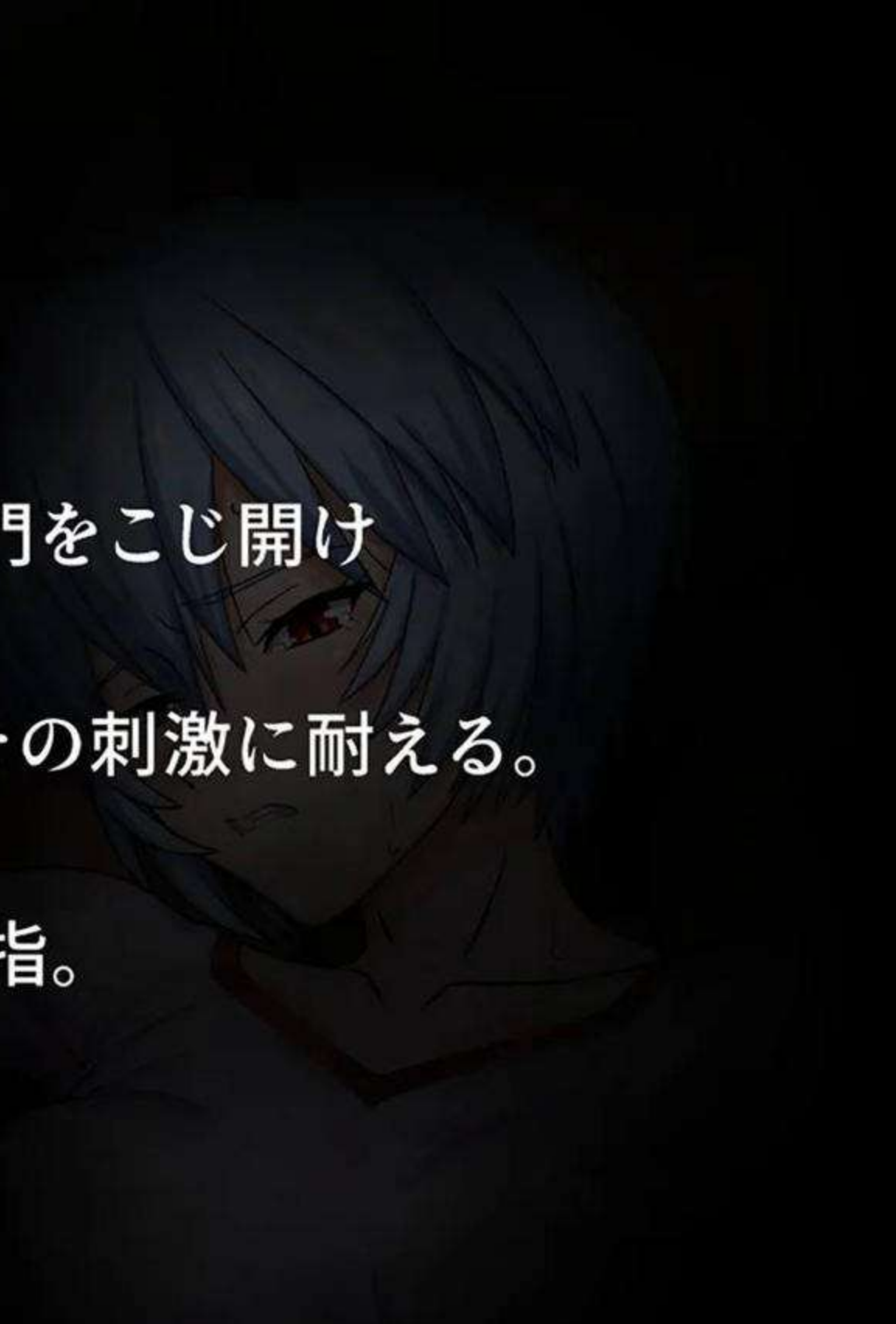
「大丈夫だ、レイも取って欲しいよなあ」

先輩の意地悪な質問。

「くうう、は、はい、取ってください」

レイにはそう言うしかなかった。

「だってよ、ほら思い切ってやれよ」





ズッ ズズッ グボッ

男子が指に引っかけてリングを
レイの肛門から引っ張り出した。

「あっ、あっ、あああ!!」

レイが大きな声を上げる。

レイの尻の中に入れられていたのは
50センチもある長大なディルド。

それがレイの結腸内にまで入り込んでいた。

ズルッ ムチムチムチッ

「さあ、レイ、思いっきりひり出せ」

男子に引き出され肛門を突き抜けた
ディルドはもう止まらない。

「はああっ! ひぐっ、あはああああ!!」

強烈な排便感にレイは思わず力んでしまう。



ブリュッ ムリムリムリッ！

肛門が捲れて大きく盛り上がり

大蛇のようなディルドが次々にひり出される。

「ひいっ、んぐっ、ぐうううう!!」

レイが大きな声を上げると同時に

レイのオマンコから透明な汁が噴き出す。

ブシュッ ビュッ ビュビュッ

「あはぁっ、あっ、ああぁっ!!」

レイは全身を震わせ、悲鳴とは違う声を上げた。

「ははは、いいぞ、レイ、それがお前の本当の姿だ」

先輩はレイの痴態を嬉しそうに眺める。

肛門から巨大なディルドをぶら下げて潮を吹くレイ。

大きく口を開けた膣口の中では下がってきた

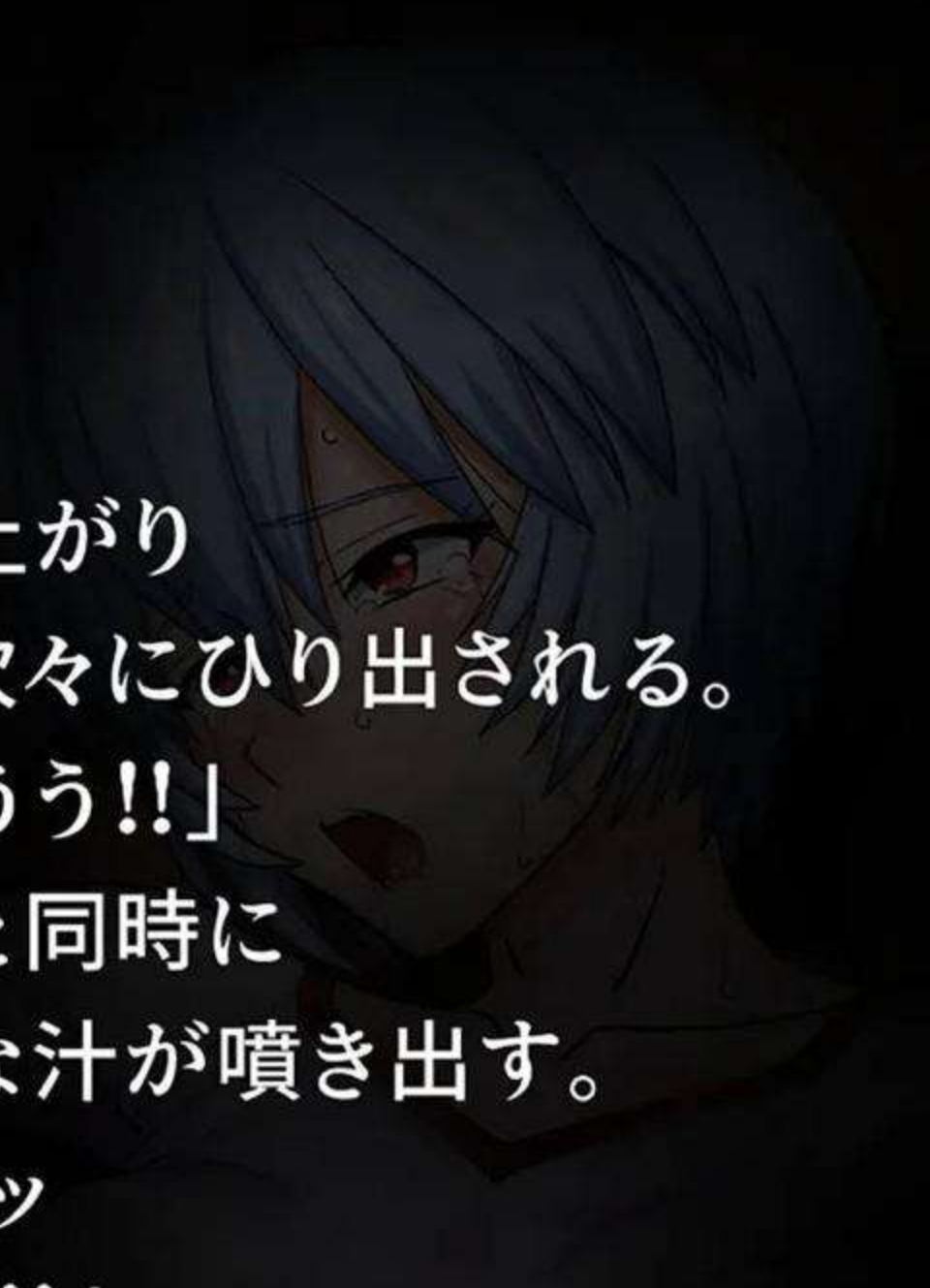
子宮口がビクビクと動いているのが見えた。

普段無口で物静かな同級生が恥部をさらけ出して

絶頂する姿に、後輩2人は言葉を失っている。

「さあ、おれはこれからレイともっと楽しむが

お前らはどうする？」





05

変えられていくカタチ

レイの自室。

猫耳のついたセクシーなボンデージスーツを着込んだレイはベッドの上に無防備に寝そべり中年の肥満男に身を任せていた。

ギシッ ギシッ ギシッ

「んっ、はっ、んんっ」

男が動くとベッドが軋み、男の腹の圧力でレイも声を漏らしてしまう。

細身のレイは男の身体に埋もれてしまいそうだった。男は体を起こすとレイの両ひざに手を置き足を開かせる。

男の太い陰茎がレイの股間の割れ目に潜り込み出し入れされる様子がよく見える。

「レイちゃん、今日もかわいいねえ」

男はぐふぐふと笑いながら

レイの股間に腰を打ち付ける。

結合部をまじまじと見られても

レイは男から視線を反らしただけで嫌がることなく犯され続ける。

ズグッ ズグッ ズグッ

「んはぁっ、んっ、あうっ」

股間に深々と肉棒を突き入れられる。

レイは全身に汗を浮かべ、顔を赤らめながらただそれを受け入れていた。



「はあっ、はあっ、レイちゃんの、おま○こ、最高だよ」

ズグッ ズグッ ズグッ

男の腰の動きが早まっていく。

「今日もたっぷり出すからね」

男はそう言うと身体を前傾させ

レイの肩脇に手を付き、身体を重ねると

身体全体を上下させ、より深く

強くレイの中に肉棒を突き込む。

ヌグッ ヌグッ ヌグッ

「んぐっ、はあっ、ああっ」

伸し掛かる肥満体の圧力と突き込みの

激しさにうめき声を上げるレイ。

ズッ ズッ ズッ

「ぐうっ、出るっ、出るよっ！」

ビュビュッ ビュルルッ ビュッ

男が腰を震わせ、背中を反らして

レイの膣内に大量に精を放つ。

「んんっ!!くうんっ、んはああ・・・」

膣内に熱いものが広がり、大量の粘液によって

肉棒の動きがスムーズになったのを感じる。





「ふう、ふう、ははは・・・」

あまりの気持ちよさに男から笑いが漏れる。

男は息を整え身体を起こすと

レイから肉棒を引き抜いた。

ぬぼっ

「んんっ」

柔らかくなった肉棒がずるりと抜け出ると

ぽっかりと大穴が開いたレイの膣口から

ドロリとした白濁液が流れ出す。

「レイちゃんのおま○こが気持ち良すぎるから

今日もいっぱい出しちゃったよ。

レイちゃんも気持ちよかったかな？」

そう言いながら、男は開かれたままの

レイのおま○こを手で撫でつける。

ぬちゅっ くちゅっ

「くうんっ」

射精されたばかりで敏感になっている部分を

乱暴に撫でられ、思わず腰をくねらせるレイ。

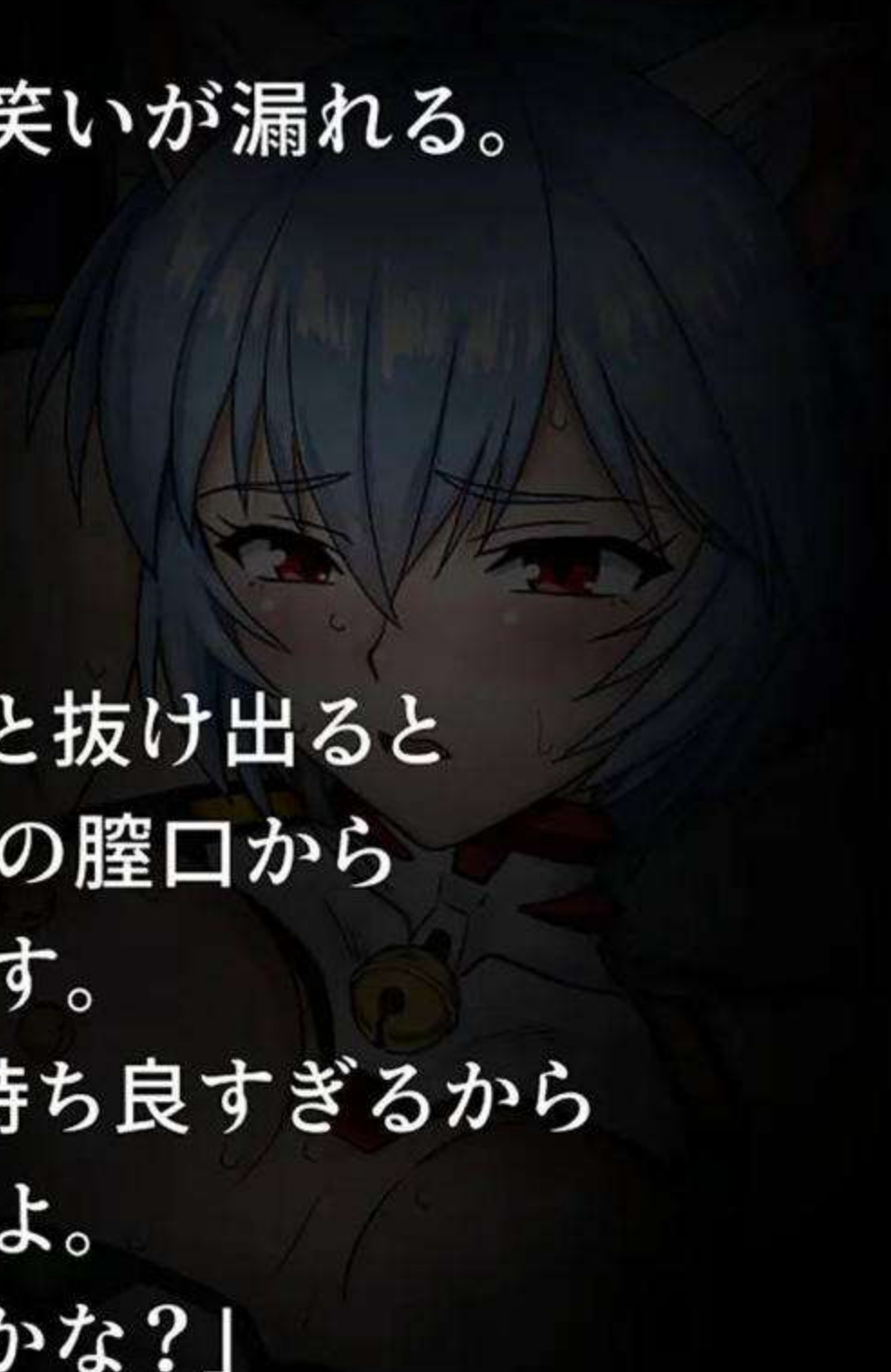
「さあ、次はレイちゃんの好きなこれだよ」

男は粘液でぬるぬるになった手をレイに見せつけると

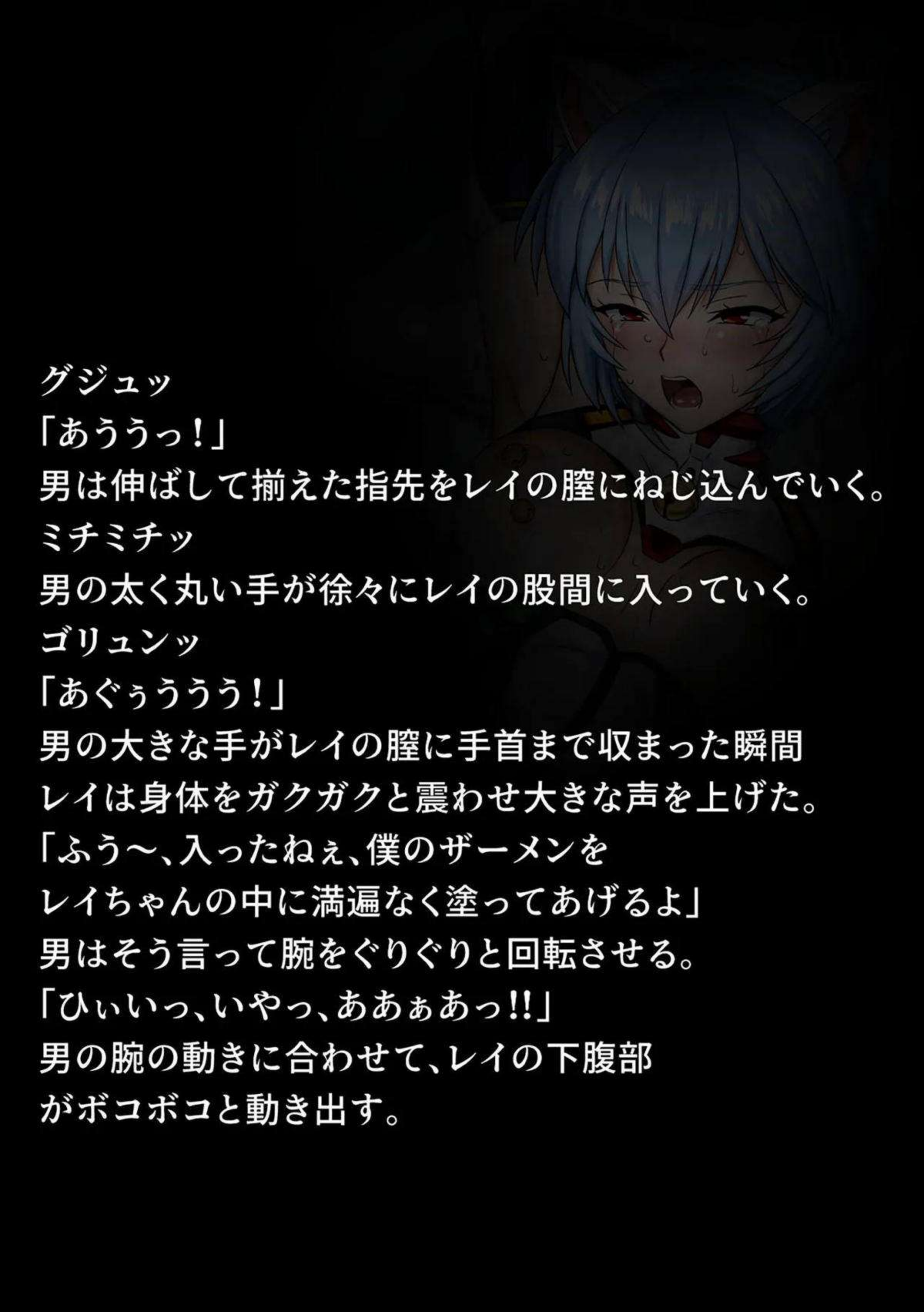
その指先をレイの股間に向けた。

「ああ・・・」

男の行動の意味を悟ったレイは小さく声を上げる。







グジュッ

「あううっ！」

男は伸ばして揃えた指先をレイの膣にねじ込んでいく。

ミチミチッ

男の太く丸い手が徐々にレイの股間に入っていく。

ゴリュンッ

「あぐううう！」

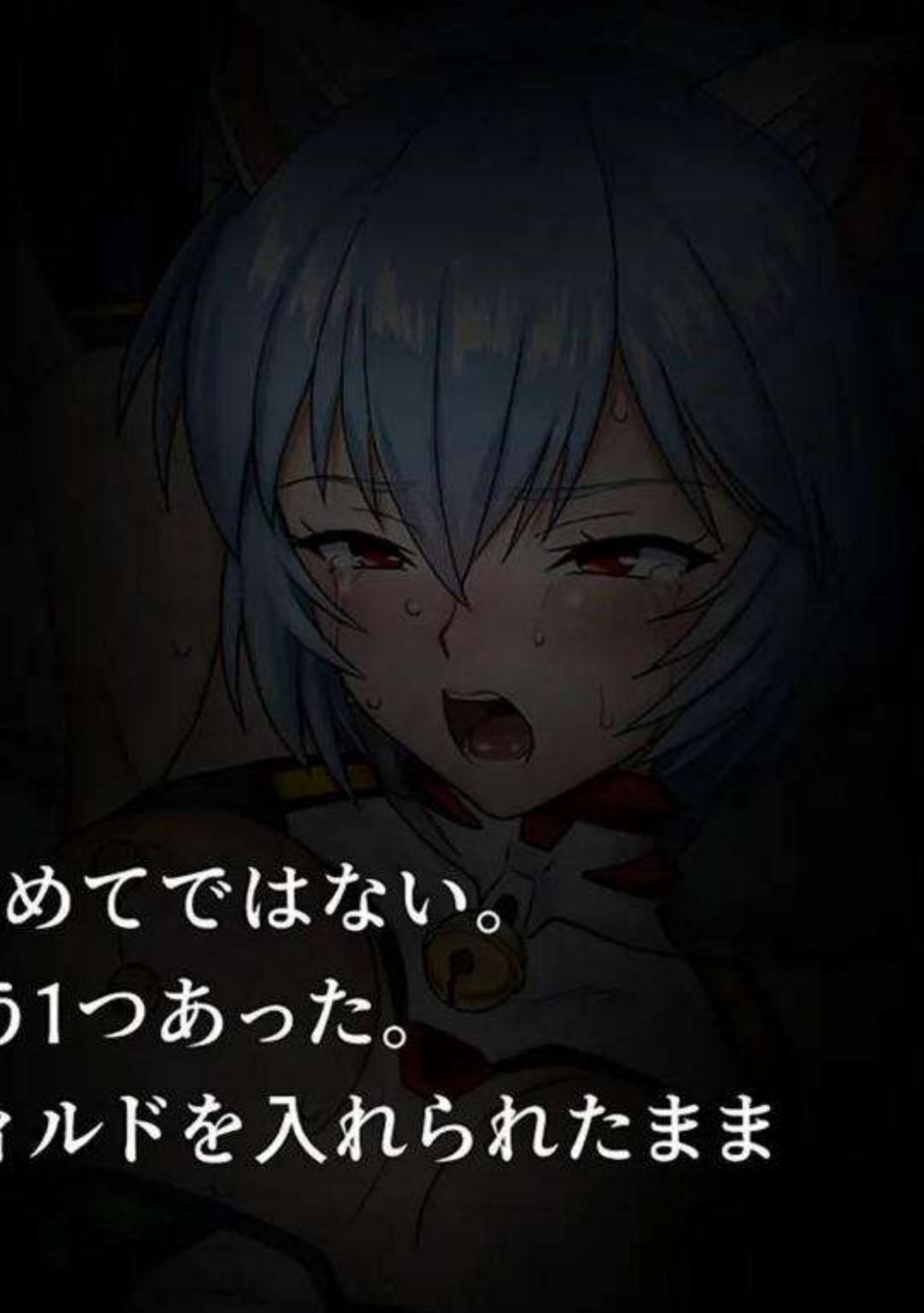
男の大きな手がレイの膣に手首まで収まった瞬間
レイは身体をガクガクと震わせ大きな声を上げた。

「ふう～、入ったねえ、僕のザーメンを
レイちゃんの中に満遍なく塗ってあげるよ」

男はそう言って腕をぐりぐりと回転させる。

「ひいいっ、いやっ、ああああっ!!」

男の腕の動きに合わせて、レイの下腹部
がボコボコと動き出す。



フィストファック自体は初めてではない。
レイが悶絶する理由がもう1つあった。
レイは肛門内にロングディルドを入れられたまま
セックスしていた。
今も男の手がお腹の中を動き回るたびに
腸壁越しにゴリゴリとディルドが擦られ
その刺激がレイの身体を突き抜ける。
「んぐっ、ああっ、あはああ!!」
「そんなに気持ちいいかい、レイちゃん
ほら、このままイってみなよ」
ビクビクと身体を弾ませるレイを見て
感じていると思い込んだ男は
腕をより激しく動かす。



グブッ グジュッ ゴブッ

ドスンドスンと内臓を拳で打ち付けられ
頭が真っ白になっていくレイ。

「んぐっ、はあっ、もうっ、だめえ!!」

汗だくになったレイが身体を強張らせる。

「ひっ、いっ、んぐううう!!」

レイの身体がビクビクと痙攣した瞬間。

グボッ!!

男が勢いよく腕を引き抜いた。

「ひきゃああああ!!」

ブバッ ブシュッ ムリムリムリッ

内臓を引っ張り出されるような衝撃で絶頂を
迎えたレイは、その勢いで肛門からディルドを
ひり出しながら潮を吹いた。

「ひっ、ぎっ、んおお! いぐっ、いぐううう!!」

ぶじゅぶじゅと腸液を溢れさせながら

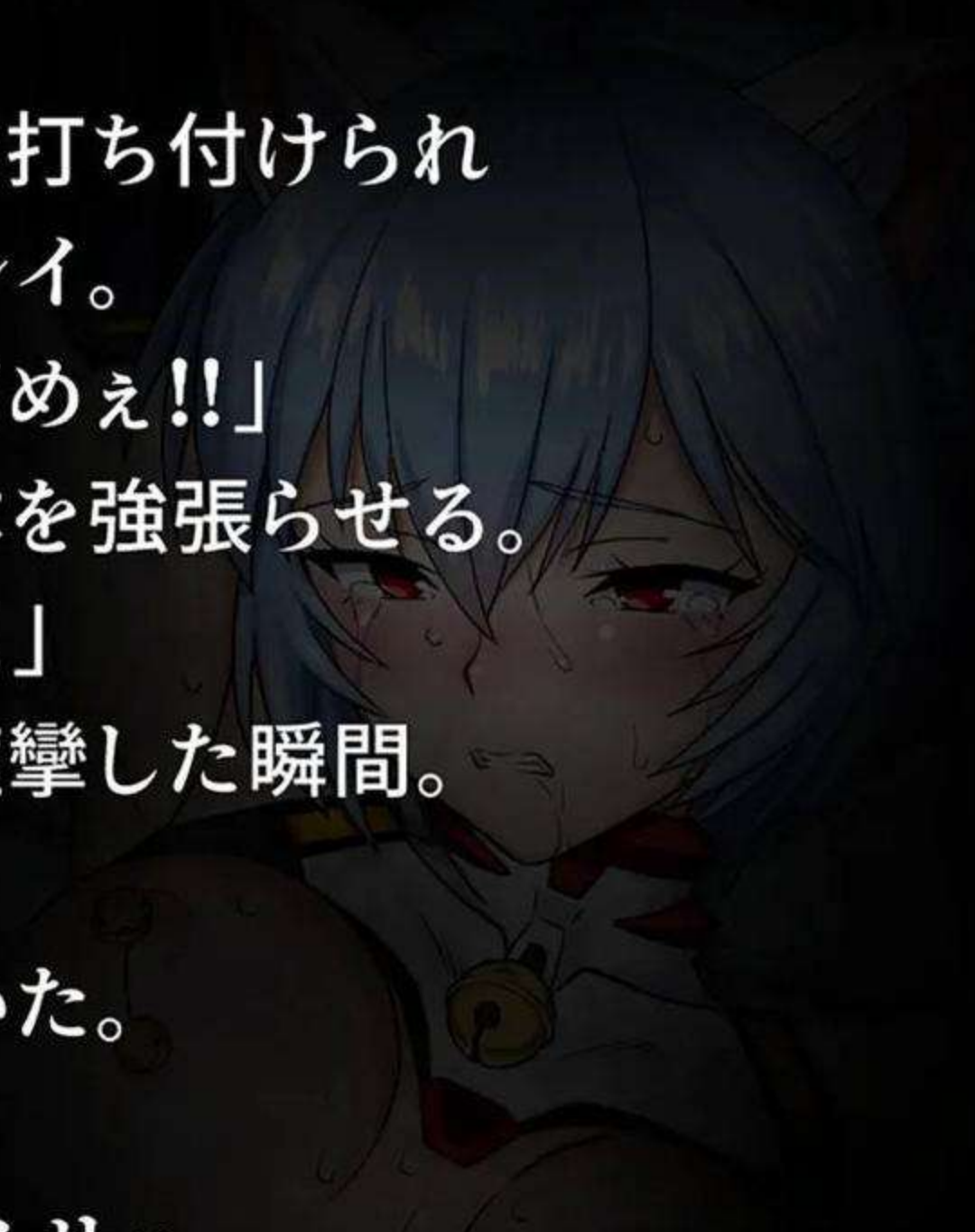
肛門をめくり上げて出てくるロングディルド。

ベルトで拡張されたレイの膣は絶頂で痙攣する
膣粘膜の動きが丸見えだった。

「ぐふふ、レイちゃんはほんとにいやらしい子だなあ」

理性を失ったレイの痴態に

男は満足そうな笑みを浮かべた。





06

限界の先に

ドシュッ ドシュッ ドシュッ

「いやあ!! あああ!! きゃあああ!!」

様々な機器がひしめく研究室内にリズミカルな機械の動作音とアスカの叫び声が響く。

アスカは拘束され、足を大きく開かれた形で宙づりにされていた。

プラグスーツの胸と股間に穴が開けられ乳房と女性器、肛門がむき出しになっておりその無防備に晒された恥部には2本の大きなマシンバイブが突き刺さっていた。

「あああ! ぐうっ! ううう!!」

足を高く上げて宙づりにされているせいで股間に力が入らず、次第に緩んでいってしまう。そこを2本のマシンバイブに高速なピストン運動で責められ、アスカのおま○ことアナルは捲れ上がってガボガボと泡を立てかき回されていた。長時間、膣と肛門内に器具を挿入し内部を拡張されていたアスカ。そこをさらに広げるようにマシンバイブが執拗に責め立てる。



機械に責められ乱れるアスカを
ガラス越しに観察する研究員達。
アスカを見る者、モニターを見つめる者。
マシンバイブに延々と犯されるアスカに
さらに器具が追加される。
メカアームによって運ばれてきたのは
リップスティック大のカプセル。
先端からは太い針が伸びている。
メカアームはそれをアスカの両の乳首と
下腹部に突き刺した。

ブツッ ズズズズッ

「ひぎいいいい!!」

乳首の先端から乳房の中まで届く針。
カプセルから何らかの液体がアスカに注入される。
「あっ、ああっ、ああああっ!!」
グググッと乳房が膨らみ、乳首も大きく硬くなっていく。
さらには下腹部にも薬液が注入され
下半身が熱を持つ。
「ひいっ、んぎいいいい!!」



膣と肛門への激しいピストンが続く。

ブボッ ブボッ ブボッ

「ひああああ!!きゃああああ!!」

おびただしい量の粘液を飛び散らせながら

マシンバイブによってめくり上げられた膣内壁と

肛門内壁が体外へと引きずり出され

真っ赤な肉の筒となってマシンバイブにまとわりつく。

ミチミチミチッ

「あああ!ああああ!!」

もはや半狂乱となったアスカは

身体を動かすことも出来ず

自分の肉体が変化していく様子を見せつけられる。

いつの間にかアスカの尿道へ管が挿入され

同じように薬液が注入されている。

クリトリスが徐々に肥大し、ピンと立ち上がってくる。



マシンバイブがさらに大きなものに交換され
アスカの穴を抉っていく。

グボッ グボッ グボッ

「んおおおお！おほおおおお!!」

拡張訓練のおかげか、薬液の効果か
アスカの膣と肛門は巨大な機械を壊れること
なく飲み込み、受け入れている。

「ここまでは順調のようですね」

研究員がアスカの状態を見守る。

「そうだな、だが、やはり精神が付いてこないか・・・」

最早自我を無くし、叫び続けるアスカ。

「あああ!!ああああ!!」

「では中止にしますか？」

「いや、このボディでどこまでいけるか見よう。

次に進めてくれ」

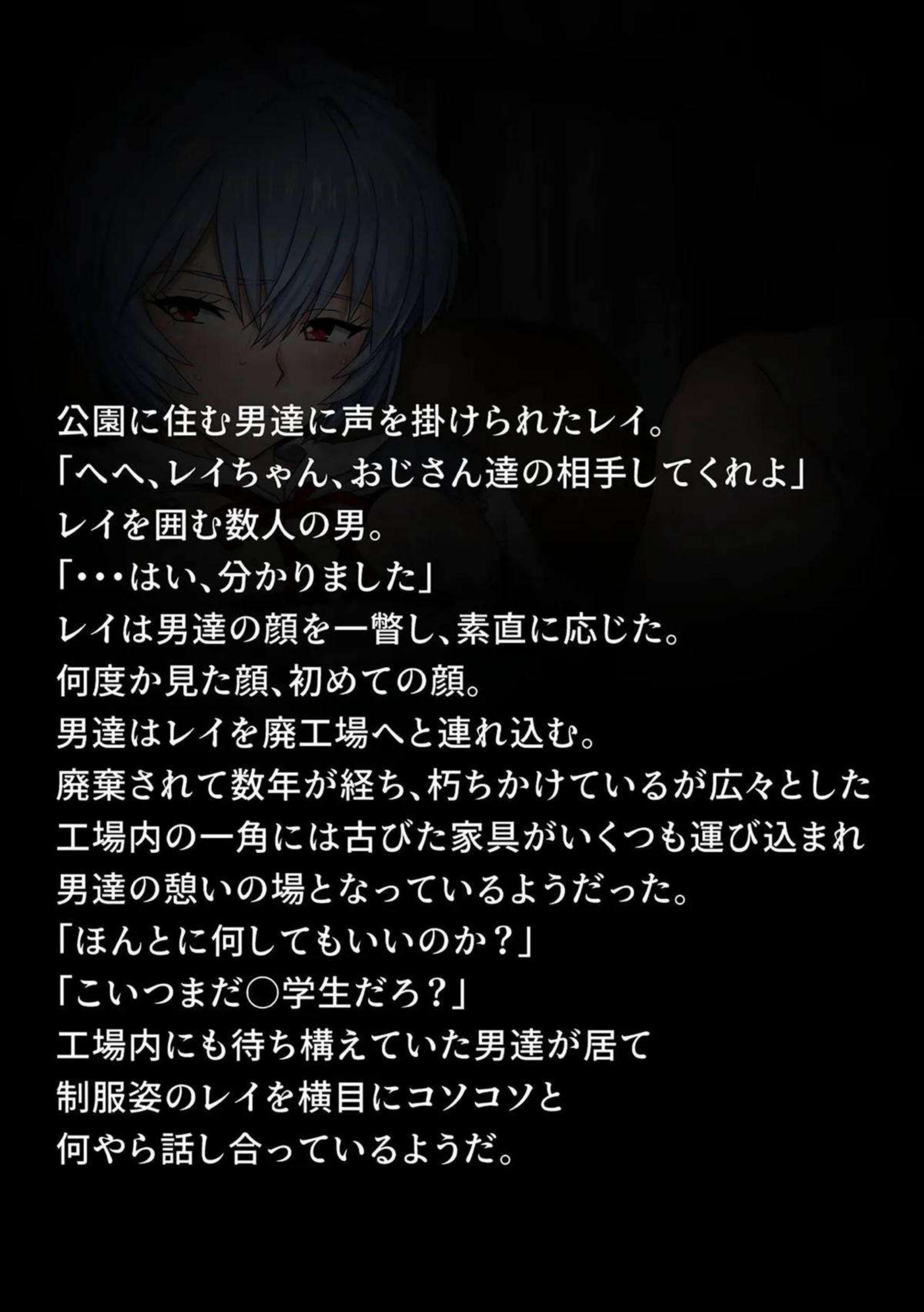
「分かりました」

アスカの前にはさらに凶悪な見た目の
機械が準備されていた。



07

慰み者



公園に住む男達に声を掛けられたレイ。
「へへ、レイちゃん、おじさん達の相手してくれよ」
レイを囲む数人の男。

「・・・はい、分かりました」

レイは男達の顔を一瞥し、素直に応じた。

何度か見た顔、初めての顔。

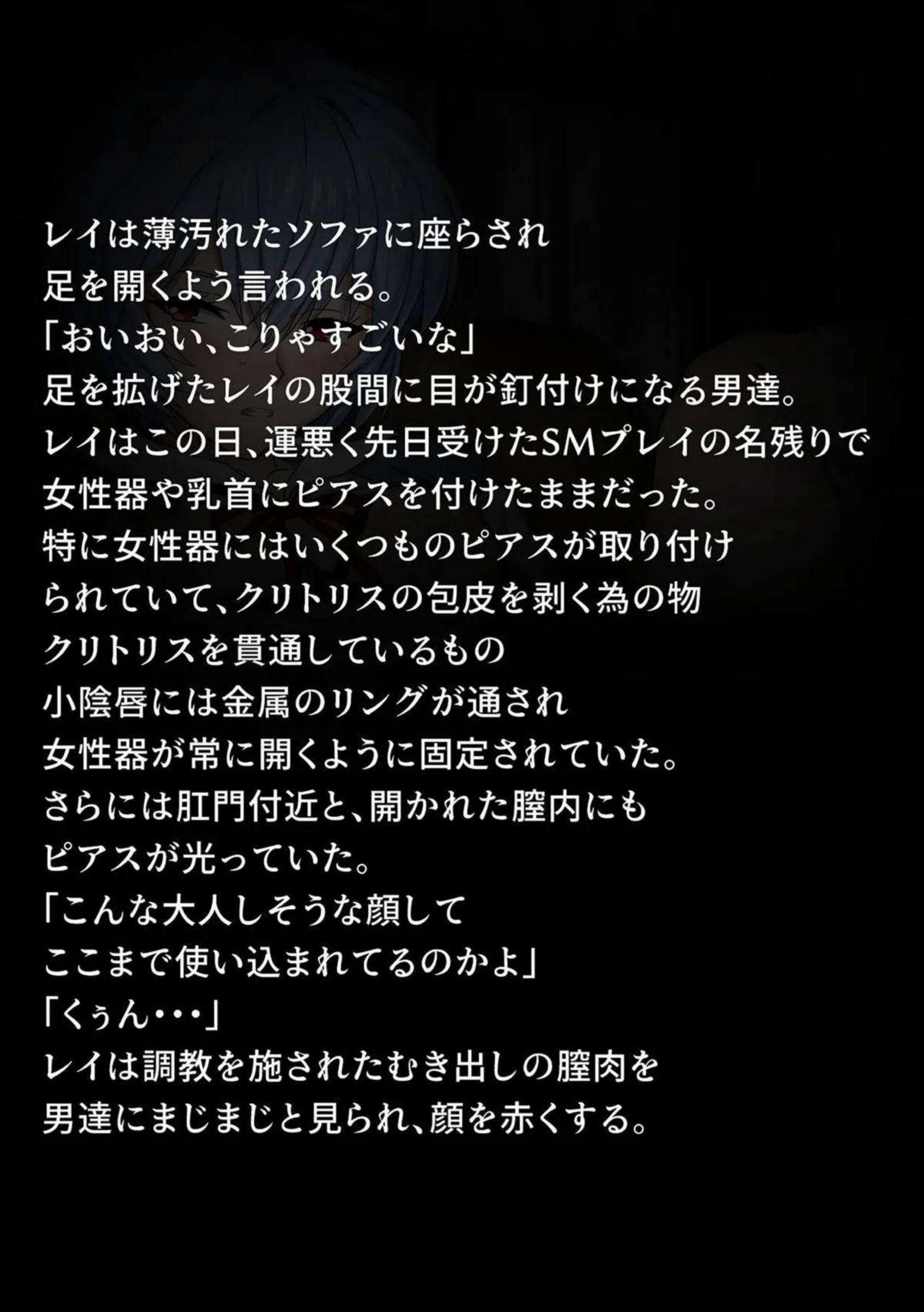
男達はレイを廃工場へと連れ込む。

廃棄されて数年が経ち、朽ちかけているが広々とした
工場内の一角には古びた家具がいくつも運び込まれ
男達の憩いの場となっているようだった。

「ほんとに何してもいいのか？」

「こいつまだ○学生だろ？」

工場内にも待ち構えていた男達が居て
制服姿のレイを横目にコソコソと
何やら話し合っているようだ。



レイは薄汚れたソファに座らされ
足を開くよう言われる。

「おいおい、こりゃすごいな」

足を広げたレイの股間に目が釘付けになる男達。

レイはこの日、運悪く先日受けたSMプレイの名残りで
女性器や乳首にピアスを付けたままだった。

特に女性器にはいくつものピアスが取り付け
られていて、クリトリスの包皮を剥く為の物

クリトリスを貫通しているもの

小陰唇には金属のリングが通され

女性器が常を開くように固定されていた。

さらには肛門付近と、開かれた膣内にも
ピアスが光っていた。

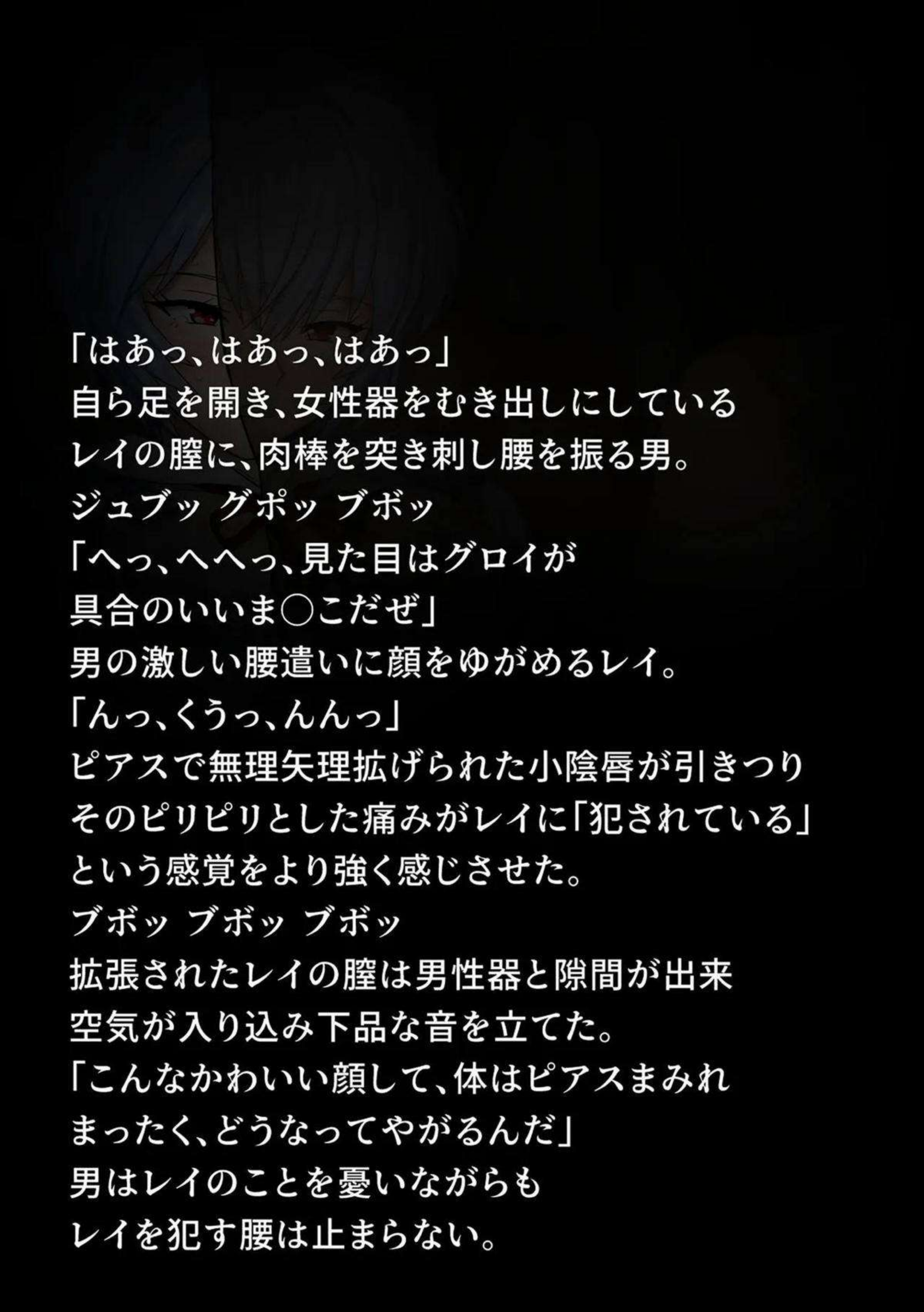
「こんな大人しそうな顔して

ここまで使い込まれてるのかよ」

「くうん・・・」

レイは調教を施されたむき出しの膣肉を
男達にまじまじと見られ、顔を赤くする。





「はあっ、はあっ、はあっ」

自ら足を開き、女性器をむき出しにしている
レイの膣に、肉棒を突き刺し腰を振る男。

ジュブッ グポッ ブボッ

「へっ、へへっ、見た目はグロイが
具合のいいま○こだぜ」

男の激しい腰遣いに顔をゆがめるレイ。

「んっ、くうっ、んんっ」

ピアスで無理矢理広げられた小陰唇が引きつり
そのピリピリとした痛みがレイに「犯されている」
という感覚をより強く感じさせた。

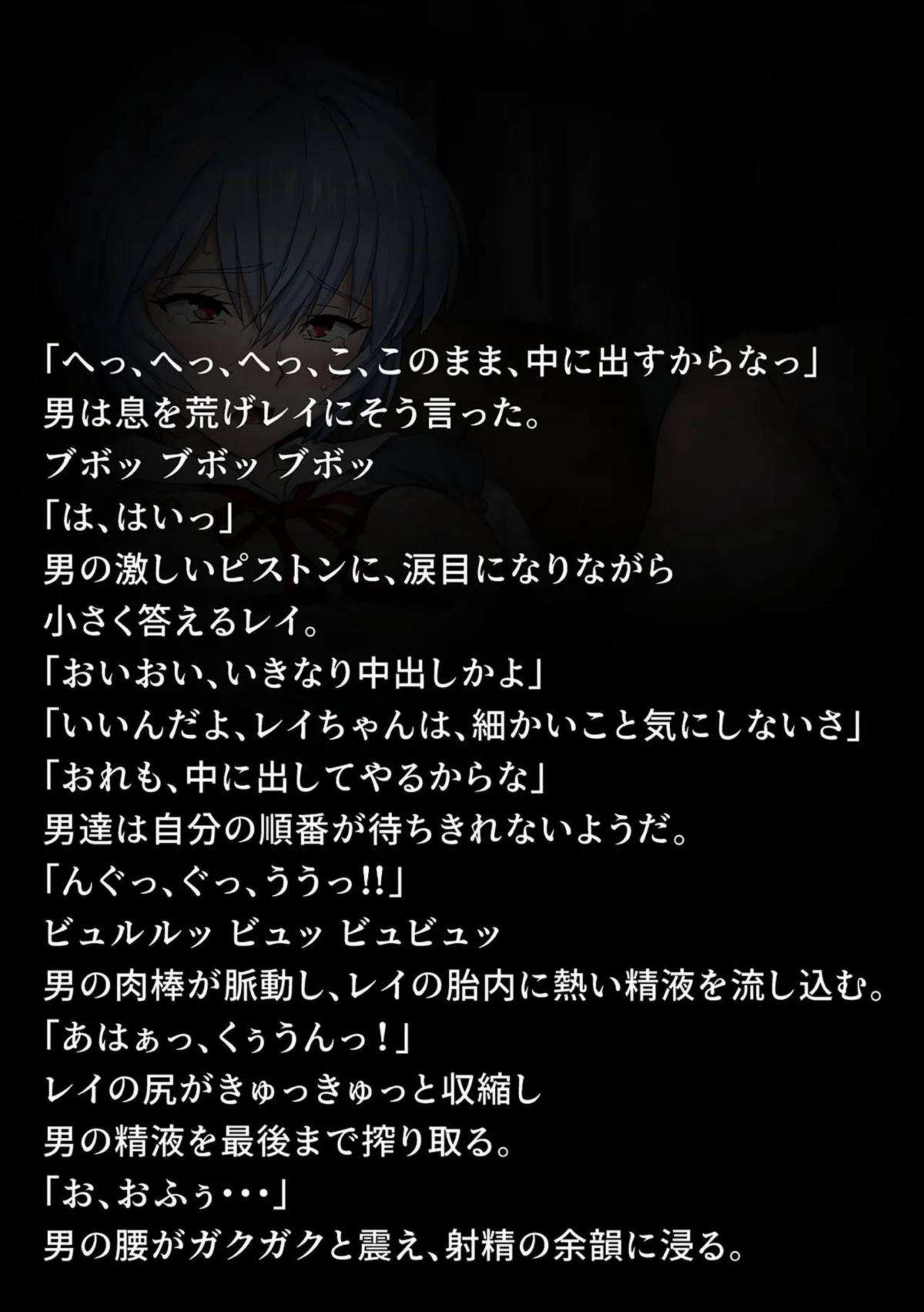
ブボッ ブボッ ブボッ

拡張されたレイの膣は男性器と隙間が出来
空気が入り込み下品な音を立てた。

「こんなかわいい顔して、体はピアスまみれ
まったく、どうなってやがるんだ」

男はレイのことを憂いながらも
レイを犯す腰は止まらない。





「へっ、へっ、へっ、こ、このまま、中に出すからなっ」

男は息を荒げレイにそう言った。

ブボッ ブボッ ブボッ

「は、はいっ」

男の激しいピストンに、涙目になりながら
小さく答えるレイ。

「おいおい、いきなり中出しかよ」

「いいんだよ、レイちゃんは、細かいこと気にしないさ」

「おれも、中に出してやるからな」

男達は自分の順番が待ちきれないようだ。

「んぐっ、ぐっ、ううっ!!」

ビュルルッ ビュッ ビュビュッ

男の肉棒が脈動し、レイの胎内に熱い精液を流し込む。

「あはぁっ、くううんっ!」

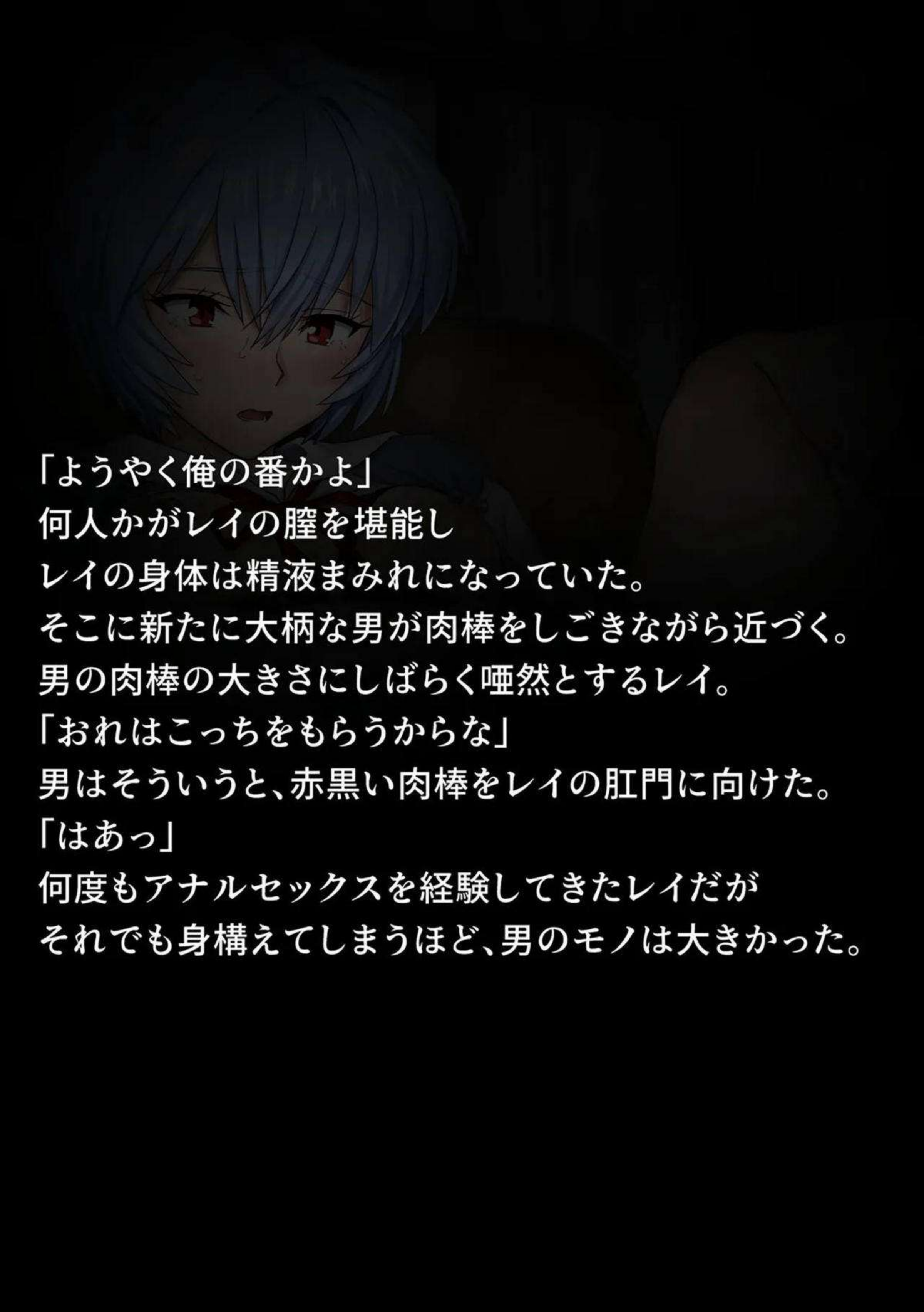
レイの尻がきゅっきゅっと収縮し

男の精液を最後まで搾り取る。

「お、おふう・・・」

男の腰がガクガクと震え、射精の余韻に浸る。





「ようやく俺の番かよ」

何人かがレイの膣を堪能し

レイの身体は精液まみれになっていた。

そこに新たに大柄な男が肉棒をしごきながら近づく。

男の肉棒の大きさにしばらく啞然とするレイ。

「おれはこっちをもらうからな」

男はそういうと、赤黒い肉棒をレイの肛門に向けた。

「はあっ」

何度もアナルセックスを経験してきたレイだが

それでも身構えてしまうほど、男のモノは大きかった。





「いくぜ」

グリッ ズッ ズヌヌヌッ

「あぐっ、うううんっ!!」

メリメリとレイの肛門を押し広げ、長大な肉棒が
レイの尻に突き刺さる。

「うおお、あれが入るのかよ」

レイの白い小さな尻に突き刺さった巨大な黒い肉棒。
その異様さに周りで見っていた男達から歓声が上がる。

「ほら、もう少しだ」

ミリミリミリ...

男は肉棒を根元までレイに押し込んでいく。

「ひぐうっ、あうううう!!」

肛門から直腸の中までみっちりとは異物が詰まる感覚に
レイは大きなうめき声を上げた。



グボッ グボッ グボッ

レイの肛門に突き刺さった巨大な肉塊が
高速で出し入れされる。

「はひいっ、あぐっ、んっ、ぐうう!!」

内臓を殴られるような感覚に苦しそうな声を上げ
それでも足を開き続けるレイ。

その時だった。

ボゴンッ

「あううっ!!」

レイの開かれた膣から肉の塊が飛び出した。

「うわ、なんだっ?!」

まわりの男達から声が上がる。

レイの膣から飛び出したのは子宮頸部。

グボッ グボッ グボッ

「へへへ、そこまで調教済みかよ」

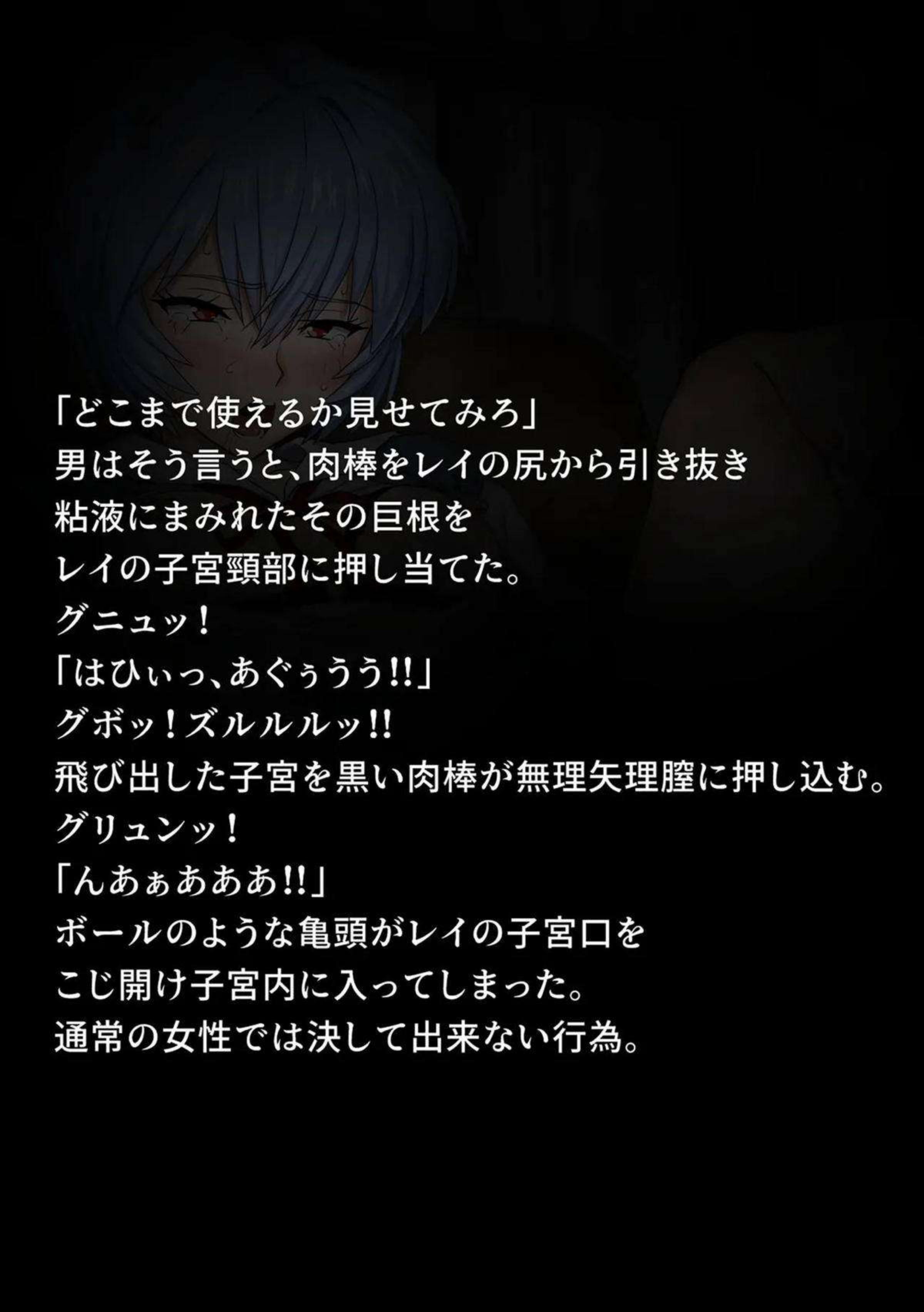
レイのアナルを犯す男はレイから飛び出した
子宮頸部を見つめる。

レイの子宮口にはピアスが通され
開かれた状態で固定されてた

「くうんっ」

女性器の最も奥まった部分の秘密を
晒され顔を赤らめるレイ。





「どこまで使えるか見せてみろ」

男はそう言うと、肉棒をレイの尻から引き抜き
粘液にまみれたその巨根を
レイの子宮頸部に押し当てた。

グニュッ！

「はひいっ、あぐううう!!」

グボッ！ズルルルッ!!

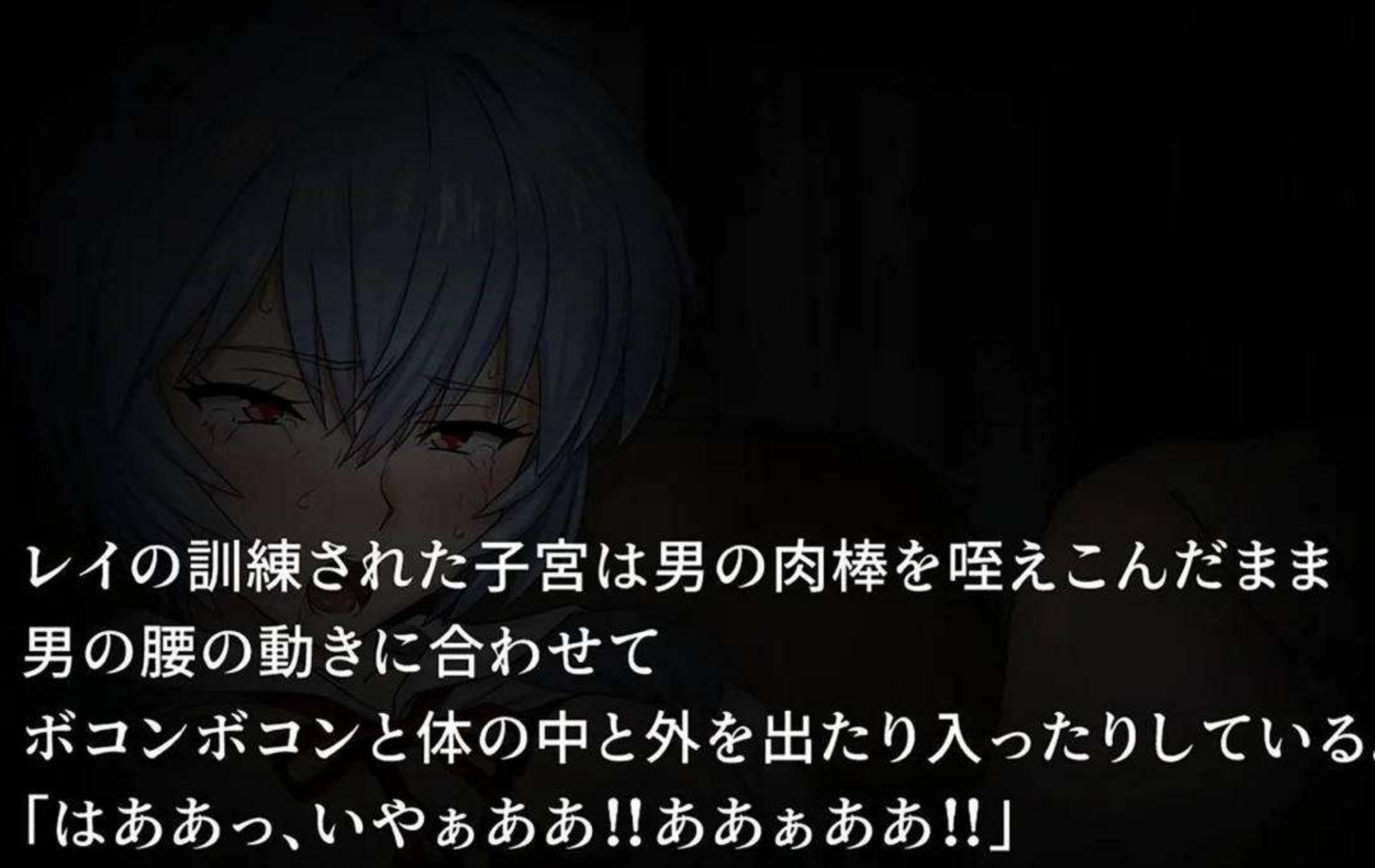
飛び出した子宮を黒い肉棒が無理矢理膣に押し込む。

グリュンッ！

「んあああああ!!」

ボールのような亀頭がレイの子宮口を
こじ開け子宮内に入ってしまった。

通常の女性では決して出来ない行為。



レイの訓練された子宮は男の肉棒を咥えこんだまま
男の腰の動きに合わせて
ボコンボコンと体の中と外を出たり入ったりしている。
「はああっ、いやあああ!! あああああ!!」
内臓を引き出され、下腹部に鈍痛が走る。
涙を流しながら叫ぶレイだったが
自分の股間から伸びる、裏返った膣壁に
ゾクゾクするものを感じていた。
膣の下では先ほどまで巨根に犯されていた
肛門から直腸粘膜が飛び出し
ブジュブジュと腸液を垂れ流している。
「こいつ、どこまで使い込まれてんだ」
「おれもケツに入れてえなあ」
男達の性欲に終わりはない。



08

とある調教ものの動画



闇市場で出回っていた動画。

赤というかピンク色に統一された狭い部屋に
1組の男女。

色白のショートカットの女性、いや少女は
ほぼ裸のボンデージ姿で自らの手で
足を高く上げている。

少女の背後には全裸の大男。

「やあ、レイちゃん、ようやく俺の番だ
楽しませてもらうぜ」

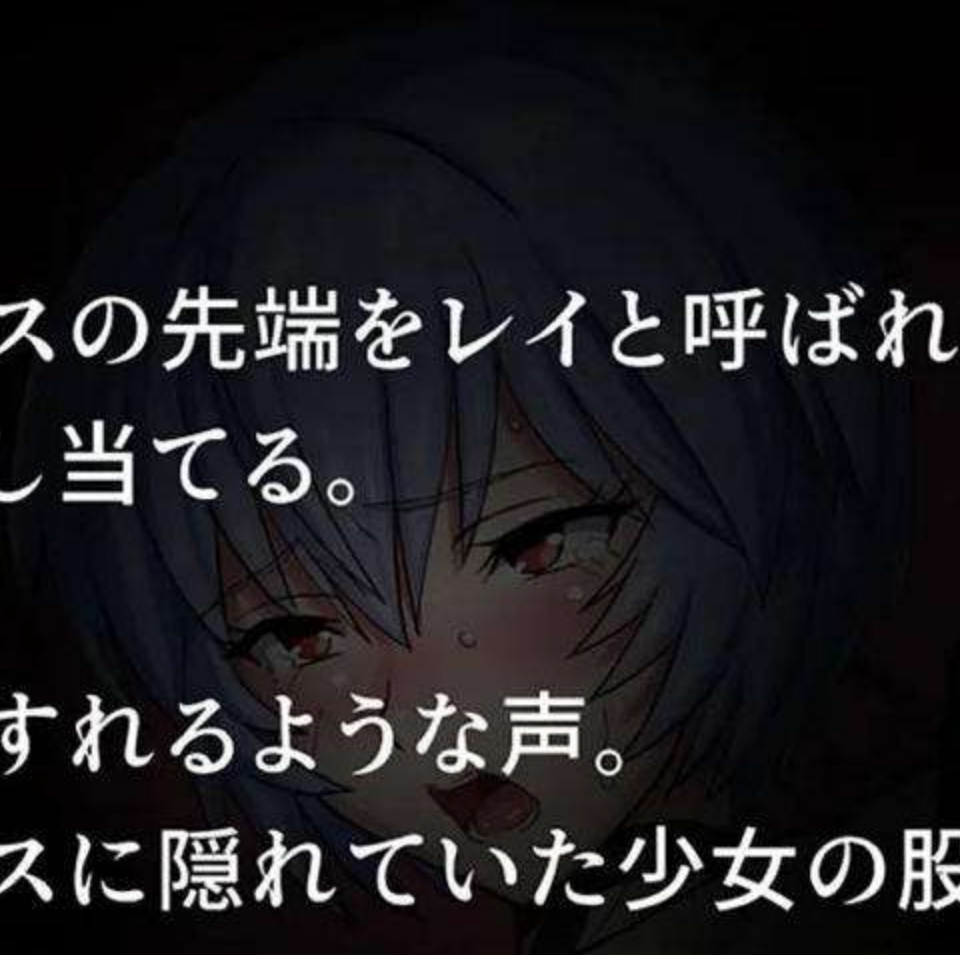
男の声。

男は少女の股間に巨大なペニスをこすり付けている。

恥ずかしそうに顔を赤らめ

身体をビクビクと震わせる少女。





男はペニスの先端をレイと呼ばれた少女の
肛門に押し当てる。

「くう・・・」

少女のかすれるような声。

男のペニスに隠れていた少女の股間が晒される。

少女の女性器はベルトで四方に強引に広げられ
膣内部が丸見えになっている。

奥には子宮頸部までが見えていた。

少女はカメラに向けて足を開いているようだ。

ズグググッ！

男が腰を突き出し、巨大な肉棒を少女の
肛門にねじ込んでいく。

「あぐう！くううう！」

少女が顔をしかめ、苦しそうな声を上げる。

細身の少女の尻にとっても入るとは思われない

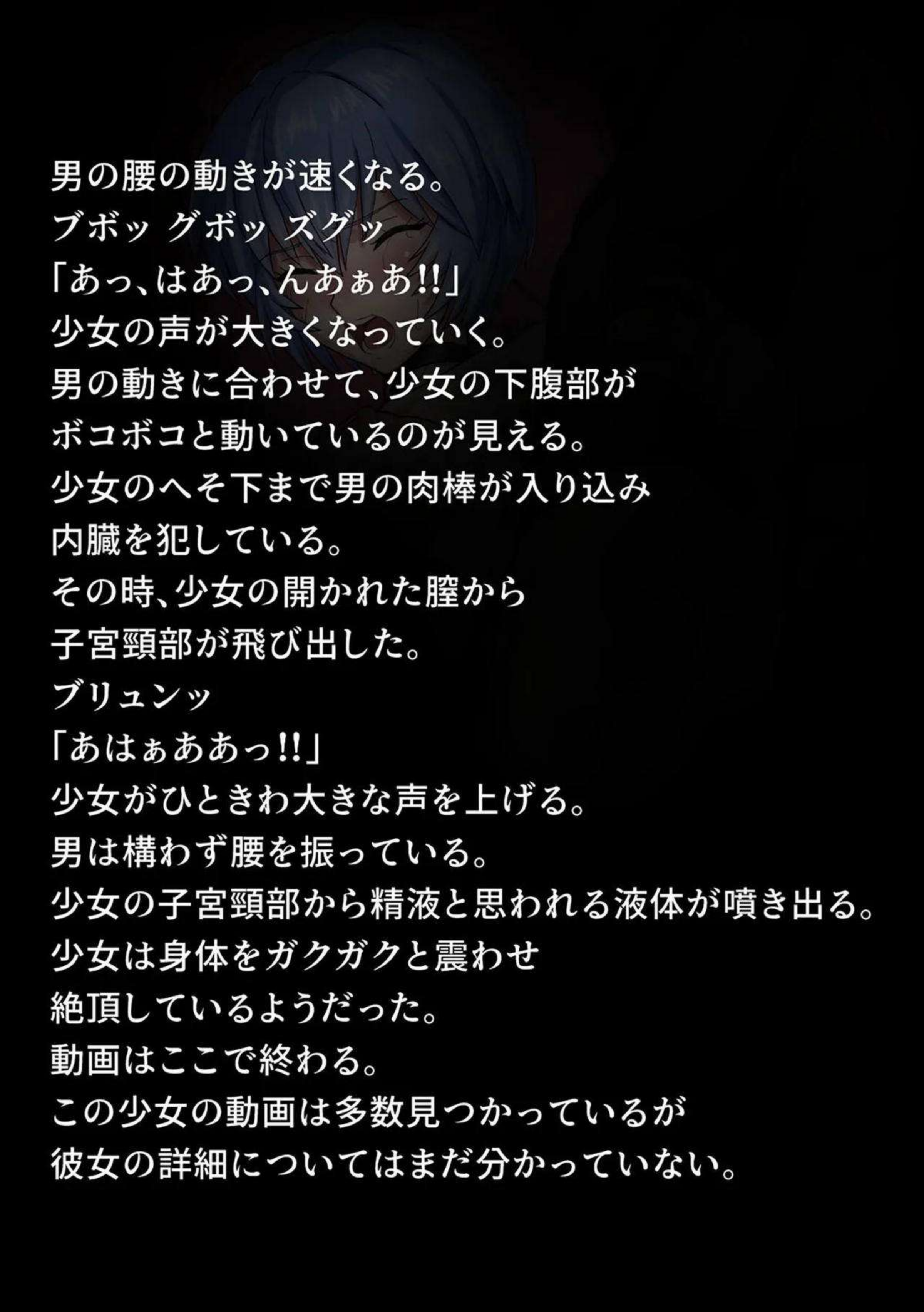
サイズの男根が根元まで収まってしまう。

ゴブッと、少女の開かれた膣から白く濁った
粘液が流れ出る。

すでに相当な量の精液を膣内に射精されていたようだ。

少女の全身を滴り落ちている液体もどうやら精液らしい。





男の腰の動きが速くなる。

ブボッ グボッ ズグッ

「あっ、はあっ、んあああ!!」

少女の声が大きくなっていく。

男の動きに合わせて、少女の下腹部が
ボコボコと動いているのが見える。

少女のへそ下まで男の肉棒が入り込み
内臓を犯している。

その時、少女の開かれた膣から

子宮頸部が飛び出した。

ブリュンッ

「あはあああっ!!」

少女がひととき大きな声を上げる。

男は構わず腰を振っている。

少女の子宮頸部から精液と思われる液体が噴き出る。

少女は身体をガクガクと震わせ

絶頂しているようだった。

動画はここで終わる。

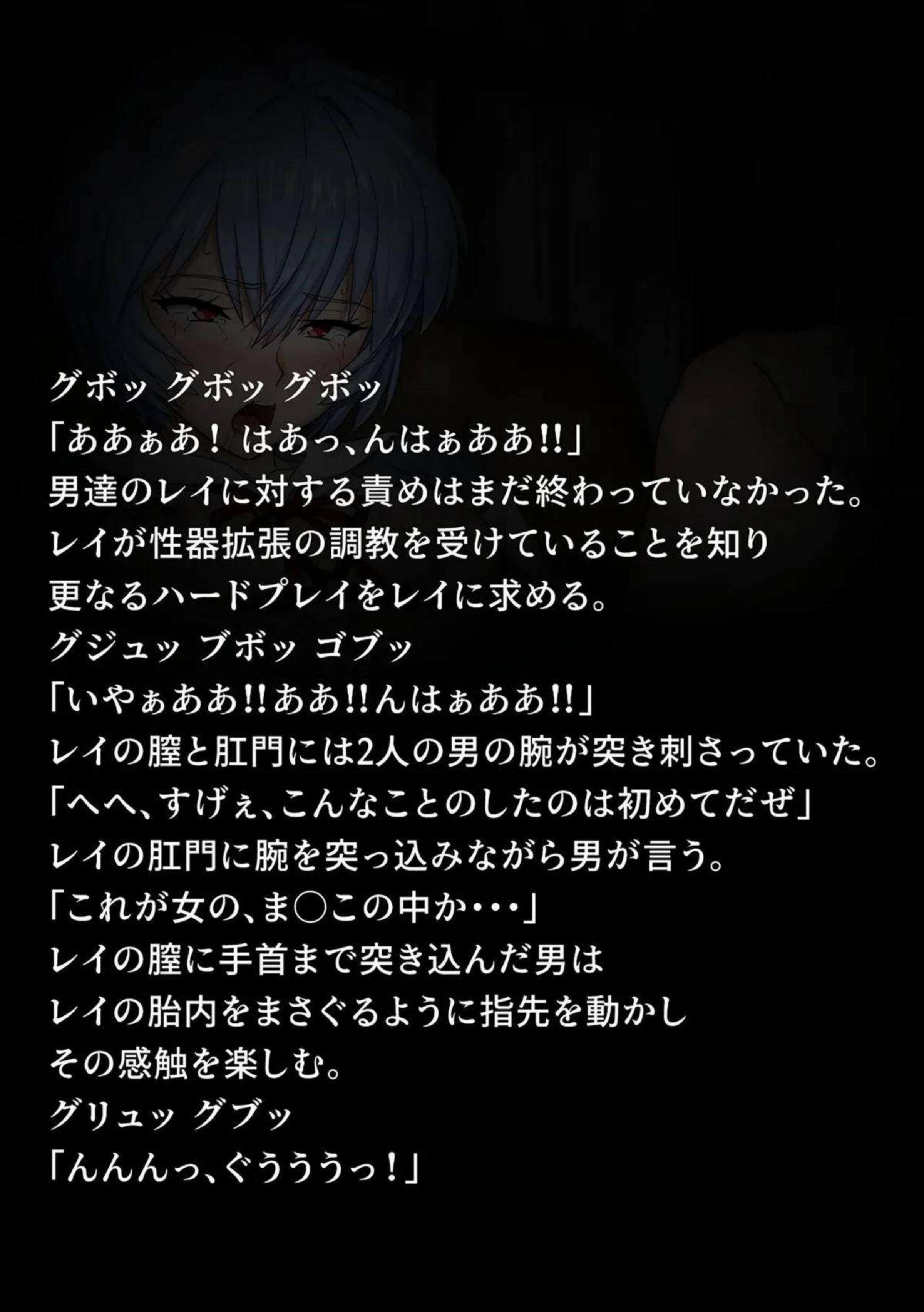
この少女の動画は多数見つかっているが

彼女の詳細についてはまだ分かっていない。



09

欲望のままに



グボッ グボッ グボッ

「ああああ！ はあっ、んはあああ！！」

男達のレイに対する責めはまだ終わっていなかった。

レイが性器拡張の調教を受けていることを知り

更なるハードプレイをレイに求める。

グジュッ ブボッ ゴブッ

「いやあああ！！ああ！！んはあああ！！」

レイの膣と肛門には2人の男の腕が突き刺さっていた。

「へへ、すげえ、こんなことのしたのは初めてだぜ」

レイの肛門に腕を突っ込みながら男が言う。

「これが女の、ま○この中か・・・」

レイの膣に手首まで突き込んだ男は

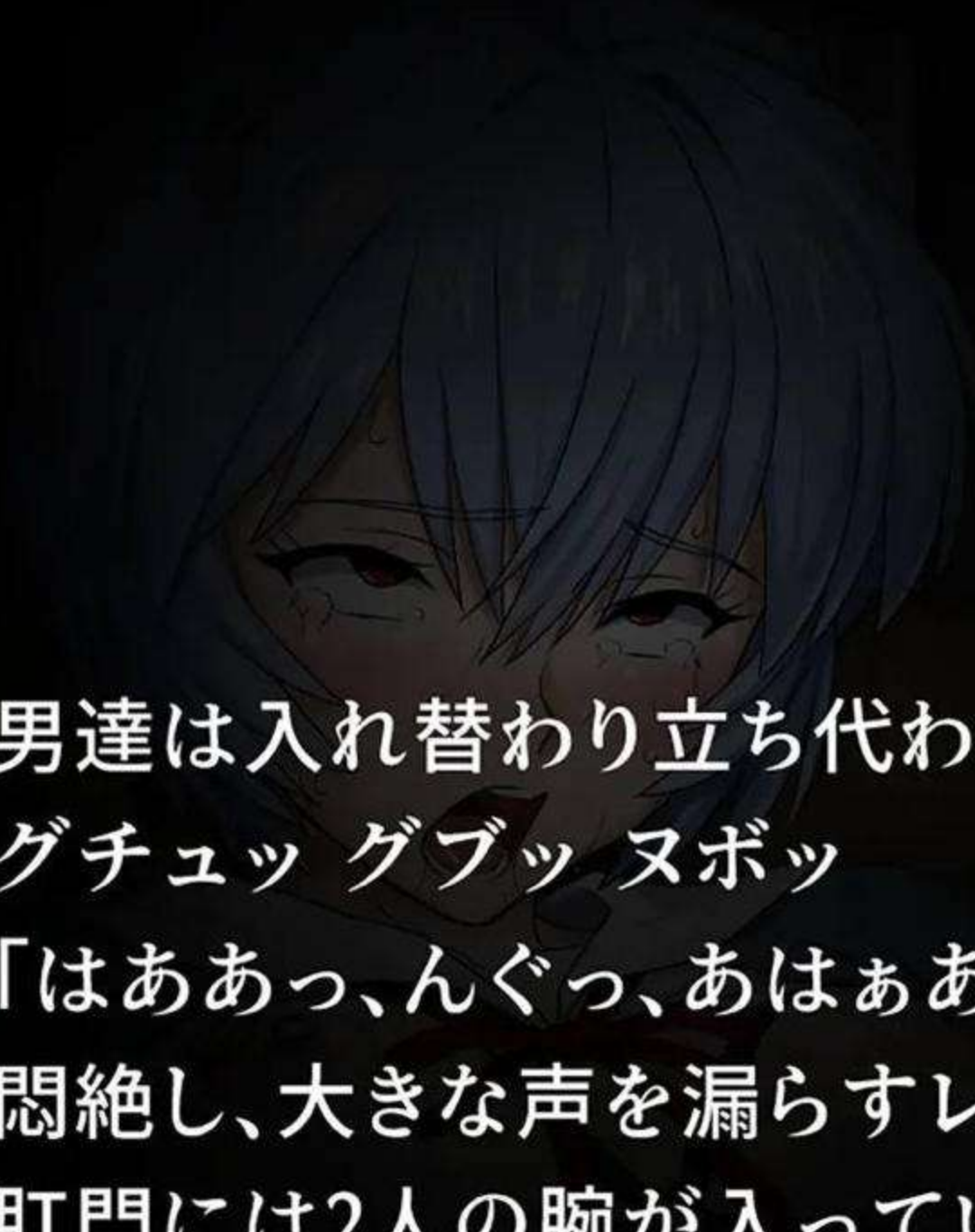
レイの胎内をまさぐるように指先を動かし

その感触を楽しむ。

グリュッ グブッ

「んんんっ、ぐうううっ！」





男達はいれ替わり立ち代わりにレイの穴に群がる。

グチュッ グブッ ヌボッ

「はああっ、んぐっ、あはあああ!!」

悶絶し、大きな声を漏らすレイの膣には1人
肛門には2人の腕が入っていた。

「すげえ、ここまで出来るもんなんだな・・・」

男の太い腕を股間に3本も突き込まれる

細身で色白な少女を目の前に

男は感心したような言葉をこぼす。

「んんっ!!あぐううう!!」

股間を引き裂かれそうな感覚に苦しみ、涙を流すレイ。

だがその表情には恍惚としたものが見え隠れしていた。

